
ゼロの使い魔 転校生日記

橘花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 転校生日記

【Nコード】

N7476R

【作者名】

橘花

【あらすじ】

2年生になったルイズ達は新学期を迎える。そして、2年になったばかりでいきなりの転校生が。

原作崩壊もかなりありますが、がんばって書いていくつもりです。

連載は不定期ですが宜しく。

キャラクター紹介（前書き）

随時更新をしていきます。

キャラクター紹介

ルイ・コンラード・イントウウ・ザ・ローレット

魔法系統 得意系統を持たず、四系統全てを使いこなす天才。

得意魔法 召喚（使い魔の召喚とは別の魔法）（イメージが出来る物ならどんな物でも召喚できる）

使い魔 ヒュドラー（日本ではヒドラと呼ばれている）

趣味 読書と博打（タバサ程ではない）

二つ名 死神（北花壇騎士団に入ったばかりの頃の状態から）

愛刀 子狐丸こきつねまる（時の昭和天皇からの恩師の軍刀）

タバサと同じガリア出身の貴族で南の方を治めている。両親とタバサの両親は昔から知り合いという事もあり、タバサとは幼少期によく遊んでいた。（趣味も殆ど一緒）タバサと同じ、シュヴァリエの称号を持っているが、タバサと似たような理由で授与されている。5歳のときから既にスクウェアクラスの天才メイジだが、平民を見下すような言動をせず、基本的には身分に捉われない言動をする（ジョゼフ1世は別）。天才と言うことに恐れたジョゼフ1世は、跡取り問題の混乱に乗じて殺害を目論むが、両親が庇って彼だけが助かると言うタバサと似た状況に陥り、北花壇騎士団（団員番号は零号）に参加しながらジョゼフ1世を憎み、復讐を誓った。復讐のため地球から第二次世界大戦時（三笠は別）の兵器を数多く召喚し、自分の領地から志願兵を募って反乱軍を編成し、現地での武器・兵

器の生産も行っている。

聖地奪還には興味が無く、逆に聖地に住んでいるエルフを自分の領内にいれて交流等も図っている

愛用の杖は通常よりも少し長く、真つ黒に塗られている。腰には、常に愛刀を携帯しており、滅多に抜かないがその腕は才人のガンダールブの力が働いている最中でも負かしてしまうほど。

何故か才人等のいる地球の事にも詳しいが、その理由は彼も元々は地球の人間であり、太平洋戦争を戦い抜いた海軍大尉だからである。

ヒュドラー

普段は人間の少女の姿で行動しているが、正体は9つの頭を持つ蛇の怪物。人間時には大人しいが、正体を完全に現すと警戒心も上がり、凶暴にもなる上、敵と判断すると相手を絶命させるまで攻撃を止めない。力も人間よりは数倍あり、知能はかなり高い。人間でいる時はローレットの事を「ロー兄」と呼んで慕っているが、彼がピッチの時や見下されたとき等には正体を現し、前述の状態になることがある。魔法学院の者には手を出すなどローレットが命じているため、気絶まではさせるが、殺すまではいかない（この時点でも守られていないが）。

戦闘時にはローレットの命令を忠実に守り、行動を共にしてきた為、信頼関係は相当なもの。

転校生

春が訪れて、トリステイン魔法学院は新年度が始まった。そして、次の日にその魔法学院の入り口には1台の馬車が向かっている。その馬車のカーテンを少し開けて

「ここが、俺の勉強する学院か。」

ルイ・コンラード・イントウウ・ザ・ローレット（以下ローレット）は向かいの少女に話しかける。

「そうですロー兄。」

少女は頷きながら答える。

「ここにはシャルロット嬢が居ると聞いているが、どうなんですか？」

「敬語はやめて下さいロー兄。私は貴方の使い魔ですよ。もっと命令をしても構いません。」

「それで、シャルロット嬢は？」

「私は知りませんよ。貴方によく話は聞きますが、会った事はありません。」

「そうだったな。ごめん。」

そんな会話をしていると、入り口を通過して馬車は学院の敷地内に入

った。そして、入り口の近くまで来ると、執事が扉を開けて

「坊ちやま、到着しました。」

「ありがとうございます。ヒュドラー、行くよ。」

「はい、ロー兄。」

「いいか、絶対に学院の者には手を出すなよ。」

「心得ております、ロー兄。」

「じゃあ、爺や。暫くは会えないけど、家の事は頼んだよ。」

「お任せ下さい、坊ちやま。」

そう言っつて執事は馬車にて来た道を引き返す。降りた2人は魔法学院の学院長室に向かった。

・魔法学院 学院長室・

ローレットは学院長室の扉をノックすると、中から「どうぞ」と言う返事が返ってきた。扉を開けて中に入ると

「おお、君がガリアから転校してくると聞いていたローレット君かね?」

「はい。」

「私は本学院の学院長を務めておるオスマンです。して、後ろの女性
性は誰かね？」

ローレットは少し躊躇ったが、これからお世話になる学院長に隠し
事はしたくないと思い

「私の使い魔です。」

「なんと！？もう召喚をしておるのかね？しかも、人間を。」

「あー、これには事情がありまして。」

「ロー兄。戻っていい？」

「ヒュドラー、頭だけ戻ってくれ。」

それを聞くとヒュドラーは頭だけ変身を解く、頭が9つに分かれ、
蛇の顔になった。

「な！？なんと。」

学院長のオスマンは驚くが、直ぐに軽く咳払いをし

「分かった。複雑な事情があるのだろうが、その件は良からう。転
校を認め、部屋も用意できておる。だが、今日はどうするかね？君
の学年である2年生は使い魔の召喚儀式があるのだが。」

「では、見学だけでもさせていただけますか？」

「分かった。今頃は中庭でやっておるから、案内するよ。」

「学院長自じとは。」

「ワシも、今は暇でな。」

「そうですか。」

「ねえ、ロー兄。変身戻っていい？」

「ああ。」

ヒュドラーは変身を戻して、元の少女の姿になる。

「では、行きましようか？」

・中庭・

「すごい使い魔ばかりですな。」

ローレットは来るなり、驚く。だが、一番驚いたのはやはり人間の使い魔が居ることだった。

「人間とは変わってるな。」

早速、その人間を使い魔にした桃色ブロンドのかかった少女に言う。

「煩い。てか、あんた誰？」

その少女の一言で他の者もローレットを見る。

「これは失礼。私はルイ・コンラード・イントウウ・ザ・ローレット。ガリアからの転校生だよ。」

「て、転校生!?!」

その場に居た全員が驚く。使い魔召喚を指導しているコルベールはオスマンから聞かされているので驚かなかったが、

「それよりも、君も早く召喚したまえ。」

と、コルベールはローレットに言ってきた。

「すみませんが、私は既に召喚しています。」

「え?何処に?」

すると、タバサがオスマンの隣に居るヒュドラーを指差して、

「あそこ。」

と、呟く。全員がその方を見ると。ルイズと同じ人間の少女がいた為、笑い出す。(タバサとルイズ、オスマンとコルベール、才人以外)

「な、なんだよ。ゼロのルイズと一緒にじゃん。」

すると、紅い髪の女性が

「私はキュルケ・ヴォン・ツプルスト。キュルケでいいわ。それよりも貴方、面白すぎよ。まさかここにも人間を使い魔にしている者がいるなんて。」

キュルケは腹を押さえて笑うが、ローレットが指を鳴らすと。ヒュドラーは完全に変身を解く。

「ヒュドラー、殺すなよ。」

ローレットはヒュドラーに念を押してから

「これでもまだ笑う?」

目の前に現れた使い魔の本性を見てその場にいたほぼ全員が啞然とする。そして、顔を横に振った。それを見ると、ローレットは再び指を鳴らす。すると、ヒュドラーは元の少女に戻った。

（しかし、人間の使い魔がいるなんて。ふふ、案外楽しめるかもな。）

ローレットはそう心の中で思う。そして、タバサに近づき

「シャルロット嬢、お久しぶりです。」

タバサは使い魔の近くで本を読みながら

「その名前はやめて、今はタバサだから。」

そう一言言っ。

「タバサ嬢。」

「嬢もいない。」

「タバサ。また一緒の日々が過ぎせませぬ。貴方のお父上が亡くなつたと聞いたときには貴方の身をずっと案じておりました。」

「そう。」

「とにかく、ご無事で何よりです。」

そこへ、コルベールが手を叩き。

「はい、皆さん。とりあえず仲良くしてあげてくださいね。それと、明日は予定通りに使い魔との親睦を深めるために1日休みにします。皆さん、確りと自分の使い魔と親睦を深めてください。それでは、教室に戻りますよ。」

その言葉に全員頷き、教室へと戻った。

ルイズの使い魔

教室に戻り、土系統の魔法を教える授業を始める。

「私はミス・シュブルーズ。今年から新しく赴任してきた教師です。皆さんには土系統を1年間教えることになっております。二つ名は『赤土』。ではまずは基本的な錬金の魔法を教えます。」

そう言つて、ポケットから石を幾つか取り出し、錬金の魔法を掛ける。すると、石は金ぴかに輝く石になった。

「そ、それってゴールドですか？」

キュルケは机から身を乗り出して聞くが、真鍮と聞かされてがっかりする。

「では、だれか二人にやっていただきましょうか。」

シュブルーズは辺りを見回して、丁度目のあったローレットと、ノートを書いていたルイズを指名した。

「き、危険です。ローレットはともかく、ルイズは危険です。」

キュルケは抗議をするが

「危険？錬金のどこが危険なのですか？」

「えーと、その、」

キュルケは返答に困ってしまうが、ルイズは

「やります。やらせて下さい。」

ルイズはつかつかと階段を下りていく、ローレットも同じく階段を下りる。

「なあ、何で危険なんだ？」

ルイズの使い魔の才人はキュルケに尋ねるが

「今に分かるわ。念の為、机の下に潜っていた方がいいわよ。」

キュルケはそう言っつて机の中に潜る。それを見て、才人は言われたとおりに机に潜った。一方、ヒュドラーはローレットの事を見ている

「ロー兄がんばれ。」

思わず応援をしてみうが、タバサが

「貴方も入った方がいい。」

「何で？」

「怪我をしたくなかったら。」

「？」

ヒュドラーは疑問に思うが、皆が潜っているので机の下に潜った。

「では、僕から。」

そう言つて、ローレットは杖を取り出す。比較的太く、真つ黒に塗られた杖を振り、錬金の魔法を掛けた。

「いま、呪文を詠唱しましたか？」

シユブルーズはローレットの詠唱の早さに驚く。そして、目の前の石は真鍮に変わつていた。続いてルイズが杖を振つた。すると、石は揺れだしたかと思うと、次の瞬間には爆発する。

爆煙が収まり、教室中は酷い惨状になつた。壁は半分近くが無くなり、机も大半が被害を受けた。だが、もっとも酷かつたのがシユブルーズである。ローレットは咄嗟に危険を感じてシールドを張つたが、シユブルーズは諸に爆発を喰らつたため、黒板に頭をぶつけて気絶している。

「酷いなこりゃ。」

ローレットも余りの惨状に目を疑う。

「全く、ゼロのルイズ。先生が伸びちやつたじゃないの。」

ルイズは全く気にしなずにハンカチで顔を拭き

「ちよつと失敗しただけじゃない。」

(いやいや、ちよつとで教室一つは無くなりませんよ。)

ローレットは心の中でそう思った。

そんな訳で、午後の授業は中止されて1日の授業が終わった。

ちなみに、才人は爆発に運悪く巻き込まれた不運な被害者の一人となり、気絶してしまった。

・ローレットの部屋・

「もう、もしもの事があつたらどうするお積りでしたか？」

ヒュドラーは少し怒り気味に言う。

「全くの予想外だったよ。まさか、あのタイミングで爆発するとは。」

「それにしても。まさか。」

「ああ、そのまさかだろう。」

二人はこの時点でルイズと呼ばれていた少女が伝説の虚無の使い手であることの推測を立てた。

「それよりも、外が騒がしくない？」

外では数人の走る音が聞こえる。

「見てみよう。」

そう言つて、ドアを開けるとそこには才人が居た。

「すまない、入れてくれ。」

「え？別にいいけど。」

才人はそれを聞くとローレットの部屋に入る。

「どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもない。ここは何処だ？」

「トリスティンの魔法学院。」

「あーあ、ルイズと同じ事言ってるし。」

「それよりもどうしたんだ？」

「俺は何でここに居るんだ？」

「君が入ってきたから。」

「そうじゃなくて、俺はどうしてこんな学院に居るんだ？」

「ルイズという生徒に召喚されたから。」

「あー、もー、何でこんな訳の分からない世界に居るんだよ。家に帰つて、ネットやって、ゲームやっている、平凡な高校生が何でこ

んな世界にいるんだ。」

「それよりも君。」

ローレットは召喚魔法を唱える。すると、才人の目の前に剣が現れる。

「それを握ってくれないか？」

「え？」

そう言いながらも、才人は剣を握る。すると、左手のルーンが光る。

(やはり。)

ローレットとヒュドラーは推測から確信に変わった。そこへ、部屋にルイズとキュルケ、タバサとギーシュが入ってきた。すると、ヒュドラーは変身を解いて

「ご主人様の部屋にノックも無しに入るとはいい度胸だな!!。」

変身を解いて、本来のヒュドラーの姿になる。ローレットとタバサは驚かないが、キュルケとルイズ、ギーシュは驚く。

「ちょ、ま、悪かった。すみません。」

ギーシュは敵わないと思って土下座で謝る。

「ご、ごごご、ごめんなさい。ば、ばば、馬鹿犬を連れ戻しに来ただけだから。」

ルイズは驚いて言葉を噛みまくる。

「ちょ、ちょっと面白そうだから、その人を追っかけて来たんだけど。お邪魔だったかしら？」

キュルケは出来るだけ冷静に答えるが、最初の方は声が震えている。ローレットは才人の剣を召還すると、指を鳴らす。すると、ヒュドラーは普段どおりの少女の姿に戻る。

「だ、そうだよ才人君。君を連れ戻しに来たそうだ。」

「そ、そんな。」

ローレットは才人に操りの呪文を掛けて、ルイズの部屋まで送った。出て行った後、上から才人の悲鳴が聞こえるが、それを気にせずに

「やっぱり彼はガンダールブのようですね。」

「ああ。全く、今日は予想外の事だらけだよ。」

そう言ってローレットはベッドに入る。

「おやすみロー兄。」

「ああ、また明日。」

ローレットは杖を振ると、ランプの明かりが消えて、月明かりに照らされる窓にカーテンが掛かる。しかし、もう一度杖を振ってカー

テンを開けたまま寝ることにした。

才人VSギーシュ

次の日に

「おはよう、ヒュドラー。」

ヒュドラーは早く起きて、着替えを置いて待つていた。それを着て、食堂へと向かう。

- 食堂 -

ローレットは普通に自分の席に着く。ヒュドラーは外に用意したご飯を食べに中庭に向かう（もちろん、出来る限りの豪華な食事にして）。

そして、暫く待っているとルイズと才人が来る。

「昨日はありがとう。」

「ん？何の事？」

「この馬鹿犬を部屋に送ったこと。」

「ああ、気にするな。」

才人は手に傷を負っている。

（なるほど、昨日は散々な目にあったようだな。）

ローレットは才人に同情の念を送る。

「それより、貴方は何者なの？あんな高位の魔法を使えるし、使い魔も皆より早く召喚しているし、タバサの知り合いみたいだし。」

「あれ？まだ言っただけ？僕はガリアの人間だよ。」

「ガ、ガリアの？」

「そうだけど。」

「知らなかった。じゃあ、タバサも？」

「そう。」

「それで？何であんな高位も魔法を使えたわけ？」

「それは秘密。」

「な、何よ!？」

「それよりも席に着いたら？皆待っているよ。」

ルイズは辺りを見回すと他の者は席に着いており、早くしろよという目でルイズを見ている。ルイズも席に着いたところで才人は

「なあ、俺の飯は？」

ルイズは床を指差す。それにローレットも目をやると、そこには皿

があり、その上にパンが1枚乗っている。

「お前、使い魔を何だと思ってるんだ？」

「只の下僕。」

「酷いな。」

ローレットは再び才人に同情の念を送る。

そして、食事前の祈りの声が唱和され、食事が始まる。ローレットは余りにも才人が理不尽な扱いを受けている為、ルイズに気づかれないように少し自分の肉を分けてあげた（ルイズにはサイレントの魔法を掛けて、才人のお礼を聞こえないようにして）。

（それにしても、こいつは本当にガンダールブの力を使えるのだろうか？）

ローレットは少し疑問を浮かべる。

食事が終わり、外に出ると、そこにはヒュドラーが待っていた。

「ロー兄、ありがとう。食事はなかなか豪華だったよ。」

「ああ、別にいいよ。」

「それよりも、才人とやらはどうだった？」

「余りも理不尽な扱いを受けていたから肉を分けてやった。」

「やさしいね。」

「つらい過去を背負っているからね。どうしても、平民には優しくしてしまっただよ。」

「貴族にもでしょ。」

「まあな。」

「それはそうと、今日はどうするの?」

「え?」

「ほら、今日は使い魔との親睦を深める日だけど、私たちは永くの付き合いだから必要ないでしょう。」

「まあ、他の者の使い魔を見るのも勉強にはなるぞ。」

そう言っつて二人は他の貴族が使い魔の交流をしている中庭へと移動する。

・中庭・

「昨日も見たけど、本当にいろんな使い魔がいるな。」

「それよりも、ロー兄の言うタバサはどんな使い魔を召喚したの?」

「韻竜。」

ローレットは小声で言う。なぜなら、人間の間ではとっくに韻竜は

絶滅したと思われるからである。だが、

「ええええ！？韻竜！？」

ヒュドラーは大声で言ってしまった。それに皆が振り向くが

「ああ、えーと、い、印鑑だよ。印鑑。ほら、こいつ馬鹿だから、印鑑の事を韻竜と言ったんだよ。」

ローレットが必死に誤魔化し言う。尤も、印鑑自体も他の貴族は知らないのだが、ローレットに口答えすると使い魔が怒ると思って言い返さなかった。

(ヒュドラー。)

(は、はいい！！。)

(後でお仕置き。)

(そんなあ。)

そう二人は心の中で会話をした。

だが、向こうではギーシュと才人が揉めていた。

(なんだろう?)

ローレットはそこに行くと、どうやら昨日の事と、二股を掛けているのがどうとかで揉めていた。

「ねえ、ロー兄。チャンスなんじゃない？」

「どういう事？」

「どうせ、あのギーシュって奴は決闘を申し込むだろうから、あの才人に武器を持たせたら？」

「それはいい。」

ローレットは賛成をする。そして、二人の予想通りにギーシュは才人に決闘を申し込んだ。

・ヴェストリの広場・

「逃げずによく来たねえ。」

ギーシュは才人に誉め言葉を言う

「誰が逃げるんだよ。さあ、来い！！。」

才人は構える。ギーシュは杖をだし、バラの花弁を1枚落とす。そして、それが地面に付くと、青銅の戦乙女が現れる。

「な!？」

才人は驚き

「てめー、汚いぞ。」

ギーシュは不敵に笑いながら

「何が汚いんだい？メイジが魔法で戦うのは当然じゃあないか。」
それに見ている他の貴族たちも同意する。

「ちなみに、僕はギーシュ・ド・グラモン。二つ名は青銅。青銅のギーシュと呼ばれている。」

「くそ、目にももの見せてやる。」

そう言つて才人は戦乙女に殴りかかった。しかし、流石は青銅、硬くて効かない。

「ちくしょう。」

才人は後退をして悔しがる。

「今度はこっちから行くよ。」

ギーシュは才人を指差すと、戦乙女は才人に向かっていき、殴る。硬い青銅だけあってパンチは強力であり、才人は地面に倒れる。

「なんだ？もう終わりか？まあ、謝るんなら許してあげてもいいよ。」

ギーシュは平常心を保っているが、流石に無抵抗な者を痛めつけるのはプライドに反するため、降伏を促す。

「だれが、謝るんだって？」

才人は立ち上がる。だが、それを見ると戦乙女はさらに殴りかかった。しばらくコンボが決まり、才人は地面にうつ伏せに倒れる。そこにルイズが割り込んで

「ギーシュ、もう許してあげて。」

「駄目だ。そいつが謝るまでは僕は許さない。」

ギーシュは答えるが、内心はもう立たないでくれと願っている。

「ねえ、ロー兄。そろそろ良いんじゃない？」

「そうだな。」

そう言ってローレットは観衆の中に入り、

「おい、ギーシュ。その平民は武器を持っていないんだ。だから、武器を渡してもいいか？」

ローレットはギーシュに問う

「ま、まあ良いだろう。」

それを聞くと、ローレットは召喚魔法を唱え、地球で使われていたシヤシュカを才人の目の前に出す。

「まだ、戦う意思があるならその剣を取れ。」

ローレットは才人に言う。他の貴族は見たこともない剣に疑問を持つ

「君は珍しい剣を出すねえ。」

ギーシュが聞いてきたが

「まあ、切れ味は相当いいぞ。」

「あんな物でもかね。」

「見てれば分かる。」

そして、才人はその剣を取って、目の前にいた青銅の戦乙女を切った。

「な!？」

ギーシュは驚き、少し後退した後5体の戦乙女を出す。

「はあああ!」

才人はそれらも切り、ギーシュの目の前に行き、剣を突きつけながら

「降参か?」

ギーシュは地面に足を付いて

「ま、参った。」

ガツクリと肩を落としてしまう。その時にも、ローレットは才人の使い魔のルーンが光っているのを見ていた。そして、その様子をマ

ジックアイテムの鏡で見ていたオスマンとコルベールは

・ 学院長室 ・

「どうやら、君の言う事は本当のようじゃな。」

コルベールが才人のルーンに疑問を持ち、調べたところ、それは伝説の使い魔の一つのガンダールブのルーンであることに気づき、オスマン氏に伝えに来ていたのだ。

「しかし、これは大発見ですよ。伝説の使い魔が復活したんですよ。王宮にはどう説明するんですか？」

「コルベール君。この事は内密にして、ワシに全てを任せてくれな
いか？」

「え？しかし、」

「使い魔の少年とその主人であるヴァリエール君を守るためじゃ。」

「はあ、分かりました。」

教師だけに生徒の安全は守らなければいけない。その為、コルベールは納得せざるを得なかった。

・ ローレットの部屋 ・

「やっぱり、もはや疑いようがないな。」

「うん、ロー兄は気づいていて貴族が負けるように仕組んだから酷いよね。」

「もはや、貴族だの平民だのは関係ない時代になり始めている。これからは貴族だろうと平民だろうと協力していかなければいけない時代だよ。そういう意味では、才人君の決闘も無駄ではなかっただろう。」

ローレットは窓から見える二つの月を見てそう言った。

「でも、貴族で生まれた貴方は悲惨な目にあっているからね。」

「ああ、元の世界に帰りたियो。」

「元の世界？」

「いや、何でもない。」

ローレットはベッドに入り。

「もう寝るぞ。」

「うん、お休み。」

「ああ。」

ヒュドラーは自分の寢床に入ったのを確認すると、杖を振り、ランプを消す。例によって、カーテンは開けておいた。

そして、ローレットは月の方を向いて

(もしかして、才人は俺の国の人間では？俺と同じ日本から来たの
では？)

そうローレットは思う。

ローレットの過去

次の日に、目覚めるとヒュドラーが手紙を持っていた。

「なんだその手紙は？」

「ジョゼフの使いが貴方につて。」

「あの無能王から？」

手紙の封を切つて、中を読む。その内容は

『反乱を企む者たちがいる。その者たちを村ごと焼き払え。』

「なんて内容なの？」

ヒュドラーは聞いてくる。

「何でもない、ただの仕事だ。オスマン氏に2日間の休学届けを出しに行つてくる。」

「なら私も行くよ。」

「いや、外で待っていてくれ。」

「そう。」

そう言うと、ローレットは学院長室に向かう為に着替へ、道具を持って学院長室に向かった。

ノックをすると、中から「どうぞ」と女性の声がする。

(え？女性の声)

そう疑問に持ちながら、扉を開けると中にはオスマン氏と見たこともない女性が居た。

「やあ、ローレット君。彼女を見るのは初めてじゃろう。彼女はミス・ロングビル、ワシの秘書をしてもらっている。」

「宜しくね、ローレット君。」

「あ、はい。宜しくお願ひします。」

「所で、こんな時間に何の用かね？」

「2日間の休学をお願いしに来ました。」

「また、こんな時季に一体何だのかね？」

「いえ、ただ国の事です。」

「まあ、他国の事情はワシ等は関知しないから理由は分からんが、大事なことなのじゃろう。宜しい、休学を認めよう。」

「ありがとうございます。」

ローレットはお辞儀をして、学院長室から出て行った。

「あの子、何か様子がおかしかったのですが。」

「ミス・ロングビルも気づいたかね。あの年でスクウェアクラスの天才メイジと呼ばれておるが、ワシも彼の二つ名を聞いた時には驚いたよ。」

「なんて二つ名でしょう?」

「死神、死神のローレットと言っておった。」

「死神?」

「恐らく、それほどまでに辛い仕事をしておるんだらう。そして、あの年でミス・タバサと同じくシュヴァリエの称号を持っておる。並みのメイジではないよ。」

「そんな人間がなぜこの学院に?」

「それは分らんが、少し様子を見ることにしよう。」

・魔法学院 出口の門・

「遅かったねロー兄。」

「ああ、すまない。」

「それよりも、早く行こうよ。」

「分かったよ。」

ローレットは召喚魔法を掛ける。現れたのは、何と第二次大戦中のドイツ急降下爆撃機「シュトゥーカ」であった。そして、ステルスの魔法を掛けて透明にし、乗り込んだ。

「準備はいい？」

「いつでもいいよロー兄。」

ローレットはエンジンを掛けて、暫く暖機運転をする。エンジンが暖まったところで、出力を上げて滑走する。十分な離陸速度まで達したのを見て、操縦桿を引いて離陸した。

「やっぱりロー兄の出すひこうきって早いな。」

後部の機銃手席に座るヒュドラーは座席越しに言う。

「これでも遅い機体だよ。」

G型で、両翼には37ミリ機関砲が搭載されている。この機体の最高速度は375キロ位である。

「高度をとるぞ。」

一気に上昇して1000フィートまで到達する。そして、コンパスと地図で方角と時計を使って速度を計算をし、現在位置を割り出しながら指定された村に向かう。

「そろそろだな。」

機体を降下させて、下を見る。

「あれか。」

見えたのはガリアでは小さい村である。

（あそこに、我々の反乱軍が。）

ローレットは村の近くにある草原に機体を降下させる。着陸態勢に入った所で、機体を水平にし、スロットルレバーでエンジンの出力を下げる。こうすることで、機体は降下していき、なおかつ速度を出さずに降下させることができる。

「ランディング。」

車輪が接地したのを確認して、さらに出力を下げ、機体を停止させた。風防を開け、ローレットとヒュドラーは機体から降り、村へと向かった。

- サミュエル村 -

村を歩いていると、貴族が来たということで大騒ぎになってしまった。そこで、近くに居た20代くらいの青年に

「ちょっとすみません。酒屋は何処ですか？」

「さ、酒屋？」

「はい。」

「それならあちらですが。」

青年が指差した方を見ると、「マガギャゾディスアコール」と言う怪しい名の酒屋があった。

「どうもありがとうございます。」

そう言つてローレットは青年に頭を下げる。頭を下げられた青年は貴族に頭を下げられたと言つことで複雑な気分になる。

ローレットとヒュドラーはその怪しい酒屋に入り、カウンターに行つて

「マスター、ソートルヌとトカイワインを頼む。」

マスターはニヤリと笑みを浮かべ

「どうぞ。」

と注文した二つのワインが出てきた。ローレットはそのワインのラベルを剥がし、二つをくっ付ける。すると、その裏が地図になっており、村の地図と赤い点が一つの民家に書かれていた。

ソートルヌはローレットが、トカイワインはヒュドラーが飲み干し、店を出る。そして、赤い点の書かれた民家に入る。そこで

「ハルケギニア・グロウイ」

そう民家の人間に言うと、中に入れてくれた。そして、部屋の中にある隠し扉から地下室へと行った。

- 地下室 -

そこには数人の男たちが居た。そして、一番の年配者が

「おお！待っていたぞローレット。王の様子はどうだ？」

「相変わらず無茶なことばかり言っています。そして、今日は皆様に避難を言いに来ました。」

「どういうことですか？」

「この村のことがバレました。私にこの村を焼き払えと命じています。私も、やらなければ他の者にも迷惑が掛かります。」

「しかし、何処に行けばよいのかね？」

「ここから南の山を越えて、元々私の父が治めていた領地に逃げてください。そこなら、なかなか情報も入ってこないなので安全です。」

「分かった。全員にこの村を捨てるように伝えよう。」

「ありがとうございます。」

ローレットは地下室にいる者たちに頭を下げてお礼を言う。そして、2時間後には村を捨てて移動を始める。それを確認したローレットは炎上の呪文を唱えて、村が業火に包まれるのを眺めている。村にはローレットが召喚した人間に似せて作られた人形を置き、見分けが付かないぐらいに炎で燃やし尽くした。

火が消え始めたのを確認すると、ヒュドラーが走ってきた

「ロー兄。殺しちゃったの？」

「いや、みんな逃がしたから安心してくれ。」

「そう。良かった。」

「ああ、これで、一応は仕事が完了だ。」

そう言って駐機しているシュトユーカに乗り、エンジンを掛ける。

「それよりもロー兄。ずっと疑問だったんだけど、どうしてこんな仕事ばかりしているの。」

「ああ、帰り道は長いから私の過去について話しておこう。」

シュトユーカを離陸させて、話し始める。

「私が北花壇騎士団の一員だということは知っているな？」

「うん。」

「その一員になったのは、私の幼少期に関係している。」

「え？」

「それを話す前に、お前を信用して言う。私は、この世界の人間ではないんだ。」

「ええええ！？」

意外な言葉にヒュドラーは大声を上げる。

「黙っていてすまない。言っても信じてくれないだろうと思ってな。だが、才人が現れて決心したよ。あの才人も恐らくは私の国の人間だ。」

「え？」

「日本。それが、私の祖国だ。」

「じゃあ、なんでガリアに居るの？」

「どういう訳か、普段どおりに家で過ごしていると、突然声が聞こえて、その声の方に行ったら気を失い、気づいたらこの世界で生まれていた。それに、私は今は16歳だが、向こうではもう60歳を越えていた。」

「何で？」

「分からない。そして、この世界で生を貰ったんでな、この世界で過ごすことに決めた。だが、私は気づけば天才と呼ばれるメイジになってしまったんだよ。そして、今の無能王ジヨゼフ1世が前国王

が滅び、跡取り問題という混乱に乗じて私を殺そうとした。ただ、私を庇った両親が変わりに殺され、私に死刑宣告同然の北花壇騎士団に無理やり入隊させられ、後はお前と通ってきた厳しい道のりを歩み、ここにいらっしゃるんだよ。」

「でも、私がロー兄と出会う前から北花壇騎士団に居たんでしょ？ その間はとうだったの？」

ローレットは少し暗い顔をして

「今みたいに、人を逃がさなかった。命令されるままに、平気で村を焼き尽くし、灰にしてきた。」

「そ、そんな。」

ヒュドラーはびっくりした顔になる。

「今でも、あの時の人々の悲鳴が夜になると聞こえるんだ。それを我慢したいから、カーテンを開けて光を入れ、深い眠りにつかないようにしているんだ。」

「じゃあ、二つ名の死神は？」

「先も行ったとおり、私は平気で人を殺してきた。その時の顔が、まるで死神の様だったからそんな二つ名が付いた。」

「そうだったの。ご免。」

「いいんだ。むしろ、謝るのは私の方だよ、黙っていてごめんなさい。」

「うん、いいよ。過去はいいけど、私は今のロー兄が好きだから。」

「こんな私でもか？」

「うん。過去の事を悔やんでいるようだし、これ以上の悔やみは与えたくない。それに私、ロー兄の使い魔だもん。」

ヒュドラーはその姿に見合う満面の笑顔をローレットに向ける。

（僕も救われるよ。）

「それでロー兄、才人にはどうするの？」

「時を見て話すよ。そら、見えてきたぞ。」

目の前にトリスティン魔法学院が見えてくる。

「しっかり？まっつてよ。」

機体を降下させ始め、着陸態勢に入った。

「ランディング。」

車輪を地面に接地させ、出力を下げて停止させた。風防を開け、二人を降りる。

「それにしても、本当に速いんだねこの飛行機。」

「ああ、元は戦争のだけだね。」

「え？」

「いや、何でもない。」

ローレットは召還魔法をシュトウーカに掛け、学院長室に向かった。

・学院長室・

扉を開けて、オスマン氏に帰ってきたことを告げる

「ザ・ローレット、ただいま戻りました。」

「うむ、仕事は終わったのかね？」

「はい。」

「そうか、それは良かった。で、どうするかね？後1日分は休学届けを貰っておるが。」

「いえ、明日からは授業に復帰します。」

「そうかね、では頑張っておくれ。」

「はい。ありがとうございます。」

ローレットは頭を下げてお礼を言い、学院長室から退出する。

「して、ミス・ロングビル。彼の事は何か分かったかね？」

「いいえ。ただ、彼は相当優秀なメイジのようです。シユヴァリエの称号を既に持っており、5歳の時からスクウェアクラスのメイジです。」

「そんなすごいメイジへの仕事だったんだ。恐らくは、ガリア王室からの依頼だろう。」

「はい、現ガリア国王のジョゼフ一世は影ではかなり悪い噂があります。その為、敵は多いでしょう。」

「その関係の仕事だろう。」

「恐らくは。」

「まあ、他国の事情に干渉していても仕方がない。少なくとも、この学院にいる間はゆっくりとさせてやるうではないか。」

「ええ、そうですね。」

・ローレットの部屋・

「ロー兄、もうちょっとだけいいでしょう？」

「だめ、それ以上は来ちゃ駄目。」

「ロー兄の魔されるのを使い魔として放っとけません。」

なんと、ヒュドラーは現在、自分の寝床では無くローレットのベッドの中にいる。ローレットも入るのはいいと言ったが、現在二人の距離は約50cm

「だって、魔されても助けてあげたいんだもん。」

ヒュドラーは少女らしく目をつるつるさせる。

「気持ちだけでありがたい。」

「ちえ。」

ヒュドラーはそっぽを向いて寝てしまう。

「俺も寝るかな。」

そう言ってカーテンを開け、ランプを消す。すると、直ぐに睡魔に襲われてローレットは眠りについた。

土くれのフーケ

目覚めてローレットは驚く。

「な、何をやっているんだ？」

昨日は離れて寝たはずのヒュドラーが起きたときには体をローレットにくっ付けていた。

「やられたな。」

そこへヒュドラーは目覚める。

「あ、ロー兄。今日は早いね。」

「それより、何でくっ付いているんだ？」

「魔されていたから、助けるため。」

「そうか、ありがとう。ただ、もうやらないでくれ。」

そう言ってローレットは着替える。そして、身支度等を終えて食堂に向かった。

・ 食堂 ・

椅子に座って待っていると、ルイズと才人がやって来る。そして、才人の背負っている刀に目が行く

「才人、刀を買ったのか？」

「ああ、ルイズが護身用につて。」

すると、ルイズが才人の股間を蹴り上げ、才人は蹲った。

「な？なにを？」

「馬鹿犬がゲルマニアの野蛮人に拉致されたから買ってあげたんじやない。」

「はい。そうです。すみません。」

(昨日から何があったんだ？)

ローレットはそう思いながら、とりあえず才人に痛みを和らげる魔法を掛けてやる。

「あなた、人の使い魔に何しているの？」

「あまりも理不尽な扱いを受けているから。」

才人はそうだそうだと声を上げたため、ルイズに蹴られる。

「とにかく、人の使い魔に甘くしないで。」

「だからって、使い魔は一生を共にするんだぞ。少しは甘くしてやれよ。」

「いやよ、使い魔に甘くすると癖になっちゃうもの。」

「気持ちは分かんなくてもないが、だからってやりすぎだよ。」

「ほつといて。」

ルイズは席に着く、ローレットもまあいいかと思い、席に座り直す。そして、祈りの唱和をして食事を始める。

「サイレント。」

小声でルイズに周りの声や音が聞こえなくなる魔法を掛け、才人に肉を分けてやる。

そして、普段どおり授業を過ごす。ただ、タバサとキュルケは授業には出ていなかった。

そして、夜。上が騒がしいので、ローレットはヒュドラーが眠りについたのを確認して上のルイズの部屋に行く

・ルイズの部屋・

「それで、事を整理すると、キュルケが今日買ってきた刀と昨日ルイズが買った刀、どっちを使うか揉めていたと。」

「「そうよ。」」

二人は同時にローレットに言う。タバサはルイズのベッドの上で本

を呼んでいる。才人は顔に二つの靴の痕がある。

「こうなったら、魔法で決闘よ。」

「望むところよ。」

キュルケが杖を取り出し、続いてルイズが杖を取り出す。そこへタバサが魔法で杖を取り上げ

「室内。」

そう一言言う

(ナイスだタバサ。)

ローレットは心の中でそう思う。さすがにローレット自身はルイズの爆発が虚無系統の一種であることは知っているが、こんな部屋で爆発させられたら大騒ぎになってしまう(教室での爆発も随分大騒ぎになったが、夜間とう事もあり、安眠妨害にもなってしまう)。

そこで、外の塔の頂上からロープを垂らし、才人をそれに括り付け、先に魔法で落とした方が勝ちという決闘になってしまった。

ここで、少し話を戻し、場面を本塔の宝物庫の壁に移す

「ふう、やはり硬いわね。」

突然、月光に照らされる本塔の壁にフードで顔を隠した人物が降り立つ。

「この壁じゃあ、私のゴーレムでも破壊できるかどうか。」

そう独り言を言っていると、寮塔から数人の人が出てきた事に気づき、塔の影に隠れる。

そして、場面は戻る

「こらー！！お前等！！。一体何をやっているんだ。」

才人が大声で文句を言う。全ての塔にローレットが仕方なくサイレントの呪文を掛けているので、中には声が聞こえない。

「じゃあルイズ。ハンデとして、貴方から先にやってもいいわ。」

「ば、馬鹿にしないでよね。私が一発で当ててやるんだから。」

「うふふ、やって御覧なさいよ。」

キュルケは不敵な笑みを浮かべてルイズを挑発する。そして、ルイズが呪文を唱えて、杖を向けると、案の定そこが爆発し、壁が崩れた。

「うわー。ルイズ、俺を殺す気が！？」

才人は近くで爆発をした為、怒りと恐怖で声が一層大きくなる。そして、キュルケが呪文を唱え、ファイアーボールで才人のロープを切った。才人は落下するが、タバサの使い魔であるシルフィードに助けられる。

「これで私の勝ちね。」

ルイズが地面に膝を付くと丁度同時に、どこからかゴーレムが現れた。

「な、なんなの？」

キュルケはゴーレムを見ながら言う。そして、ゴーレムの肩に人影が現れた。

「ありがとう、感謝するわ。この硬い壁を破壊してくれて。」

その人影はゴーレムから先程ルイズが破壊した穴に飛び移り、中に入って何かの箱を持って出てきた。

「では、破壊の杖は確かに頂いたは。」

ゴーレムは動き出し、学院の壁を破壊して外へと逃げた。ローレッツト達はただそれを見守る事しか出来なかった。

破壊の杖と戦車

翌朝、まずローレットが目覚めると、ヒュドラーが怒った声で言うてくる

「昨日の夜は何処に行ったの？そして、あの壁は何？」

「起きてたのか？」

「当たり前よ。」

「色々あってな。それと、面倒な事にもなった。」

ヒュドラーは何の事か分からず、とりあえずは理由を話したのでこれ以上は聞かなかった。ローレットも着替えをして、食堂へと向かう

・食堂・

皆ざわざわしていた。朝起きたら、本塔の壁が崩壊していたのだから当たり前と言えば当たり前であるが、そこへ、壁を壊した張本人のルイズが来る。

「なあ、あの壁はどうするの？」

「知らないわよ。」

「お前が壊したんだろ。それよりも、昨日の事はどうするんだ？」

「もうじき先生が私達を呼びに来るでしょうね。」

「え？」

「昨日の事は、恐らく直ぐに先生方が調べるだろうから。」

そして、ルイズの言うとおりに、食事が終わったところでコルベール先生に呼び出しを喰らい、学院長室に入った。

・学院長室・

そこには先に呼ばれていたキュルケとタバサがいた。そして、全員が集まったのを確認するとオスマン氏は話始める。

「えー、では諸君。昨日の一件を君達は見ておるのだね？」

「……はい、オスマン学院長。」

「それで、犯人の特徴は？」

「犯人はローブを着ており、フードで顔を隠していました。そして、ゴーレムを操って部屋からなにかの箱を盗み出しました。」

「ふむ、やはり土くれのフーケじゃったか。」

「土くれのフーケ？」

初めて聞く名だと3人は思い、オスマン氏に聞く

「最近、貴族の宝やらを盗んでおる泥棒じゃよ。その手口は大胆なものから隠密なものまで様々だが、狙ったものは諦めずに盗むものでな。」

「それで、盗まれたものは？」

オスマン氏は少しため息をつき

「破壊の杖じゃよ。」

「「「破壊の杖？」」「」」

それが何なのか聞こうと思ったが、そこへ他の先生達が言い争いを始める。

「昨日の当直は誰だったんですか？」

それを言った瞬間、他の先生方全員がミス・シュブルーズを見る。

「ミス・シュブルーズ、貴方が昨日の当直だったんじゃないですか？」

「わ、私は、まさかこんな事が起こると思っても見なかったので、昨日は早めに寝てしまいました。」

「しっかりと当直をしていたら、こんな事にもならなかったんですよ。」

「まあまあ、落ち着きたまえ。そついう君も、当直は確りとやった事があるのかね？」

オスマン氏はシュブルーズを責めた先生に言うが、他の先生と同様に黙ってしまった。

「どうやら、責任の方は我々教師にあるようだな。それで、ミス・ロングビルは何処かね？」

オスマン氏は近くにいるコルベールに聞くが、分かりませんの仕事をされたので

「ふう、この一大事に一体何処に行っておるのだろうか？」

すると、扉が開いて、ロングビルが入ってきた。

「すみません、今朝に連絡を受けて私なりに調べていたんです。」

「おお、ミス・ロングビル。さすがに仕事が早いですな。それで、成果は？」

「はい。ここから少し行った所の森にある廃墟があり、そこに数ヶ月前から怪しい人物が出入りしていると目撃情報がありました。恐らくはそれが。」

「うむ。ではその小屋を見に行ってみようではないか。フーケの討伐に行く者は杖を掲げい。」

オスマン氏は言うが、誰も杖を掲げない。

「どうした？フーケを捕まえて名を上げよつとする貴族はおらんのか？」

それでも杖を掲げないため、ルイズが杖を上げる。

「ミス・ヴァリエール。君は生徒ではないか。」

「先生方が上げないから私が上げたんじゃない。」

先生に言われるも、ルイズは負けじと言い返す。それに乗るように、キュルケ、ローレット、タバサが杖を上げる。

「うむ、他にはおらんのか？」

だが、やはり先生方は杖を上げなかった。

「では、君達4人に任そうではないか。それに、ミス・タバサとミスター・ローレットはシュヴァリエの称号を持っておるし、二人とも優秀なメイジだ。任せても大丈夫じゃろう。」

オスマン氏が言うと、キュルケとルイズが二人を見て

「「ええ！貴方達ってシュヴァリエの称号を持っていたの？」」

ローレットは「ああ」と答える。タバサは何も答えずに頷く。

「それにミス・ツプルスはゲルマニアの著名メイジの家系に生まれ、優秀な軍人を多く輩出しておる。それに、彼女自身の炎魔法は強力じゃと聞いておるが。ミス・ヴァリエールは……」

オスマン氏は答えに困ってしまふ。それは、ルイズの魔法が失敗だと思っっているせいからである。

「・・・(そうじゃ!!) 優秀なメイジを多く輩出したヴァリエール公爵家に生まれ、将来優秀なメイジになると聞いておる。それにそなたの使い魔はあのグラモン元帥の息子のミスター・ギーシユ君を打ち破ったと聞いておるし。」

こうして、案内人としてロングビルも同行し、一同は森にある廃墟に向かった。その間の荷馬車の中で

「それにも、貴方達2人がシュヴァリエの称号を持っていたとはねえ。」

キュルケは感心しながら2人を見つめる。

「まあ、いろいろあってな。」

「それに、貴方とルイズの使い魔は変わってるしね。」

それを聞いてヒュドラーは髪を逆立てる。まずい事を言ったと思い、キュルケは謝った。

「それで、ミス・ロングビルは何で貴族の名を持たないんですか？」

ルイズは案内人をしているロングビルに聞く。

「私は没落貴族だから、名を持っていないのよ。」

「よかつたら、理由を聞かして貰ってもいいですか。」

「やめとけルイズ。」

ローレットが注意をする。それは彼も実質は没落貴族だからである。暫く行き、問題の小屋が見えてきた。

「あれだな？」

全員が森の茂みに隠れて小屋の様子を伺っている。だが、小屋の中からは人の気配が全く感じられない。

「どうする？」

「いちばんすばしっこいのが中の様子を見て、もしフーケがいたら挑発をして外におびき寄せろ。」

タバサが地面に絵を描いて説明する。そして、すばしっこいのと聞いた瞬間に全員が才人を見る。

「じゃあ、私は付近を偵察してきますね。」

ロングビルは走って別の場所に移動をする。

「俺がやるんですかご主人様？」

「あたりまえでしょ。」

ルイズは才人に命令をする。才人は持つてきた刀を抜き小屋に近づいていき、そして、窓を覗いて誰も居ないの合図を送る。

「妙だな。」

ローレットは不審に思い、辺りを見回す。

「何で？」

ルイズが聞いてくる

「ここは目撃証言が無ければ絶好の隠れ家だよ。そこに身を隠さない人間は考えられない。」

「見つかったと思って逃げたんじゃなくて？」

ローレットはそれに答えず

「注意して中に入ろう。」

扉の前に来て、ローレットは魔法で扉の様子を探る。

「畏は仕掛けられていないな。」

それを確認して扉を開ける。すると、中から大量の埃が風で舞う。

（おかしい。ここはロングビルの言うとおりなら数ヶ月間も居る事になる。なのに、何で埃があるんだ？）

ローレットはそう思い、中に入る。ルイズは外の見張りをし、他のメンバーはそれに続いた。そして、中を調べていると、タバサが例の破壊の杖が入った箱を見つける。

「これ。」

「ちょっと、それって破壊の杖が入った箱じゃない。」

キュルケがその箱を抱える。

「じゃあ、ロングビルに伝えに言ってくるよ。」

「あ、私も。」

ローレットと同行していたヒュドラーがロングビルを探しに森に入ったその時、ゴーレムが現れてルイズ達を襲った。

「きゃあああ。」

ルイズの悲鳴を聞いて、才人達が出てくる。そして、魔法でゴーレムを攻撃するも硬い土で出来ているゴーレムはビクともせず近づいていく。

・ローレット・

「この辺りでいいかな？」

ローレットは森の奥に入り、召喚魔法を唱える。現れたのは旧ソビエト連邦の重戦車IS-2であった。

「乗って。」

ローレットはヒュドラーに言い、戦車に乗った。

「ねえ、ロー兄。何で戦車なんか出すの？」

「ロングビルはフーケだからだ。」

「ええ！！」

「考えてみる。あの小屋はかなり前から人は住んでいなかったんだ。なのに、ロングビルは数ヶ月前から人が出入りしていると言っていた。おかしいと思わないか。」

「ああ！！」

ヒュドラーが気づいたところで戦車のエンジンを掛ける。

「行くぞ！！」

ローレットは最大速度で小屋の方へと向かう。

そして、その頃に

「はあああ！！」

才人はキュルケから貰った高級な剣でゴーレムを斬ろうとするが、逆に剣がボキッと折れてしまう。

「焼きが甘い刀だぜ。」

才人はそう言つて剣を放り投げる。そこへ、ゴーレムが才人を踏みつけようとす。

「相棒、抜け！！。」

才人が持つてきた予備の刀。ルイズが買った話す剣「デルフリンガー」が才人に抜けと促す。

「分かった。」

才人はデルフリンガーを抜き、ゴーレムに刃をぶつける。デルフは折れず、逆にゴーレムの動きを止めることに成功した。

「しかし、これじゃあ負けはしないが勝てもしない。」

刀はゴーレムに丸つきり効かない。だが、才人もガンダールブの力が働いている為にすばやい動きが出来る為攻撃は当たらない。

そこへ、上空のシルフィードに乗っているルイズは

「タバサ、その杖を貸して。」

ルイズはタバサから破壊の杖を受け取つて、

「タバサ、私にレビテーションをお願い！！。」

そう言つてルイズはシルフィードから飛び降りる。

「ちよ、ルイズ。」

キュルケは言うが、既に遅い。タバサはレビテーションを掛けて、ゆっくり降ろす。そして、着地したルイズは破壊の杖を必死に振る。しかし、何も起こらない。

「ど、どうしてよ。これって破壊の杖じゃあないの？」

そこに才人は気づき

（まさか、いや、あれは確か。）

ルイズの振っている杖、それは地球の兵器「M72 LAW」である。振っても意味が無いのは当然だ。才人はゴーレムから離れてルイズのところに行く

「才人、使い方が分からない。」

ルイズは才人に言うが、才人は貸せと言って受け取り、

「こつやって使っんだ。」

一通りの発射の手順を踏み、ゴーレムに狙いを定める。

「伏せる！！。」

才人は大声でルイズに言い、発射スイッチを押す。内部に入っているロケット弾は勢い良く飛び出し、ゴーレムの胸の中央に命中し、破壊した。

「才人。」

ルイズは才人を見つめる。

「どうしてこんな物がこの世界に？」

そこへシルフィードから降りてきたキュルケが

「ああん、ダーリン。メイジでもないのに魔法の杖を使えるなんて素適ね。」

キュルケは才人に抱きつく。

「ちよつと、離れなさいよ。」

ルイズはキュルケを才人から離そうとする。そこへ、

「皆、よくやったは。」

ロングビルが森から出てくる。

「ミス・ロングビル。今まで何処に？」

ルイズは聞くが、ロングビルは無視して破壊の杖を拾い上げる。

「まさか私のゴーレムを倒しちゃうなんて。」

「え？」

その場にいる全員が疑問の顔を浮かべる

「今、私のゴーレムって。どういふことですか？」

「だから、私が土くれフーケって事よ。」

それと同時に6体のゴーレムが現れる。そして、フーケはルイズたちに破壊の杖を向けて

「さあ、杖を捨てなさい。あ、それと使い魔君は刀を置いてね。貴方、それがあるとすばしっこくなっちゃうんだもん。」

一同は言われ通りに杖と刀を置く。

「でも、如何してこんなマネを？」

「この杖ね、盗んだのはいいけど使い方が分からなかったのよ。だから、学院の者を連れてきて使い方を聞き出そうと思っていたんだけど、ついてきたのが貴方達だからがっかりしたのよ。でも、まさかこんなにも早く目的が達成できるとは思っても見なかったわ。感謝するはねガンダールブ君。」

「ガンダールブ？」

才人は疑問に思う。

「じゃあ、さようなら。」

フーケが引き金を引こうとしたその時、森の中なら1台の戦車が現れた。

「な、何なの!？」

フーケがそちらの方向を見て叫ぶ、一同もその戦車を見た。

「やはりな。」

「どつするのロー兄?。」

「右の奴から片付ける、発射用意。」

戦車の砲塔を右のゴーレムに向け、

「ロー兄、撃つていい?。」

「ああ。」

ヒュドラーが砲手席に、ローレットが運転席に座っている。そして、ヒュドラーが発射ボタンを押す。すると、戦車の主砲から122ミリ加農砲弾が発射され、右のゴーレムが破壊される。

「一体何なの!?。」

突然現れ、突然自分のゴーレムを破壊した見た事もない物を睨むフーケ。ルイズ達も才人以外は啞然としてその戦車を見ていた。

「何、あれ?。」

「知らないわよ。タバサは?。」

「知らない。」

続いてもう一発。今度は左のゴーレムが破壊された。

「あれは。」

「知ってるの才人？」

「ああ。あれは戦車って言うんだよ。しかし、一体誰が？」

「そんな事よりも今の内にあの戦車って奴の後ろに逃げるわよ。」

キュルケが一目散に戦車に向かって走っていく、その後ろにタバサ、ルイズと最後尾に才人が続いた。

走ってくる最中に再び主砲が放たれ、右側のゴーレム2体を一度で倒した。

「まずいな。」

「どうしたのロー兄？。」

「ルイズ等がこっちへ来る。」

ローレットが12・7mm機銃の発射ボタンに手を掛ける。が、直ぐに手を離れた。

（もう、バレてもいいだろう。）

そう決心をし、戦車を前進させた。

「残りは2体だ。」

「うん。」

再び主砲が発射され、ゴーレム2体を巻き込んで破壊する。

「このまま行くぞ。」

すると、才人が戦車によじ登り、ハッチを叩く。

「おい、誰なんだ？」

ハッチから声が聞こえる。

「どうするロー兄？」

「このまま行く。」

ローレットが構わずにフーケに向かっていく。フーケは遣られていく自分のゴーレムを見て呆然としていたが、自分のゴーレムを倒した戦車が向かってくるのを気づいて、破壊の杖を構えるが、

「な？なんで出ないのよ？」

先程みたいにロケット弾が発射されない。そこへ、戦車の中に入るのを諦めた才人が刀を拾ってフーケの腹に柄でおもいきり突く。フーケは腹を遣られて気絶してしまった。

「すごいじゃないのダーリン。」

「でも、どうして破壊の杖が作動しなかったの？」

「こいつは単発式なんだよ。」

才人がロケットランチャーを拾って

「確か、M72 LAWって名だっけ。」

「ロー兄、どうする?」

「出るぞ。」

「え?」

ローレットが戦車のハッチを開けて外に出る。すると、全員が驚愕の目でローレットを見た。

「あ、貴方?」

「どうしてローレットがこの戦車って奴に乗っているの?」

「ロー兄、どうする?」

「答えないわけにもいかないだろう。」

ローレットが覚悟を決めて話す。自分が元々はこの世界の人間ではない事、何故戦車に乗っていたかって事、自分の話せるだけの過去。

「貴方って本当は。」

「そう、元海軍大尉関内障子。それが、俺の祖国での名だ。」

余りの予想外の事に全員が啞然としたのは言うまでもない。

破壊の杖と戦車（後書き）

ここからは原作崩壊もしていきますが、出来る限り原作に沿うつもりです。

舞踏会

予想外の事態が起こるも、無事にフーケを捕まえる事に成功したロレット達は学院に戻り、オスマン氏に報告に向かった。

- 学院長室 -

「うむ、諸君。よくやってくれた。」

才人以外の者は礼をする。

「しかし、まさかミス・ロングビルがフーケじゃったとは驚きじゃな。」

「どこで採用なさったのですか？」

隣に控えているコルベールがオスマン氏に尋ねる。

「街の酒場じゃ。ワシが客で、彼女が給士をしておった。それで、ついこの手が彼女の尻を撫でてしまつてな。」

「で？」

コルベールが冷たい目でオスマン氏を見る。オスマン氏は少し照れた顔になつて

「それで、彼女は全く怒らないので、ワシの秘書にならないかと言つてしまつたんじゃ。」

(おいおい、そんなんで採用って、この学院は大丈夫かよ?)

ローレットはこの学院に不安を抱く。そこへオスマン氏がいつもの
厳しい顔つきになり

「まあ、それはさておいてじゃ。諸君、よくぞ破壊の杖を取り返してくれた。フーケは王室の衛士隊に引渡し、君達にはシュヴァリエの称号授与を申請しておいたぞ。尤も、既に持つておるミス・タバサとミスター・ローレットには精霊勲章の授与を申請しておいた。」

「ほ、本当ですか!?!」

キュルケは驚いた顔をする。シュヴァリエの称号の意味を知っているなら当然ではあるが。

「本当じゃよ。諸君等はそれぐらいの功績を残したのじゃ。」

しかし、ルイズは

「あの、才人には、何も無いのですか?」

オスマン氏は

「残念ながら、彼は貴族ではないのでな。」

と言っ。

「別に、俺は何も要りません。」

才人は言った。そこで、オスマン氏は手をポンポンと叩き、

「では諸君、今日はフリッグの舞踏会じゃ。このとおり破壊の杖は戻ってきたことだし、予定通りに執り行くと決まった。」

「そうでしたわ。フーケの一件ですっかり忘れていました。」

キュルケは顔を輝かせて言った。

「舞踏会の主役は君達じゃ。せいぜい着飾るのじゃよ。」

それを聞いて才人を除く一同は学院長室から退室する。

・ローレットの部屋・

「ねえ、ロー兄。」

「何？」

「何でこんなに早く正体を明かしたの？」

「黙っていても何時かは分かる。なら、早いほうがいい。」

「ふーん。それで、才人の事をどう思っているの？」

「可哀想だとは思っている。訳の分からない世界に突然召喚されたんだ。同情もするよ。」

「ロー兄は戸惑わなかったの？」

「戸惑ったが、直ぐに慣れたよ。」

ローレットはそう言いながら、パーティ用の服に着替える

「お前も早く着替えた方がいいぞ。」

そう言うローレットはパーティ用のドレスをヒュドラーに渡した。

「私も行っていいの?」

「構わん。許可は取っている。」

「ありがとう。」

ローレットは着替えを終えて外に出た。中ではヒュドラーが着替えを行っている。

- 舞踏会会場 -

ローレットは才人がベランダに出ているのを見つけて

「なんだ才人。そんな暗い顔をして。」

「いや、何でもねえ。」

そこへ、

「なあ、相棒。少し飲み過ぎていないか。」

突然刀が喋りだしたのでローレットはビックリする。

「な！？才人。君って本当に面白いな。」

「ああ、俺も自分でもそう感じるよ。そいつはデルフリンガーって言うんだ。」

「宜しくな。」

「あ、ああ、此方こそ宜しく（デルフリンガーって何処かで）」

ローレットはそう思ったが

「なあ、ローレット。お前って地球に帰りたいと思った事があるか？」

才人が突然聞いてきた。

「いや、そんな事は無かったが。」

「そうか。」

そこへキュルケとタバサがベランダに出てきた。

「貴方達。こんな所に居ないで、中で楽しみましょうよ。」

キュルケが言ってきたので、才人と共にローレットは中に入った。

(相変わらず、タバサの食べっぷりは凄いな)

ローレットはガリア時代にタバサ(シャルロット)と一緒に何度も遊んだ事があり、パーティにも一緒に参加していたので、タバサの食べる量は知っているが、あんな小さな体でこんなに食べれるのは何時見ても驚きである。

ローレットは少し料理を食べ、キュルケ達と話をし、再びベランダへと出た。

「才人にはああ言ったけど。俺は帰りたいたではなく、帰れないんだよ。帰っても、俺の居る場所はもう無いんだ。俺の祖国はもう死んでしまったんだよ。」

ローレットは少し涙目になった。

ローレットは日中戦争で実戦経験を積み、真珠湾攻撃、セイロン沖海戦、珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦、第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦、マリアナ海戦、レイテ沖海戦と主要な海戦を全て機動部隊勤務で戦い続け、レイテ沖海戦以後、本土にて防空戦を戦い続けた歴戦の戦士であった。(緒戦は翔鶴、ミッドウェー海戦時には飛龍、残りは瑞鶴に乗艦して戦った。)

だが、戦後は彼に対して世間の目は冷たく、彼がやっとありつけた仕事は街中のゴミ拾いというものだった。そして、恩給が何も無い中を必死で過ごしていた時にこの世界への転生(?)で幾分救われた感じていた。

彼が信じて戦い続けた日本は、戦後、連合国の言われるままに動き、天皇は神から象徴へとされてしまい、何もできない救助隊(現在の

自衛隊の事)が結成され、幻想でしかない平和主義を叩き込まれた。

(あのような、悲惨な戦争を絶対にこのハルケギニアで繰り返してはならない。俺はその為にこの世界で生きているんだよ。)

彼にとつて、今の日本の事など、もはやどうでもよかつたのだ。在りもしない平和主義を叩き込まれ、誇りを失い、政治と領土を乗っ取られた日本は彼にとつてもはや国とは言えなかつた。

日本国憲法第9条の中に日本は戦争を永久に放棄すると書かれている。しかし、日本が戦争を放棄したところで戦争は日本を放棄などしない。それが、地球の現実であつた。

そこへ、ヒュドラーがベランダに入ってきた。

「ねえロー兄、一緒に踊らない?」

「え?」

気づいたら既に音楽が始まっており、皆が近くの者と踊っていた。

「ああ、別にいいよ。」

ローレットは会場に戻り、ヒュドラーと一緒に踊り、疲れたので皆より一足先に部屋に戻って寝た。

舞踏会（後書き）

小説にこう書きましたが、私は決して右翼的な思想の持ち主ではありません。地球の、強いては人類の現実をただ書いているだけです。（憲法第9条は変えてもらいたい身ではありませんが）

ちなみに、私は右翼を別に嫌っているわけでもありません。むしろ、このような団体がいなければ日本は成り立たないと感じています。

それと、下記は私の言葉です

日本は政治と領土を乗っ取られている。その中で今現在、企業が行っているグローバル化を進めすぎると、日本人を企業が全く雇わなくなり、結果的に日本経済は他国に握られてしまう。そうになると、もはや日本は国家としての存在は無くなる。

企業の社長さんにはこの意味をよく考えてもらいたいと思って書きました。

トリステインの姫君

夜間、上からの悲鳴で目を覚ましてしまった。

(な?なんだ?)

ローレットは寝巻き姿のまま上の悲鳴の聞こえた部屋へと向かう。

- ルイズの部屋 -

「この馬鹿犬!!」

「ぎゃああ!」

そこではルイズが才人を乗馬用の鞭で叩き続けていた。

「な?何をやってるんだ?君達は?」

「犬の躰。」

ルイズはさらりと言う。理由を聞くと、才人はルイズのベッドに忍び込み、そこを見つかってルイズにお仕置きをされていると言う。

「それは、どう考えても才人が悪い。」

あっさりとローレットが言った。

「しかし、ルイズもこんな夜中にお仕置きをしないでくれ。安眠妨

害もいとこだ。ヒュドラーは運よく寝ているが、来たのが彼女だったら半殺しにされてるぞ。」

「う、そ、それもそうね。悪かったわ。」

ルイズもあつさりと謝る。しかし、翌朝までルイズは引きずっており、翌朝には更に才人は酷い目にあつたそうだが、それはまた別の話。

・ローレットの部屋・

食事が終わり、ローレットは自分の部屋に居ると

「それで、君は翌朝に更に酷い目にあつたと。」

才人は命からがらローレットの部屋に逃げ込んで来た。

「なあ、頼むよ。助けてくれよ。」

「そんなこと言ってもな。話を聞く限りではどう考えても君が悪いし、まあ、ルイズも遣り過ぎだとは思うが。」

とりあえず治癒魔法でルイズに遣られた傷を治してやる。

（それにしても。昨日は彼女と一緒にダンスを踊ったって言うし、一体仲が良いのか悪いのか。）

ローレットは才人とルイズの仲が一向に分からない。

「まあ、仲良く遣ればいいだろう。彼女も、フーケの一件で君を認めたとようだし。」

しかし、授業が始まって、ルイズの躰(?)は執り行われ、終わったのはコルベール先生がトリステイン人にとって朗報を持ってきた時だった。

「皆さん。」

コルベール先生はなにやら変な服装をしており、何かと全生徒と講義を行っていたシュブルーズ先生が見た。

「本日はトリステイン魔法学院にとってよき日であります。始祖ブリミルの降臨祭と並ぶ日であります。」

何の日だと、皆が言いたそうな目でコルベール先生を見る。

「本日は、ゲルマニアからお戻りのアンリエッタ姫殿下がこの魔法学院をご訪問されるとたった今王室から連絡がありました。」

(こんな時期に姫殿下が訪問?)

ローレットは疑問に思う。恐らくはフーケとの関係もあるだろうと感じる。

「その為、粗相があつたら申し訳ない。全員、全力を挙げて歓迎式典の準備を行いますぞ。」

全員が返事をして教室から出て、門へと整列する。

暫くし、門を潜り抜けて王室の家紋が入った馬車とその周りを固める魔法衛士隊が入ってきた。

そして、敷かれた赤い絨毯の上に降りたのはトリステイン王国姫君のアンリエッタ姫殿下である。降りたときに、学院全員がアンリエッタ姫殿下万歳とトリステイン王国万歳と言った。

アンリエッタ姫は学院の者達に笑顔を見せ、その後は学院長室に入った。

- ルイズの部屋 -

「で？」

「なんですか？」

「何でローレットが私の部屋に？」

「暇だから。」

ローレットは今現在ルイズの部屋に居る。

「だったら自分の部屋に居なさいよ。」

「だから暇だから。」

と、そこにノックがなされた。しかも、変わったノックの仕方だっ

た。

「こ、このノックは。」

ルイズは慌ててドアノブを回し、外の者の中に入れた。すると、その人物は

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ。」

アンリエッタ姫殿下であった。

慌ててローレットが膝を付き、礼をする。

「あら？この方は？」

「は、ガリア貴族のルイ・コンラード・イントウウ・ザ・ローレット。ローレットで結構です。」

「あなた、名前が逆なのね。」

「過去にいろいろありまして。」

「そう。」

アンリエッタは頷き、ルイズと何やら話をする。

「あなた、もしかしてこの世界の者ではないという。」

(！？何故、私の事が？)

ローレットが頷いた。隠したら王室に失礼だと思った行動である。

「そう。なら、貴方にも話しても構わないわね。」

「ゲルマニアとの同盟の事でしょうか？」

「それと似ているわ。実は、私はアルビオンに居るウェールズ様に一通の手紙を渡しているの。そして、今アルビオンは内乱の真っ只中。そして、アルビオン王室の敗北はもはや決定的になってしまっている。そこで、トリステインは迫り来る脅威から守る為にゲルマニアと同盟を組む事になったんだけど、向こうが出してきた条件が」

「姫殿下のゲルマニアとの結婚。」

「そう。そして、それを駄目にしようとアルビオンの反乱軍が企んでいるの。そして、それを可能とする唯一の物、それが私が渡した手紙。」

「その手紙を今、ウェールズ皇太子が持っているよ。」

「ええ。」

「ちょ、ちょっと待ってください姫様。」

「なあに、ルイズ？」

「それじゃあ、もしその手紙が反乱軍に渡ったら。」

「同盟が締結されないでしょうね。」

「そ、そんな。」

「だから、貴方達に取って来て貰いたいの。」

「いいですけど、外に居る人たちはどうします?」

「「え?」」

ローレットは杖を振って扉を開ける。すると、

「きゃ!」

「うわ!」

「・・・」

キュルケ、ギーシュ、タバサが倒れこんできた。

「あ、貴方達!」

アンリエッタが驚いた声で言った。

「それで?どうします?」

ローレットは冷静にアンリエッタを見る。

「聞かれたからには仕方ないわ。この人たちも連れてって下さい。」

「あっさりだね。」

「仕方が無い事です。」

そんな訳で、あっさりとキュルケ、ギーシユ、タバサが行く事になった。尤も、本人達も同行を希望したので良かったのだが（タバサはキュルケに誘われて）。

翌日

ローレットが全員集まったのを確認し、召喚魔法を掛ける。アルビオンに行く者が7人の為（ローレット、ヒュドラー、ルイズ、才人、キュルケ、ギーシユ、タバサ）連山を召喚した。ちなみに、アンリエッタは魔法衛士隊の中からも1人出すと言ったが、ローレットが定員オーバーになるから要らないと断った。

「さあ、乗ってくれ。」

才人は迷わずに乗るが。他の者は（タバサも機体に興味津々）

「これは竜の一種かい？」

「でも、翼は羽ばたけないわね。」

と疑問の声を上げていたが

「乗れ。」

ヒュドラーが顔は笑顔だが、迫力のある声で言ったため、一同は乗

り込んだ。ローレットは乗り込んだのを確認し、扉を閉めてエンジンを掛ける。

学院の者が何事かと外を見るが、見た事もない物に疑問の声を上げる。しかし、ローレットにはその声は聞こえず、スロットルをめい一杯倒し、出力全開で滑走を始める。

「テイク・オフ。」

操縦桿を引き、上昇を始める。その頃、後ろでは

「え？ええ！？」

離れていく地上を見て全員が驚く。

「だって、翼が羽ばたいていないのに。」

連山はぐんぐん高度を上げ、高度8000を最大速度で飛行した。

ウェールズ皇太子

全速力で連山が浮遊大陸のアルビオンに向けて飛行する。

「ねえ、ローレット。」

後ろからルイズが話しかけてくる。

「何だ？」

「このドラゴンって、どういう原理で動いてるの？」

「りゅ、龍って、この連山の事か？」

「そうよ。」

ルイズは疑問に満ちた顔で言う。それも当然ではあるが。なぜなら、ハルケギニアでは固定翼や回転翼（飛行船の一部には回転翼が使われているが）で飛ぶと言う思想は無く、ドラゴンの翼による羽ばたきか、飛行船に使われている風石で飛行するぐらいである。

「翼に付いているプロペラをエンジン出力軸の回転を利用して回転させて、それによって空気を掻いて進んでいるって言えば分かる？」

ルイズは訳の分からない顔をする。

「簡単言えば、水泳の平泳ぎと同じだよ。ほら、平泳ぎって足も使うけど殆どが手で進むだろう。水を掻くイメージで手を後ろにやっ
て進む。その手が、翼に付いているプロペラって事だよ。」

「なるほど。」

とりあえずは原理だけ理解してもらえた。平泳ぎ自体は地球でも古代ギリシアや古代ローマ時代から泳ぎ方としては存在している。その為、地球よりも遅れてはいるが、平泳ぎ自体もハルケギニアでは存在している。

「そろそろか。」

時間的にアルビオン大陸が見えてくる頃であった。

「ヒュドラー、電探に異常は？」

この連山にはローレットが召喚した電探を搭載されており、電探席を設けてヒュドラーに使わせていた。

「うーん。周りが雲ばかりでよく分かんない。」

「そうか。」

操縦桿を握りなおし

「少し上昇してみる。」

操縦桿を引いて、高度を更に取った。そろそろ空気が薄くなり始める頃だろう。

「全員、酸素マスクを付けてくれ。」

言われたとおりに全員が酸素マスクを着用する。現在は高度1万m、限界高度ギリギリを飛行していた。(一応、実用上昇限度であり、上がるうと思えば1万2000mよりも上がれるが、高高度に慣れていない人間には限界である。)

(そろそろの筈なのだが。)

水平飛行をしながら辺りを見回す。すると、ようやく見えてきた。

「よし、アルビオンが見えたぞ。」

全員が操縦席の所に来る。

「ようやくね。」

ルイズらはアルビオン大陸を見つめている。しかし、浮遊大陸だと知らない才人は

「え！？えええ！？し、島が浮いている？」

「当たり前だよ。浮遊大陸って呼ばれてるんだし。」

ローレットが冷静に言うが

(まずいな。そろそろ燃料もやばいし、着陸できる所があるか。)

連山は日本機の中では比較的大型の分類に入る機体である。故に、着陸できる場所は小型機程多くはない。

暫くして、アルビオン領内へと侵入した。そして、運よくウェール

ズが陣を張っているというニューキャッスルに丁度いい着陸ポイントがあった。

「全員、？まれ。」

高度を落とし始める。と、言っても燃料切れでプロペラが今にも止まりそうだったのだが。

「ランディング。」

うまい具合に地面に車輪が接地し、機体を止めることが出来た。そして、周りにメイジらしき男達が集まってくる。

「お前達は何者だ！？出て来い！！。」

杖を構え、機体から出る事を命じる。

「どーするロー兄？殺しちゃってもいいけど。」

ヒュドラーは目の色を変えてローレットを見るが

「いや、連中は貴族派ではない。ウェールズ皇太子側の人間。敵ではないよ。」

それを聞いてヒュドラーは目の色を戻す。そして、言われた通りに機体から出た。

「貴方達、私達はトリステインの者よ。そして、私はトリステイン姫君、アンリエッタ姫の依頼でアルビオン皇太子、ウェールズ皇太子に手紙を受け取りに来たの。」

ルイズが取り囲んでいるメイジ達に言う。

「何！？皇太子殿下に。」

とりあえずは信じてくれたようで、城の中に入れてもらった。

- 応接室 -

「それで、アンリエッタ姫からの手紙を受け取りに来たと。」

「はい。」

ウェールズ皇太子はアンリエッタ姫からの事情を説明するために書かれた手紙とルイズの説明で納得する。

「確かにアンリエッタ姫殿下からの手紙は預かっているし、このよ
うな事情ならば仕方がない。」

そう言つて、ウェールズは机の引き出しから小さな宝箱を取り出し、
鍵を開けて中から手紙を取り出した。

「これが、その手紙だ。」

ウェールズがルイズに手紙を渡す。

「それで、皇太子殿下。亡命は如何するお積りなんですか？」

ルイズはウェールズに尋ねる。

「ん？亡命などしないよ。」

「そ、そんな。だって、あの手紙には亡命を進める文章が書かれて
いるはずです。」

「いや、そんな文章はどこにも。」

ウェールズはきっぱりと言い切った。

「それよりも、君達は早くここから退避した方がいい。もうじき、
反乱を起こした貴族派の連中がここを攻撃してくる。」

と、そこに既に攻撃を始まった合図の砲撃が轟く。

「な、何!?!」

キュルケは突然始まった砲撃を見て動揺する。と、そこに砲弾が応
接室の壁に当たって爆発する。

「うわあああ。」

爆発で応接室に居た者全員が爆風で壁に叩きつけられる。

「う、ううん。」

ローレットは起きると、そこにはぐったりとしているウェールズが
居た。

「！、殿下。皇太子殿下！」

揺するが、返事はない。だが、心臓を調べるとまだ動いていた。

（気を失っている。）

これは丁度いいと思い、ウェールズに仮死の呪文を掛ける。

（すみません。あの手紙には亡命を進める文章があったはずです。

それに、貴方にはまだ生きて貰わなければいけません。一国の貴族がこのような勝手をするのをお許し下さい。）

ローレットが心の中でそう謝った。そこへ、ルイズ達も気がついた。

「ど、どうしちゃったの？」

だが、起きたメンバーもウェールズが倒れているのを見つける。

「ねえ、皇太子殿下は？ねえ、ねえってば。」

ルイズが必死に尋ねるが

（すまない、ルイズ。）

首を横に振る。

「そ、そんなあ。」

「とにかく脱出だ。」

ローレットがウェールズの体を抱きかかえて、全員と共に脱出した。

- 城外 -

「タバサ、シルフィードで皆を連れて脱出してくれ。」

「ロ、ローレットは如何するの？」

ルイズが心配そうに聞いてきたが、

「心配ない。俺も必ず脱出するよ。」

タバサは頷き、口笛でシルフィードを呼ぶ。何処かで待機していたのか、吹いて直ぐに現れた。

「ギーシュ、これを姫様に渡してくれ。」

ローレットはギーシュに風のルビーを渡す。

「わ、分かったよ。ローレットも絶対に生きて帰ってきてくれよな。」

全員がシルフィードに乗ったところで、シルフィードはアルビオン大陸から離れる。

「さてと、俺も行くとしますか。」

ローレットは召喚魔法を唱え、IS-2が現れる。ヒュドラーと一緒にウエールズ皇太子を戦車の車内に入れ、エンジンを掛ける。

「ねえ、何でウエールズ皇太子を連れて行くの？」

「彼は死んでいない。私が仮死の魔法を掛けた。」

「えええ！！」

「彼にはまだやって貰わなければならない事がある。その為にも脱出する。」

全速力で重戦車が走り出した。

「ロー兄、目の前には敵だらけだよ。」

「構わん、撃て！」

ヒュドラーはそれを聞き、主砲を発射して道を空ける。そこを戦車が出撃する。メイジ等は魔法で攻撃をするが、戦車の分厚い装甲の前には無力当然である。かと言って、走って追いかけても、人間は瞬間的には時速50km越せる事も出来るが、それはあくまでも瞬間的であり、37kmで走る戦車に永遠と追いつけるなど無理な話であった(ついでに、重い鎧等を着けている貴族は走る事もできない)。

「難なく振り切れたな。」

アルビオンの森の中に戦車を隠して、ローレットは言う。

「それよりもロー兄、皇太子はどうするの？」

「ガリアの私の領地に入れる。そうすれば見つかる事もないだろう。」

そう言うって、彼は天山を召喚した。

「乗れ。」

ウェールズ皇太子を偵察員席に乗せ、離陸する。

「でもロー兄。この機体じゃあ航続距離が足りないんじゃないじゃあ。」

「だよな。」

「だよなって。」

ローレットは機上無線機のスイッチを入れる。すると

「坊ちやま、指定された海域までもう少しですよ。」

懐かしの爺やの声であった。

「え？どうしてローターさんの声が？」

ローター、ローレットの父に仕えていた爺やであり、今現在はローレットに仕えている。

「昨日、エニグマを使ってお願いしておいたんだよ。龍の巢の一つをアルビオンの近くまで接近させておいてくれと。」

エニグマ、ドイツ帝国が開発した暗号機であり、ローレットの部屋にも一基だけ置かれている。ちなみに、龍の巢とは空母の事である。

アルビオン領内を抜け、洋上にて空母が見えてきた。空母は日本の装甲空母「大鳳」である。

「着艦するぞ。」

機体の高度を下げ、飛行甲板へと向かっていく。

「ランディング。」

着艦フックを着艦用ロープに旨く引っ掛けるなど、機動部隊勤務歴の長い彼にとって朝飯前であった。

「爺や、わざわざすまないね。」

「なんのお、お坊ちゃまの為ならどんな所にも行きますぞ。」

「あはは、ありがたいよ爺や。」

「それで、ウェールズ皇太子は如何でしょうか？」

「暫くは反乱軍基地に収容しておこう。アンリエッタ姫には事情を説明しておく。」

ローターは頷く

「それじゃあ、私は約束があるんで。」

そう言つて、彼はシュトウーカを召喚する。そして、カタパルトに装着し、発艦する。

ローレットは自分の領内に衛士隊とは別に反乱軍を創設している。そして、反乱陸軍、反乱空軍、反乱海軍と部隊を分け、それぞれに独立した指揮権を与えている。

陸軍は第二次大戦の主にドイツ戦車で構成された機甲師団や平民で構成された歩兵部隊、自動車等で機械化された歩兵機動部隊が在り、他にも補給部隊等のハルケギニアにはない物で武装している。

空軍も主に第二次大戦機で構成された戦闘機部隊と爆撃部隊、オートジャイロで編成された支援部隊、整備兵の整備部隊等で構成されている。

海軍は戦艦2隻（大和、三笠）空母3隻（大鳳、信濃、グラフ・ツェッペリン）重巡洋艦2隻（高雄、愛宕）と三笠以外は第二次大戦の兵器で編成されている。

ローレットが全て、地球の兵器を召喚して組織された私設軍隊であり、その存在はこれだけの大規模な装備を持つていながらも公になつてはいなかった。（原因はガリアの南にある山岳地帯であり、この山岳地帯を越えるのは相当厳しい。その為、南の情報は殆どいっていいほど入らず、王室にもその存在は知られていない。）

この反乱軍の中にはジョゼフィー世を嫌う貴族も参加しており、その

勢力と軍事力はハルケギニアの国々が束になった所で敵うものではない。

「ふう。やっと戻ってこれた。」

魔法学院の門では、ルイズ等が心配そうに空を眺めていたが、一機の飛行機が見えると皆が笑顔になって手を振る。

「ランディング。」

車輪を接地させ、機体を止めてから風防を開け、機体から降りた。

「全く、遅いから心配したじゃない。」

ルイズが来て言う。

「すまない。ちょっと脱出に手間取ってな。」

「まあ、無事で何よりだね。」

「どうも、ギーシュ。」

「それよりも、早く報告を済ましてちゃいましょう。あまり、気が進まないけど。」

キュルケは残念な顔で言う。

（すまないな皆。だが、分かってくれ。これも、今後の為なのだ。しかし、黙っているのも心が痛むな。）

そこで、報告を終えた後にアンリエッタ姫と一緒に事情を説明する事に決めた。

ローレットの領地

- 学院長室 -

「そ、そんな。」

アンリエッタ姫はウエールズの死にショックを受ける。

「だって、亡命を促す文章を書いたはずなのに、無かったって。」
やはり、亡命に関するものは書かれていたようだった。

「あー、姫殿下。大変言いにくいのですが。」

ローレットは立ち上がり、

「ウエールズ皇太子は生きております。」

その言葉に学院長室にいた者は騒然とする。

「い、今何って？」

「だから、ウエールズ皇太子は生きている。」

「ど、どういふ事ですか、ローレットさん。」

アンリエッタが少し嬉しい顔をして聞いてくる。

「すみません。彼には仮死の魔法を掛けて私と共に脱出しました。」

今は、ガリアの私の領地に收容しております。」

「でも、一体どうして?」

「彼には再びアルビオンの王になって貰わなければいけません。その為、勝手ながらに脱出させました。」

「そう。良かったわ。」

アンリエッタ姫は安堵のため息を付き

「それで、何時になったらお会いできるの?」

「私の領地に来れば直ぐですが、ここで会うとなると直ぐには。」

「では、貴方の領地に連れって行ってください。」

「はい?」

ローレットは驚いた。まさか、小国だが一国の王女がこんな簡単に国を抜け出していいものなのか。

「しかし、公務の方は?」

「大丈夫です。それに、マザリーニ枢機卿にはある程度の事情を説明すれば分かってくれます。」

「はあ、そういう事なら。」

ローレットは承諾する。国は違えど、王女から依頼には従わざるを

得ない。のだが、

「私も行くわ。」

ルイズが乗ってくる。

「いや、しかし。」

「お願い!!。」

ルイズは更に強く言ってくる。そして、アルビオンに行ったもの全員が行きたいと言ってきた。

「ど、どうしましょうか？オスマン学院長。」

ローレットはオスマン氏に助けを求めるが

「行きたいと言っておるなら連れてやればよからう。ワシも許可するぞ。」

あっさりと承諾してしまった。

「仕方が無い。準備してくれ。」

「え、今から?。」

「夜に侵入しないと見つかる。」

全員が何で?という顔をするが、とりあえずは全員が門の所に来た。

ローレットが召喚魔法で再び連山を出す。しかし、これは7人乗りの為、椅子を一つ増設した。

全員が乗り込み、エンジンを掛ける。

「全員、準備はいい？」

「「「いいよ。」」」

アンリエッタ姫は動揺しているが、飛べば納得するだろう。ローレットはスロットルを全開にして滑走を始める。

「テイク・オフ。」

十分な速度になった所で離陸をする。

「え！？え！？このドラゴンは翼が羽ばたいていないのに飛んでいく？。」

アンリエッタ姫は動揺するが、ルイズがローレットに聞いた原理を説明し、納得した。

4時間飛行し、ローレットの領地に入る事に成功する。

「ピュドラー、地上との連絡は？」

「まだ入ってこない。」

「そうか。」

事情はエニグマで爺やに知らせてある。だから、そろそろ連絡があつてもおかしくは無い。

「あ、あつたよロー兄。」

ヒュドラーが無線に入った連絡を知らせる。ローレットは無線機を付け

「爺や、もうすぐ付く。ウェールズ皇太子は無事か？」

「はい。仮死の魔法が解けて、先程まで動揺をしておりましたが、事情を説明して納得していただけました。」

「まあ、頭の固い旧勢力の王族や貴族とは違うからな。」
「そう言つて無線を切る。」

「アンリエッタ姫、もうじき到着ですよ。」

「ええ。」

すると、ヒュドラーが耳打ちしてきた。

「ロー兄、今ねえ王室の方から妙な連絡があつたの。」

「なに!?!？」

実は、ローレットはマザリーニ枢機卿に連絡用の無線機を渡しており、何か問題が発生したら何時でもアンリエッタ姫を戻せるようにしておいた。

「それが、フーケが脱獄したようなの。それで、その脱獄を手引きしたのが。」

「え!?!」

「ワルドって言うトリスティンの子爵で、魔法衛士隊の隊長なの。彼自身も逃げて、その後の行方は分からないわ。」

「アンリエッタ姫、此方へ。」

ローレットはアンリエッタ姫を操縦席に來させ、先程王室からの連絡を伝えた。アンリエッタ姫は驚愕の眼差しでローレットを見る。

「ほ、本当なの。」

「はい。王室に戻られたマザリーニ枢機卿からの直接連絡なので。」

「そんな。ワルド子爵が。」

「その、ワルド子爵ってどんな人なんですか?」

「彼は、父親の領地と爵位を存続し、その後は一生懸命に国へ奉仕してくれてたの。その見返りとして魔法衛士隊の隊長に就任させたのだけど。それと、ルイズの婚約者だったの。」

「え?」

「親同士の決めた結婚だったんだけど、二人とも親密な関係だったし、言い難いわ。」

「確かに。それと、彼の領地は丸ごと私が買います。」

「え？」

「でも、貴方って。」

「これでも領主ですよ。言ったでしょ、過去にいろいろとありましたって。」

「そう。別にいいわ。」

「国が違うのにいいんですか？」

「貴方はウェールズ様を救ってくれた。その恩に報いらなければなりません。」

「ありがとうございます、姫殿下。」

飛行場が見え、着陸態勢に入る。

「ランディング。」

着陸に成功し、機体を格納庫の前に駐機させた。

「こ、これが貴方の領地？」

「いや、ここはその飛行場。」

「貴方の領地って。」

「ガリアの南の殆ど。」

タバサが言う。全員が驚く。

「貴方って何者？」

「ただの貴族。」

「ただの貴族って。」

「それよりも早く降りれば。」

とりあえず、一向は連山から降り、ローレットの屋敷へと向かう為の車を借りるために当飛行場の司令部へと向かい、車を1台借りた。

大勢のため、借りたのはM939（後部にグレネードランチャー、前部に12・7mm機銃で武装）であり、ローレットとアンリエッタを前に乗せ、残りは荷台に乗せた。

20分ほど走り、軍港の近くのローレットの屋敷に到着した。軍港には現在、戦艦と空母2隻が停泊しており、残りは海上調査を行っていた。

「ねえ、あれは何？」

キュルケは停泊している大和を指して言う

「あれは大和。軍艦だよ。」

「軍艦つて、煙が出ているじゃない。」

「当たり前だよ。蒸気タービンだし。」

「蒸気タービン？」

「詳しい説明は後日。目的はウェールズ皇太子に会うことでしょうか？」

「そ、そうね。」

一同はローレットの屋敷の敷地内に入る。

「これが貴方の屋敷？小さいわね。」

「ここは確かに屋敷だが、ここは小さい屋敷だよ。主に海軍の予備総司令部としても機能するように造ったかね。」

「大きい屋敷つてどれくらいの大きさよ？」

「この屋敷の10倍ほど。」

「「そ、そんなに!？」」

とりあえず屋敷の中に入った。

「お坊ちやま。お待ちしておりました。」

「爺や、早速だがウエルズ皇太子は？」

「今は食堂に居ります。食事を暫くしていないのか、食事を凄く取っております。」

「包囲されていたからな。食料も尽きかけていたのだらう。」

・食堂・

扉を開けると、そこにはウエルズが食事を取り終えて一同を待っていた。

「いやー、感謝するよローレット君。お陰で久しぶりにまともな食事を取れたよ。」

「お気に召して光栄です。」

そして、アンリエッタとウエルズが抱き合う。

「ああ、愛しのアンリエッタ姫。こうしてまた会えて嬉しいよ。」

「ウエルズ様。」

二人が抱き合ってるのを遠目に才人は

「なあ、ローレット。お前って、どうしてこんなにも魔法を使えるんだ？」

「さあね、気づいたら沢山の魔法を使えるようになっていた。」

「それに、本当に帰りたいと思わなかったのか？」

「ああ。一度も思った事は無い。」

「何で？」

「才人、お前は日本の事をどう感じている？」

「え、平和で良い国だと思うけど。」

「平和なら、どうして殺人等の争いが絶えない？」

「そ、それは。」

「ありもしない平和主義を叩き込まれ、国自体が矛盾しているから、私は帰りたいなどと思わないんだよ。」

「じゃあ、平和を望んでいないのか？」

「言ったとおり、ありもしない平和よりも本当の平和を求めているんでな。あの大战中の日本をどう感じたんだ？」

「日本は侵略国家として戦い、敗戦していった。」

「それも、アメリカの教え方だな。アジアの解放の為に日本は戦っていたとは教えず、国のために戦って死んでいった者たちを侵略者扱いをし、特攻隊をテロリスト扱いをする。それが、現代日本の現

状だよ。」

才人は黙り込んでしまった。

「いいか、国際社会がおかしいと思え。現に、原爆を投下したアメリカを何故、国際社会は納得している？何故貧困に苦しんでいた独逸を救ったヒトラーを世界は嫌う？。」

「それは、第二次世界大戦を起こしたから。」

「その戦争の根本的な原因はベルサイユ条約にある。そして、その後起こった世界恐慌。それが原因なのに何故気づかない？。」

才人は再び黙り込んでしまった。

「歴史を少しは学べ。そうすれば、先入観だけで培った知識の間違いに気づき、新たな知識を手に入れることができるぞ。」

「分かった。」

「もう眠れば？部屋は全員分の用意をさせてある。」

才人は目を擦った。

「爺や、皆さんに部屋を案内して下さい。」

「分かりました。では、皆さん。此方へ。」

爺やも全員を部屋に案内するため、食堂を出る。

・ローレットの部屋・

「才人には言い過ぎたかな？」

そうローレットは独り言を言う。そこへ、扉が開いてヒュドラーが入ってきた。

「ロー兄、眠れないの？」

「ああ、それよりもお前はどつしたんだ？」

「私も眠れないの。ねえロー兄、一緒に寝てもいい？」

「別にいいけど。」

ヒュドラーはローレットのベッドに入る。入った途端に寝息をたてて寝てしまった。

「眠れるじゃん。」

そこで、ローレットも目を閉じる。そして、暫くそうしていると自然に眠ってしまった。

竜の羽衣

翌朝、普段どおりの朝を過ごしてローレット達は飛行場へと向かった。

- 飛行場 -

「そろそろトリステインに戻りましょう。姫殿下もトリステインでの公務があるのでしょうか。」

「ええ、そうですね。」

一同は駐機されていた連山に乗機し、滑走路の端へと移動する。

「管制塔、離陸準備よし。離陸許可を求む。」

「こちら管制塔、離陸許可。グッドラック。」

「了解、感謝する。」

ローレットはスロットルを全開にし、離陸する。連山は発見をされないために一旦海に出て、そこからぐるっと回り道をしてトリステイン内へと入る。そして、王都上空を通過して魔法学院へと帰った。

「それでは姫様。」

「ええ。ウェールズ様を救っていただいたありがとうございます。」

領地の件はまた後ほど。」

「すみません、無理を言つて。」

「構いません。これも貴方の行った功績を称えてのことです。」

「感謝の言葉がありません。」

ローレットがアンリエッタ姫にお辞儀をする。アンリエッタは微笑をかけて馬車に乗り、王宮へと帰っていった。この後、アンリエッタ姫はゲルマニアとの同盟を破棄する事になった。

・学院長室・

「そつか。」

「はい、勝手ながらの救助にはお詫び申し上げます。」

「いやいや、姫様も喜んでおられた。しかし、どうしてあんな事をする？」

「ウエールズ皇太子はアルビオンの指導者として立ち上がったもらわなければなりません。彼も、それを納得はしてくれました。」

「ふむ。でも分からん、君は一体何をしたいんじゃ？」

「ハルケギニアの和平ですかね。その為にも彼を指導者に新生アルビオンを復活させなければいけません。」

「ゲルマニアはともかく、ガリアの方は如何するつもりじゃ？」

「まだ言えませんが、適任者は居ります。」

「なるほど、一国の貴族としては凄い思想の持ち主じゃな。」

「学院長、貴方には話しておきます。私の祖国は戦争で全てを失いました。それを、ハルケギニアの国が同じ運命を歩んでほしくはありません。私はできる事なら平和を、このハルケギニアの国々恒久平和を目指したいんです。」

「なるほど、確かに私も平和には賛成じゃ。しかし、事はそう簡単に動くものではない。それはわかっておるな？」

「はい。」

「まあ、私も出来るだけの事は協力しよう。他の先生方も協力をしてくれる筈じゃ。」

「ありがとうございます。」

ローレットはオスマン氏に頭を下げてお礼を言った。

「それで、明日は如何するつもりじゃ？また2日間ほど学院が休みになるが。」

「休み多くないですか？」

「王室からの連絡じゃ。理由はワシも知らんがな。」

(まさか、フーケの脱獄で他の貴族や王宮の者に疑いが掛かったんじゃない?)

ローレットはそう感じた。

「明日はシエスタの故郷に才人達と行く事になっております。なんでも、彼女の村には竜の羽衣って言う宝があるらしいですから。」

「なるほど。しかし、それは飛ばないと聞いたが。」

「実際、宝なんてそんなもんですよ。」

・ローレットの部屋・

「ねえロー兄、最近ルイズ達に気を許しすぎていない?ずっと秘密にしていた反乱軍の事も見せちゃおうし。」

「彼女等は信用できる。勝手に人の秘密をしゃべるような奴じゃないことは話していれば分かる。それに、シャルロット嬢にも見せておきたかったしな。」

「ガリア解放の為に?」

「ああ。だが、最初にあの兵器が初陣を飾るのはガリアではなく、恐らくは。」

「?」

「いや、何でもない。もう寝るぞ。」

ローレットは電気を消し、カーテンを開けて眠った。

翌朝、約束通りにシエスタの案内で彼女の故郷、タルブ村に到着した。

- タルブ村 -

「それじゃあ才人さん。少し待っていてください。」

シエスタは足早に自分の自宅に向かう。

「それにしても、何も無い村ねえ。」

「キュルケ、こういう辺境の地には貴族が知らない凄い物があるものだぞ。」

「凄い物ね。まあ、実際に竜の羽衣って言う凄い物があるけどね。」

「まだ見ていないだろう。」

「それもそうね。」

暫く待っていると、シエスタが戻ってきて

「才人さん。その竜の羽衣は才人さんにあげてもいいって。」

シエスタは才人に言った。

「じゃあ、案内を頼む。」

シエスタに続き、一同は茂みの奥に入っていった。暫く行くと、日本では見慣れた神社があり、更に行くに神社風の物で祀られた大きな小屋があった。その小屋の門をローレットと才人で開ける。

「これが、竜の羽衣。」

中の物を見たルイズたちが声を上げる。ローレットと才人も行くとそこにあつた物は

「ぜ、零戦!?!」

「何で、これがこの世界に。」

ローレットは自分が太平洋戦争でずっと戦い続けた愛機（マリアナ沖海戦時は彗星）。太平洋戦争緒戦において無敵の零戦神話が有名になったが、後継機に恵まれず、太平洋戦争を戦い続け、後半では特攻にも使用された悲劇のレシプロ艦上戦闘機がそこにあつた。

「シエスタ、ひいおじいさんの遺品は無いか？」

才人は言う。シエスタは今、取ってきますと言って小屋から出て行った。

ローレットは零戦に駆け寄って機体に触る。

「固定化の魔法が掛けられているな。」

そして、機体の燃料タンクを調べるために蓋を開ける。

（なるほど、これじゃあ飛べなかったのも納得がいくな。）

タンク内は少量のガソリンしか無く、飛ぶのに必要な燃料は入って
いなかった。そして、ローレットは機体に書かれた文字と機体番号
を見て驚く。

「ま、まさか、これって。」

「ん？どうした？」

才人が聞いてくる。

「佐々木の機体。」

ローレットは慌てて外に出る。そして、先程見つけた神社へと向か
った。そこに書かれていたのは

『海軍少尉 佐々木武雄。異界二眠ル。』

その瞬間、ローレットの目から涙が溢れた。

（そんな、佐々木。何故、何故もつと早く気づかなかったんだ。俺
は16年も前からこの世界に居たのに、どうして。）

そこにひいおじいさんの遺品を持ったシエスタと小屋からヒュドラ
ーが走ってきた。

「ロ、ローレットさん、如何したんですか？」

「ロー兄、何で泣いてるの？」

「ご、ご免。大丈夫だから。」

ローレットは涙を拭ってシエスタを見る。

（なるほど、今見ると日本人みたいな顔立ちだな。）

最初、ローレットはシエスタの顔を見たときに珍しい顔立ちだと思っただが、ここでその理由を納得した。そこに才人も走ってくる。

「これが、ひいおじいさんの遺品です。」

シエスタが差し出した物はゴーグルと飛行帽であった。

「それと、ひいおじいさんの遺言なんですが。この神社に書かれた文字を読む者に竜の羽衣を譲る。そして、必ずしも竜の羽衣を天皇陛下にお返ししてほしい、と。」

才人も神社に書かれた文字を読み上げる。

「じゃあ、才人さんに竜の羽衣の存続権がありますね。」

「いや、多分ローレットが先に読んだと思うけど。」

「いいよ才人。君に譲るよ。」

才人はローレットの顔をじー、と見つめる

「な、何だよ？」

「なあ、ローレット。お前って、この佐々木武雄と何か関係があるんじゃないか？」

「え？」

「だって、涙の跡があるし。」

「ああ、あれは昭和20年5月29日（この日、実際に横浜大空襲が発生している）。この日、俺の祖国に敵の爆撃機と戦闘機が侵入したんだよ。私は、列機を率いて迎撃に昇って20分ほどの戦闘になった。そして、戦闘が終って列機を集めさせると佐々木の機だけが見つからなかったんだ。他の者も佐々木の機が撃墜されるのを見てないって言うし、結局は行方不明扱いとなったんだよ。」

「それが、この佐々木武雄だと。」

「ああ、あの文字は間違いない。機体番号は撃墜されて補充機ごとに違うが、あの文字はあいつが愛機に書いていたものだ。間違っは無い、あいつは初陣からずっと戦い続けた仲だ。」

「そうだったのか。」

「あいつの機体を受け取ってくれないか？」

「ああ、そういう事ならいいよ。」

「ありがとう。」

「しかし、どうやって運ぶんだ？」

「それなら問題ない。」

「え？」

ローレットは持ってきた背負い式の鞆からエニグマを取り出し、電文を洋上の空母に発信する。そして、洋上に待機している空母からある物を発艦させた。

竜の羽衣（後書き）

ご都合で勝手にシエスタと才人は知り合っていたと言う設定にしてしまいました。勝手な状態ですみません。

タルブ村奪還

洋上の空母から1機のCH-54と1機のUH-1が来た。

「な、何なんですか？」

「また別の方法で空を飛んでいる。」

飛んできた2機のヘリが珍しく、才人とローレット、ヒュドラーを除くメンバーは驚く。そして、降下するなりCH-54はロープを下ろした。それをローレットが零戦に括り付けて固定する。

「上げる。」

CH-54はそれを合図に上昇を始める。次にUH-1が降下して、着陸した。

「乗ってくれ。」

「うん。」

シエスタは村に残るため、他のメンバーはUH-1に搭乗し、離陸を始める。

「ご苦労様。わざわざ呼び出してしまつてすまない。」

「いえいえ、ローレット様のお役に立てるなら構いませんよ。」

ローレットが機長にお礼を言い、魔法学院を目指すように指示を出

す。20分程度飛行をし、2機のヘリは魔法学院へと到着した。

- 魔法学院中庭 -

「な、なんじゃ?。」

オスマン氏は中庭へ降下中のヘリを見て驚く。他の生徒や先生も何事かと見に来る。そして、もう一機のCH-54が機体を吊るして合流した。

UH-1は着陸し、中からルイズたちが降りたので他の学院の者は安心し

「ミス・ヴァリエール、これは一体?。」

「竜の羽衣を持ってきたのよ。」

着地している零戦のロープを外し、ローレットはそのヘリと自分達を運んできたヘリに帰還命令を下す。

「もうちよい、もうちよい。」

もう一機の機体を吊るしているCH-54に指示を出す。そこにコルベールがやって来て

「コ、ローレット君。これは一体何なのかね!?。」

コルベールは興奮気味に言う。ローレットは彼が研究熱心なのをオスマン氏から聞いていたので納得はするが。

「これは飛行機と言い、空を飛ぶための物です。そして、それを吊るしているのがヘリコプターと言います。」

「そ、それはどうやって動いているのかね？」

「詳しい原理はまた今度にも話します。」

「そ、そうかね。それは残念だ。」

コルベールは少し残念そうな顔をする。そこで、ローレットは零戦の燃料の蓋を開け、中に残っていた微量のガソリンをビンに入れ

「先生、これを複製できますか？」

そのビンをコルベールに見せる。

「何だねそれは？」

「これはガソリンと言うものです。この飛行機の言ってみれば血液ですかね。」

「では、これが無いとこの飛行機とやらは飛べないのかね？」

「はい。だから、複製を出来ますか？できれば、樽4個分を大急ぎで。」

「うーむ、何とかやってみよう。」

コルベールはガソリンの入っているビンを受け取り、大急ぎで自分

の研究室へと向かった。

「ねえロー兄、なんでこれを運んで貰ったの？」

「最近、アルビオンでは不穏な動きがあるからな。念のためだ。」

ローレットが運んで貰ったのは、独逸の急降下爆撃機シュトウーカのG型である（しかも、此方でローレットが改良を加え、1t爆弾を装備でき、37mm機関砲も命中率を上げるように弾道安定装置を取り付けられている。しかも、エンジンも出力を上げられており速度は420kmまで上がっている。）

と、そこにローレットが予測していた言葉が街に行っていたギーシユから齎された。

「み、皆大変だ！！。アルビオンが、新国家レコン・キスタと名を変えて、このトリステインに宣戦布告した！！。」

「え？」

中庭に集まっていた生徒と先生は騒然となる。

（やはり、こうなったか。）

ローレットは初めからこうなる事は予測しており、この機体を学院に運び込んだのもそれが目的であった。

「それで、状況は？」

「アルビオンは戦列艦を数隻と竜騎兵部隊でタルブ村に係留したそ

うだ。今、女王陛下が部隊を率いて反撃に向かっている。」

「じよ、女王陛下が!?!」

ローレットは驚く。まさか、一国の王室の者が先陣を切って反撃に転じるなんてローレットには予測し得ない事であった。

「まずいな。」

「ええ。」

ローレットの言葉にルイズは同意する。そして

「私、行ってくる。」

「え?」

ルイズは馬に乗って駆け出して行った。

「お、おいルイズ。」

才人は追いかけてよとしますが、馬に乗って走っていく人間に追いつくなど無理であった。

そして、翌日。女王陛下の率いる部隊はタルブ村までもう少しと言ったところまで迫っていた。

「あなたが居てくれて心強いわ。ルイズ・フランソワーズ。」

アンリエッタ姫が見た先には、昨日学院を飛び出して行ったルイズが居た。

「ええ、ありがとう。」

昨日学院を抜け出し、女王陛下の率いる部隊に合流、そのまま部隊に加わったのだ。

一方、学院は

「みんな帰っちゃうのね。」

他国からの留学生は安全を考えて自分の国へと一時避難を始めていた。ローレットは才を手伝って零戦を入念に整備している（ローレットが零戦に初めから積んでいた無線機を外し、自分達の領地で量産している小型機上無線機を積んだ）。なお、トリスティンの貴族の男子は王室の命令で半ば無理やり出兵する事になった。

「なあ、ローレット。」

「なんだ？」

「お前の所の領地って、どんだけ科学力が進んでいるんだ？」

「第二次大戦の兵器は既に量産体制を確立している。科学レベルもそこまで進んでいる。ただし、軍艦の方はまだ進んでいない。」

「どうして？」

「蒸気機関の開発がまだ出来ていない。」

「なるほど。」

そこに、タバサとキュルケが来た

「ねえ、ローレット。貴方はどうするの？国へ帰るの？」

「うーん、如何しようかな。そっちは？」

「私は一旦ゲルマニアへと戻るわよ。こんな小国で心中じゃシヤレにならないから。」

そこに、コルベールが来た。

「ロ、ローレット君。才人君。やっと複製が出来たよ。ほら、この通り樽4個分。」

コルベールは浮遊させている樽を地面に置いた。

「戦況はかなり悪いらしく、タルブの村は既に炎上しており、敵の戦列艦の中に1隻だけ巨艦がいるらしい。」

「そんなに。」

「タルブだって!？」

才人はコルベールを見て言う。

「あそこには、シエスタが。」

「助けに行きたいのか？」

「当たり前だ！！」

「……分かった。協力するよ。」

ローレットは複製されたガソリンを燃料タンク内に入れ、蓋を閉じる。そこにヒュドラーが来て

「ロー兄、帰るの？」

「いや、戦う。」

「え？」

「いいから乗ってくれ。」

ローレットはシュトウーカに飛び乗る。そして、ヒュドラーも乗った。

「ちよ、ちよっとローレット。貴方にはこの国は関係ないんじゃないっ？」

「ああ、だが姫殿下を死なせたらウェールズ皇太子に申し訳ないんで。」

キュルケは言うが、ローレットはエンジンを掛ける。オ人の方はエナーシャーを回さなくてはならず、仕方なくコルベールに手伝って

もらってエンジンを掛けた。

「行くぞ、才人。」

ローレットは機上無線機をオンにして才人に言う。

「ああ。」

二人はスロットルを全開にして加速を始める。しかし、

「しまった。勢いよく飛び出したのはいいが、離陸距離が足りない。」

いつものは門のところから滑走するために離陸距離は問題にはならなかったが、今回は中庭で壁がある。

「ま、まずい。」

すると、見ていたタバサが杖を振った。そしたら、風が吹き、機体が持ち上がって離陸した。

（タバサか。相変わらず、表情一つ変えないから分からないが、今のはタバサがやったのか。）

ローレットは座席越しに中庭に居るタバサを見た。見ると、タバサはシルフィードを呼んで、キュルケを乗せて飛び上がり、此方へ向かってくる。

・タルブ村・

「突撃、何としても戦艦を落とすんだ。」

衛士隊は戦艦の真下に入り込み、魔法で戦艦を落とすことになった。しかし、現実には甘くなく、接近する者には容赦ない戦艦からの砲撃と、竜騎兵隊からの魔法攻撃が降り注いだ。

「グリフォン隊は左翼に展開。竜騎兵と交戦してください。」

アンリエッタはタルブ村の少し前にある丘から率いて来た部隊に指示を飛ばす。しかし、アンリエッタの指示空しく、部隊は次々とやられていく。そこへ

「な、なにこの音?。」

突然聞きなれない音が聞こえてきた。そして、その音の正体を知る者はこの部隊ではルイズとアンリエッタだけである

「ま、まさか。」

2人は音のする方角を見る。すると、2機の飛行機が彼女等の居る丘の上を通過していく。

「酷いな。」

到着した2人はタルブ村の現状を見て驚く。無念に炎上している建物、既に燃え尽きて崩れ去っている建物。

「ゆるさねえ。」

才人は零戦を急上昇して反転させ、竜の真上に出た。ガンダールブの力が働いている才人にとって、ローレットなどのベテランパイロット程の技術はないがこんな機動は難なくこなした。

「喰らえ。」

才人は20mmの発射レバーを絞り、発射する。20mmは狙い通りに竜に命中、撃墜された。

一方、ローレットは

「悪魔のサイレン轟かせ、敵前一斉急降下。と、いつでも一機しか居ないが。」

「ねえロー兄、それって何の歌？」

「私が考えた歌。」

そう言ってローレットは急降下に入る。目標は目の前にある巡洋艦「クルセイダー」

「投下!!!。」

ローレットは投下レバーを引き、機体から1t爆弾が投下される。それは、狙い通りにクルセイダーの上甲板を貫通。内部にて爆発し、撃沈した。

「さすがに1t爆弾には耐えられないだろう。」

「すごいねロー兄。」

マリアナ沖海戦で彼は愛機が発動機の不調で愛機が発艦できなくなり、飛行長に無理を言って彗星艦爆で出撃している。そして、米軍の強固な防空体制を突破し、VT信管による正確な対空射撃の中を物ともせずに爆弾を命中させた彼にとって、この戦場は生易しいものであった。

「ロ、ロー兄、前!!前!!。」

「え?」

燃え盛るクルセイダーに気を取られていて、目の前に竜騎兵が現れた事に気づかなかった。

「?まれ!!。」

ローレットはすかさず機体を垂直にし、

「秘技、主翼切り!!。」

主翼の端で竜騎兵を叩き落した。後ろにも何人かの竜騎兵が現れるが

「任せろ。」

才人が零戦で蹴散らしてくれる。次にローレットが目標に決めたのは戦艦「サラトガ」であった。召喚魔法で1t爆弾を再装備し、接近する。

「行くぞ!!。」

機体を急降下させる。

「投下!!。」

サラトガに命中。弾薬庫が爆発したのか、二次爆発で甲板が火災に包まれて降下を始める。

「巡洋艦全滅。」

暫く戦闘が続き、ローレットは巡洋艦を全滅させる。残るは敵の大型戦艦「レキシントン」だけである。

「ん?何だ?」

才人の目の前に全滅させたと思っていた竜騎兵が1人現れる。ローレットはその竜騎兵を見て

「才人、そいつは元トリスティンの貴族。ワルドだ!!。」

機上無線機で才人に伝える。そして、地上では

「え?ワルド?」

ルイズが驚きの目でワルドを見ている

「ルイズ。」

アンリエッタも何時かは話そうと思ったが、その前にルイズが気づいてしまった。そこにシルフィードが到着して

「タバサ、私を才人の所に連れて行って。」

タバサにお願いをする。タバサ自身は頷き、乗ってと合図をする。

「くっそ、早い。」

ワルドの乗っている竜はこれまでの火竜とは違い、攻撃力こそ無いが速度の速い風竜であった。

「才人、合図したら機体を左に旋回させる。」

ローレットが機上無線機で指示を出す。

「分かった。」

ローレットがワルドの風竜の後方について、

「今だ!!。」

合図を出す。才人は言われたとおり左に旋回を始め、それを見たローレットは37mm機関砲を発射する。

「ち、何時の間に!!」

ワルドは避けようとするが、大きな体の風竜は37mm機関砲を浴びて気絶する。

「仕留めたか？」

ローレットは落下していく風竜を見て言う。そこに、シルフィードが来てルイズが零戦に向かってダイブした。

「え？ルイズ。」

ローレットはルイズを巻き込まないために才人の零戦から距離をとる。才人も気づいたのか風防を開けて

「ル、ルイズ？一体どうして？」

「馬鹿。それはこっちの台詞よ。何であんたがここに居るのよ？」

ルイズはタバサのレビテーションで零戦にうまく乗り込んだ。

「才人。！、危ない！！。」

機上無線機で才人に叫んだが、才人の零戦の左主翼が魔法で貫かれた。

「仕留め損なつたか。」

魔法を放ったのはワルドであった。ローレットは風竜に接近して攻撃し、才人の体制を立て直すまで時間を稼ぐ。

「くっそ。これじゃあ敵の戦艦を仕留められないぜ。」

ローレットはそう言いながらワルドを追い掛け回す。

と、そこに。機上無線機から

「エクスポーション。」

「な！？これは。」

才人の零戦から突然、眩しい光が発生した。

「こ、これが虚無の、魔法？」

ワルドは目の前から消え去り、敵の大型戦艦も大火災を起こして降下を始めた。

「くっそ、操縦系統を。」

ローレットのシュトウーカも少しの巻き添えを喰らったらしく、操縦が利きにくくなった。

「ローレット、俺の零戦の損傷が深刻だ。タルブ村に着陸するぞ。」

機上無線機から連絡があり

「私のもだ。操縦が利きにくくなっている。」

ローレットも答えた。だが、才人の零戦の損傷は深刻らしく、畑に

胴体着陸と言う形で着陸した。ローレットのほうは車輪は固定式のため、うまく車輪を地面に接地させて着陸に成功する。

水の精霊 前編

着陸したシュトゥーカの風防を開けて、ローレットは何とか機体から降りた。

「ヒュドラー、大丈夫か？」

ヒュドラーも風防を開けて降りる。

「ええ、それにしてもあれって。」

「ああ、間違いない。ルイズが虚無に目覚めたんだ。」

ローレットは才人の零戦へと走って行った。

「て、てて。ルイズ大丈夫か？」

才人は胴体着陸を成功させたはいいが、少しの間気を失っていた。

「え、ええ。それよりも何で来たのよ？」

「この村を助けたかった。」

「馬鹿！。だからって、何でこんな危険なマネをしたのよ。」

そう言ってルイズは才人にキスをする。才人は混乱して訳が分からない。

「な!？」

「勘違いしないでよね。助けくれたお礼なんだから。」

「お二人さん、仲良くなったね。」

そこにローレットが風防を開けて言った。

「そ、そんなんじゃないよ。」

才人とルイズは必死で誤魔化すが、頬が赤い。

「まあ、なにせよ無事で良かった。この機体は俺の領地で修理するよ。」

「何でだよ?」

「忘れたのか?この機体は私の戦友の形見だぞ。大切に整備してやらんとな。」

数日後の王室

「貴方達のタルブ村での功績と、遅くなりましたがフーケの事件での勲章等の授与を行います。」

王室にタバサ、キュルケ、ルイズ、ローレットの4人は呼ばれた。

ローレットとタバサには精霊勲章を、ルイズとキュルケにはシユヴ
アリエの称号が授与される。

「は、ありがとうございます。」

4人は杖を掲げて礼をする。

- 魔法学院 -

「ねえロー兄、勲章なんかもらってもいいの?。」

「王室がくれるって言ったんだ。貰わなければ失礼だろう。」

「それに、領地も貰ったんでしょう。」

「ああ、ワルドの領地を丸ごと貰った。」

「どうするつもり?。」

「そこにも司令部を作る。と、言っても部隊はまだ駐留させないが
な。」

「ガリアの監視があるから?。」

「ああ、あの無能王の事だ。近いうちに私に無理難題を押し付ける
だろう。明日からは学院は戦の為の長期休み。私も領地へと戻るよ
うに爺やに頼んでおいた。」

「それから如何するの？」

「しばらくは領地に居て、その後はアルビオンの解放戦争に参戦するよ。」

「トリステインに宣戦布告したのに？」

「俺も、今ではトリステインに領地を持っているからな。国籍はガリアだけだ。」

「だったらいいじゃない。」

「ウエールズ皇太子との約束がある。それに、トリステイン一国だけでアルビオンには敵わないよ。」

「それはそうだけだ。」

「いいから寝ろ。」

「うん。」

翌日、迎えの馬車が来た。

「爺や、迎えをご苦労様。」

馬車でローレットのガリア領地に行くには9時間は掛かる。その為、トリステインの領地にヘリを待機させておき、そこから洋上に出て

空母に着艦。そこから艦載機で領地へと戻るといふ事になっていた。

・空母 大鳳・

「ヒュドラー、爺や、乗ってくれ。」

艦載機にはヒュドラーと爺やも乗る為、天山を用意されている。

「すみません坊ちゃま。本来は私めが運転せねばならないのですが、異国の乗り物はどうにも理解できなくて。」

「気にしないでいいよ爺や。」

そう言つてローレットは発艦させる。5時間飛行をし、飛行場へと着陸。その後、ローレットの屋敷へと向かった。

・ローレットの屋敷・

幾つも屋敷を持っているローレットだが、この屋敷は許された者以外は入れないようになっている。ここは、彼の持つ屋敷の中で一番大きな、彼の亡き父親が所有していた屋敷である。

「お帰りなさいませローレット様、ヒュドラー様。」

使用人達が一斉にお辞儀をする。

「食事の用意は？」

「はい、食堂にご用意させてあります。」

「ありがとうございます。」

ローレットは貴族の証であるマント脱ぎ、使用人に渡す。そして、食堂へと向かった。

・食堂・

「やあ、ローレット君。」

「な、ウェールズ皇太子殿下。」

慌ててローレットは礼をする。

「こ、このような格好で失礼します。」

「いや、いいよ。こっちも話していなかったからね。」

「しかし、どうしてここに？」

「そんな事よりも君、あのアルビオンが誇る大型戦艦「ロイヤル・ソヴリン」を撃沈したんだって。凄いじゃあないか。」

「いえ、あれだけは私が沈める事は出来ませんでした。やったのは、ルイズです。」

「ル、ルイズって、君と一緒に来た髪がピンク色の？」

「はい。」

「彼女が。」

「いやー、それにしても凄い。あれは浮沈艦としてアルビオンの技術陣の総力を結集して建造した新機軸戦艦だったんだよ。敵の手に渡ったときには如何しようかと思ったほどだ。」

「そんな事よりも食事は足りましたか？」

「十分だよ。いやー、君の領地は本当に変わっているねえ。貴族、平民を関係無しに団結して物の生産に励んでいる。」

「総力で行わないといけませんので。身分に捉われていると必ずしも良い結果になるとは限りません。」

「確かに。それは重要な事です。」

「とりあえず、私は食事を取りたいので失礼します。」

「ああ、すまない。」

そう言ってウエールズは食堂から出て行った。そして、食事を食べていると

「ローレット様、王室からの伝書でございます。」

爺やが伝書を持って来た。ローレットの領地は王都から山岳地帯を越えなくてはならない。その為、連絡にはガーゴイルか伝書鳩で送られてくる。

内容は

『ラグドリアン湖の水が溢れ、付近の住民が困っている。原因を突き止め、解決せよ。』

「また無茶苦茶な。」

「何時、取り掛かれますか？」

「明日、朝一に。」

「ご武運を。」

爺は一礼して立ち去る。ローレットは食事を済まして、部屋に戻った。

・ローレットの部屋・

「ねえ、ロー兄。なんて内容だったの？」

「ラグドリア湖の水が溢れているから解決しろだよ。」

「なんで溢れているんだろう？」

「さあな。ラグドリア湖には水の精霊が住んでいるし、恐らくは水の精霊の仕業だろう。」

「でも、何で突然？」

「分からん。とにかく、明日に行ってみる。」

「うん。」

ローレットは電気を消し、カーテンを開けて眠った。

水の精霊 後編

翌日、ローレットは自分の愛刀を持ち、飛行場に駐機されているシユトウーカに乗る。

「ねえロー兄、いつもこの機体だけど、気に入ってるの?」

後部機銃手席に座ったヒュドラーが尋ねる

「複座席で、運動性能も良い。おまけに強力な武装だ。私は気に入っているが。まあ、愛機の零戦ほどではないけど。」

「あの、真つ黒の飛行機?」

「ああ、こちらの世界で技術向上を行って強化した零戦だ。あれが、太平洋戦争にあつたら戦況もある程度変わっていただろう。」

ローレットは飛行場の端にある、一つの小屋を見て言う。その小屋には、彼がこの世界に召喚し、ずっと技術開発に専念され、その零戦は真つ黒に塗装されており、ツヤの出るほど入念に磨かれ、エンジンなどの装備を改修した零戦強化型が眠っている。

「じゃあ、行くよ。」

風防を閉じ、エンジンを掛ける。

「お坊ちやま、ご無事で。」

爺やが声をかけてくるが、ローレットにはもう聞こえていなかった。

「管制塔、滑走準備良し。離陸許可を。」

「了解、離陸を許可する。グッドラック。」

スロットルを全開にし、離陸する。

「ねえ、ロー兄。ラグドリア湖ってどんな湖？」

「夜も言ったとおり、水の精霊が住んでいる湖だよ。水のメイジはそこで契約を行うんだそうだ。」

「じゃあ、ロー兄もやったの？」

「一応は。」

「どんな精霊だった？」

「覚えちゃいないよ。なんせ、4歳だったから。」

「ふーん。」

シュトウーカはラグドリア湖目指して順調に飛行を続ける。そして、ラグドリア湖に近づいたその時に

「ねえ、あれって？」

「ん？」

ヒュドラーが指を指す。

「これで見てみる。」

ローレットは双眼鏡を取り出し、ヒュドラーに渡した。

「うーん。」

双眼鏡を覗いて、ヒュドラーは先程見つけた物を見る。

「あれって、シルフィード!?!」

「何!?!」

ローレットは操縦桿を膝で挟んで、予備の双眼鏡で見る。

「間違いないな。」

ローレットは操縦桿を握り、シルフィードの飛ぶ方角へ機体を向かわせる。

「な、ローレット!?!」

接近してきた機体に気づき、キュルケが声を上げる。

「どどどどど?」

タバサは接近する機体を見て呟いた。ローレットも機体を横につけ、
風防を開けて

「なんでここに？てか、どうしてキュルケまで？」

「ハイ。て、それはこっちの台詞よ。」

「あー、なんて言うか。王室からの命令って言って分かるか？」

「私達もそれよ。」

「なに!？」

聞けば、キュルケとタバサ（正確にはタバサへの依頼で、キュルケは偶然居合わせて、彼女が同行を希望した）はローレットと全く同じ任務でラグドリア湖目指して向かっていたらしい。

「それで？何で同じ依頼を二人の人間に頼むのよ？。第一、貴方って一体何者なの？」

「知らないよ。それに、私はガリアの貴族。まあ、タバサと同じ事情だが。」

キュルケはタバサを横目で見る。

「それで、何でキュルケがガリアの依頼を受けているんだ？」

「わ、私はタバサが心配だったのよ。それに、」

「それに？」

キュルケは黙ってしまった。

（ま、まさかキュルケ。聞いたのか？タバサの、いや、シャルロット嬢の過去を。）

ローレットはキュルケを見て、次にタバサを見た。

ローレットはラグドリア湖の畔に機体を着陸させる。その近くにシルフィードが降り立ち、一行はラグドリア湖を見る。

「酷いな。」

村は沈んでいる。そこに、キュルケがローレットの肩を引っ張って森の奥に連れ込んだ。

「ねえ、貴方って知ってたの？タバサの過去を？」

（やっぱり。知ったんだな。）

ローレットはそう思い、口を開いた

「ああ。じゃあ、彼女の名も聞いたんだな？」

「ええ、彼女はシャルロット。ガリア王家の者でしょう。」

「正確にはガリア王家の者だったと言った方が正しいが。じゃあ、彼女の母君の事も。」

「エルフの毒にやられたんでしょう。執事から聞いたわ。」

「ああ、あの日。私とシャルロットとその母君はパーティに参加していた。そして、シャルロットがグラスを貰い、飲もうとしたその時、」

「母がグラスを飲んで、タバサを庇った。」

「ああ。私の目の前で母君は倒れ、気が付けば実の娘を王室からの差し金と思い、人形を自分の娘だと思い始めたんだよ。その日から、笑顔の絶えないシャルロットは消え、今のタバサになっていると言っ訳だ。」

「ええ、可哀想に。」

「学院じゃあ、最初はキュルケだけが彼女の親友だったんだな。それからルイズや才人、その他のメンバーともある程度は仲良くなれたと感じているよ。正直、感謝しているよ。ありがとう。」

ローレットはキュルケに頭を下げお礼を言った。

「や、やめてよ。私達はもう親友でしょ。親友を助けるのが真の親友ってものなの。」

そこに、ヒュドラーが現れて

「キュ、ル、ケ。ロー兄を口説くんじゃあないわよ。」

ヒュドラーは半分、変身を解きかける。

「ま、待てヒュドラー。違つんだよ。」

「そ、そうよ。」

ローレットは指を鳴らす。すると、ヒュドラーは変身を元に戻して落ち着く。そして、ローレットは訳を話した。

「そ、そうだったの。ごめんなさい。」

ヒュドラーは基本的には物分りのいい使い魔であり、それがローレットも信頼している理由の一つだった。

そこに、タバサが来て

「誰か来た。」

そう呟き、茂みの中に隠れた。

「それで、モンモン。どうやってら惚れ薬の効果を解毒できるんだよ?」

「水の精霊の体の一部を調合するのよ。それと、モンモンはやめて。」

聞き覚えのある声だな、とローレットは感じる。

「全く、君は貴族に対しての礼儀ってものはないのか?」

「また、コテンパンにされたいのか？」

(やっぱり。)

ローレットはキュルケとタバサに近づいてくる者の正体を明かした。そして、予想通りに近づいてきた者は

「才人、ルイズ、ギーシュ、モンモランシー。」

「わあ！！、ビックリした。」

突然ローレット達が現れたものだから、才人等は驚く。

「で、ギーシュは何をやってるの？」

ギーシュは後ろを向いて、半分うつ伏せになって何やら言っている。

「もー、だらしないわね。」

モンモランシーに脇腹を小突かれる。

「それと、そちらの奇妙なカップルさんは何？」

ローレットは才人と才人にくっつくルイズを見る。キュルケは半分嫉妬している。

「冗談に言っな。」

才人は怒った顔で言った。

「惚れ薬を間違えてルイズが飲んだんです。」

モンモランシーが事情を知らないローレット達に説明する。

「でも、惚れ薬って禁止されていた覚えがあるけど。」

モンモランシーは焦りながら

「き、気のせいじゃない?」

(怪しい。ま、別に私はどうでもいいけど。)

「それよりも。何しに来たの?」

「水の精霊の体の一部を貰いに来たのよ。」

そう言つて、モンモランシーはラグドリア湖に近づき、何やら呪文らしきものを唱える。すると、湖から水の精霊が出てきた。

「所で、ルイズ。」

「なあに?」

ローレットはルイズに催眠の魔法を掛けて眠らす。

「少し寝ててくれ。」

そして、水の精霊と話をする。水かさが増えた理由はアンドバリと言う指輪が盗まれ、それを探すために水かさを増やしていた事。そして、その指輪を盗んだのが、新国家レコン・キスタの指導者「クムウエル」という事。そして、その指輪を寿命が尽きる前に取り戻せると誓えば水かさを元に戻してくれると言う。

「我は、ルイ・コンラド。イントウウ・ザ・ローレット。我が名に懸けて、アンドバリの指輪を取り戻し、水の精霊への返上を誓う。」

全員が杖を掲げ、誓った。

「汝の誓い、確かに聞いたぞ。約束通りに水かさは元に戻そう。しかし、ここで誓った事は絶対に破ってはならないぞ。それと、これは我の体の一部だ。」

そう言っつて、水の精霊は再び湖に消えた。モンモランシーは水の精霊の体の一部を回収し、持って来たケースに入れる。ローレットはもう一度、ある事をお願いした。

「それじゃあ、私はまだ領地でやる事があるので。」

そう言っつて、ローレットはヒュドラーと共にシュトウーカに乗り、領地へと戻った。

・ローレットの部屋・

「ねえ、ロー兄。最後に何をお願いしたの？」

「ん、このハルケギニアの平和かな。その為にも、ガリアとアルビオンをどうにかしないと。」

「もうじき、私達はトリステインの為に戦うんでしょう？」

「ああ、アルビオンの残存艦隊が少しずつロサイスに終結して来ている。」

「どこでそんな情報を？」

「トリステインの領地に情報部を増設し、アルビオンに潜入させた情報機関「アロック」から連絡を受けたから。」

「何時の間に？」

「情報のある、ないで勝敗は決するものだよ。」

「そこまで情報って大事なの？」

「ああ。まだ情報戦の進んでいないハルケギニアでは分からないだろうが。」

「ふーん。ロー兄の世界って、どんな世界だったの？」

「外国との戦争はここ何十年もやっていないな。」

「じゃあ、平和なの？」

「外国との関係についてはそうだが、国内は平和とは言い難いな。殺人は絶えないし。」

「そんなに深刻なの？」

「アジアでは治安はいいと言われているが、実際はどのようなのだろうか。」

「大変だったんだね。」

「大変だったのは戦後だよ。」

「え？」

「もう寝るぞ。」

ローレットは明かりを消し、カーテンを開けて眠りについた。

ロサイス襲撃

翌日、ローレットは重巡洋艦と空母で編成した機動部隊をアルビオンに接近させる。

「しかし、ウェールズ皇太子、才人とその主人のルイズは乗艦を許可したが、まさか君達も乗ってくるとはな。」

「い、いいじゃないの。」

トリステインで才人とルイズを乗艦させたが、キュルケとタバサ、それとなんとコルベール先生まで付いてきた。

「ははは、ローレット君の持っている装備が見たかったんだよ。」

「先生はともかく、何でキュルケやタバサまで？まあ、大方キュルケが誘ったんだろうけど。」

「違うわ。タバサが乗りたいて言ったのよ。」

「え？」

ローレットはタバサを見る。すると、タバサは本を閉じて頷いた。

「興味あるから。」

（意外だな。）

タバサの予想外の言葉にローレットは驚く。そこに爺やが来て

「お坊ちやま、そろそろ目的の海域でございます。」

「分かった。」

「なあ、ローレット。お前ってまたシュトウカで出撃するのか？」

「いや、今日は。」

そう言ってローレットはスイッチを押す。すると、ローレットの後ろにあるエレベーターが上がってきた。

「じ、これって。」

昇ってきたのは真っ黒の塗装がなされた零戦だった。

「それと、君のも修理できているよ。」

ローレットは駐機されている零戦を指差して言った。

「でも、何であんたのって黒いの？」

ルイズが聞いてきたので

「私の愛機は黒い塗装がなされているんだよ。」

と、答える。

目的の海域に到達。アルビオンの艦隊が終結しているロサイスまで、およそ500kmの海域に機動部隊は展開した。

「艦隊は目的の海域に到達。航空隊は発艦準備。手の開いている者は見送りのため、飛行甲板に集合せよ。」

艦内マイクで指示が出され、手の開いている者は飛行甲板へと出てくる。ローレットは自分の列機を見渡しながら

「才人、今回の敵は殆どが停船状態だ。ロケット弾を敵艦の腹にぶち込んでやれ。」

「分かってるよ。」

ローレットの機体にヒュドラーが乗ろうとするが、キュルケが来て

「ごめんローレット。私が後ろに乗っていい?」

「え?でも、危ないよ。」

「危険くらい、この船に乗ったときから覚悟は出来ているわ。」

「どつするヒュドラー?」

「わ、私は別に構わないわよ。でもロー兄。」

ヒュドラーは迷ったが、決心したような顔になり

「絶対、生きて帰ってきてよ。」

「ああ、勿論だ。」

そう言つてローレットはキュルケに乗れと合図を出す。キュルケは喜んだように操縦席の後部、元々無線機が置かれていたスペースに入った。ローレットもそれを確認して機体に乗った。

「ねえ、この機体は狭くない？」

「体の胸を考えて言つてくれ。」

「ひどーい。私の自慢の胸を馬鹿にするの？」

「戦闘機に乗り心地の良さを考えたら性能が下がるんでな。」

「そついつもんなの？」

「ああ。」

ローレットはエンジンを掛けて、甲板待機に待機する。

「ねえ、才人。私も乗つていい？」

「ル、ルイズ。危ないからいいよ。」

「でも、私はあんたのご主人様なのよ。私が行きたいって言つたら、使い魔は従わなくちゃいけないの。」

「で、でもよ。」

ルイズは念の為に持って来た鞭を取り出す。

「連れてって。」

「はい。」

才人も鞭で叩かれたくないので承諾した。

「総員、帽振れ。」

艦内マイクで飛行甲板に居る者は全員、帽子を取って、振る。

「発艦旗、上げ。」

各空母のマストに反乱海軍で決められた発艦始めを意味する「x」が書かれた旗と、重要な勝負を意味する「Z」が書かれた旗が昇る。それを見たローレットはブレーキを解除し、発艦した。

「ロサイスは我がアルビオンの重要な軍港です。故に、ここを破壊すれば艦隊は身動きが取れなくなります。そして、貴方の情報機関の話では艦隊は出港の準備を開始しており、絶好の攻撃タイミングとなります。」

無線機からウェールズの声が編隊各機に聞こえる。ローレットは無線を編隊全機に合わせて

「聞いたとおりだ。全機、攻撃を必ず成功させるのだ。」

ローレットの言葉に編隊各機から了解の声が返ってくる。

- ロサイス軍港 -

「さっさとしろ！！トリステインに向かった艦隊が全滅した今、我々がアルビオン艦隊の主力なのだ。早く準備をして、トリステインに上陸作戦を開始するのだ。」

艦隊司令は遅れている出港準備を見て苛立っている。そこに、敵の接近を知らせる警報が鳴り響いた。

「な、何事だ！！。」

「は、トリステインの奇襲です。港の出口近くにいた艦艇は炎上、此方にも向かってきます。」

副官の言葉を聞いて、司令は外に出る。すると、見たこともない竜が向かってきた。

「あれが司令官か。」

ローレットは機銃の発射レバーを絞り、機銃を放った。

「す、凄じじゃない。」

後ろで見ていたキュルケは驚きの声を上げる。

「ああ、航空隊は連日の猛訓練に耐えた精鋭部隊を率いて来たからな。」

軍港の至る所で火災が起こり、艦艇は炎上しながら降下する。

「目標、前方の戦艦。」

ローレットは目の前に見える戦艦「リード」に目標を定める。

「発射!!。」

主翼にそれぞれ4本、計8本のロケット弾を積んできている。その内の2本を戦艦「リード」目掛けて放った。

「命中、炎上を確認。」

ロケット弾は艦内部にて爆発。その爆発エネルギーはロケット弾の突入で作った穴と上の甲板を突き破って放出。炎上しながら沈んでいった。

「木造艦なんて、俺のいた世界じゃあ100年以上は昔だ。」

ハルケギニアの艦は木造艦であり、地球では時代遅れもいいところである。そして、地球の兵器から作られたロケット弾はそんな貧弱な装甲をやすやすと貫通し、内部にて爆発させるため、殆ど一撃で撃沈できる。

「素敵ねえ。私の微熱が情熱になっちゃっ。」

後ろでキュルケはローレットを見ながら言う。

「やめてくれ。頼むから。」

ローレットは機体を旋回させて、次の目標を巡洋艦「カイザー」に狙いをつけ

「発射!!。」

再びロケット弾を放ち、炎上させた。

「ねえ、あれって何かしら?」

「ん?」

キュルケは左から接近する黒い点2つを指差して言う。

「おいおい、あれって竜じゃない。戦闘機だ!!。」

「え?」

接近してきたのは地球の第一次大戦のイギリス複葉戦闘機「RAF

S・E・5」であった。

「馬鹿な。どうしてこの世界に。」

「ねえ、あれってローレット達の乗っている飛行機って奴でしょう。」

「ああ。」

見ると、アルビオンのマークが書かれている。

「しかし、一体どうして？アルビオンがあの機体を。」

原因は、ガリアからレコン・キスタに潜入していたシェフィールドだった。彼女はエルフとガリアとの国境線で見つけた兵器を秘密裏にアルビオンへと運び、実験を行っていた。その最中にロサイスに攻撃が加えられたため、こちらへ向ってきたのだ。

「とにかく、敵も旧式とは言え戦闘機だ。」

ローレットは機体を旋回させて2機の迎撃に向った。2機も、向ってくる零戦を見て迎撃体勢を取る。

「キュルケ、死んでも恨むなよ。」

性能では圧倒的だが、万が一って事もありうる。零戦は基本1対1の格闘戦を想定されて設計されている。故に1対2では不利なのだ。

「死んでもって、貴方なら撃墜できるんでしょう？」

「まあな。」

だが、歴戦のエースに旧式が何機来ようと撃墜など容易い。おまけに向こうはまだ操縦に慣れていないようだ。その証拠に、機体はフラフラと振れていて危なっかしい。

「そんな腕で私を落とせる思っなよ！！。」

ローレットは機銃で先頭を飛ばし1機を撃墜する。さすがに、機銃の

射程でも第一次大戦と第二次大戦では違いすぎた。

「ローレット、何で向こうにも戦闘機が居るんだ？」

見ると、才人も此方に向ってくる。他の機体は攻撃が終了して帰還の任に就いていた。

「知らないよ。ただ、敵のパイロットは腕が悪すぎる。どうやら、私の領地みたいに生産は行っていないんだろう。」

ローレットは敵の戦闘機の後ろに付き

「旧式でも、腕が良ければ新型にも勝てるのに。」

ローレットは機銃を操縦席に向って発射した。パイロットは零戦の20mmで血だらけになり、機体は空中爆発を起こす。

「こ、殺しちゃったの？」

キュルケは座席越しにローレットに聞いてくる。

「ああ、敵に対するせめてもの引導だ。」

ローレットは風防を開け、持って来た1枚の花を投下する。

「才人、絶対に今私がやった殺しに慣れるな。これに慣れると、人は人ではなくなってしまう。私は、もう慣れてしまったのだ。いいか？絶対に慣れるなよ。」

ローレットは無線機で才人に伝える。才人からはただ、分かったと

返事があるだけだった。

ローレットも、もう何も言わずに空母への帰還の任に就いた。

アルビオン上陸

帰還したローレットは機体を整備員に任せ、次にトリスティンと決めていた上陸作戦の準備に入った。

「こちら、ローレット。姫様、聞こえていますか？」

王室に居るアンリエッタに連絡を入れる。

「ええ。」

「ロサイスの艦隊は全滅させました。後は、此方は援護を行うだけです。」

「ええ、ありがとうございます。此方も部隊を編成し終わりました。それと、貴方にお願ひがあるの。」

「はい、なんなりと。」

「アルビオンは艦隊が無くても、優秀なメイジが多く、恐らくは城下まで辿り着けないと思うの。」

「はあ、確かにそれは言えますが。」

「そこで、上陸はあくまでも囮。本命は貴方達のハヴィランド宮殿に居るクロムウェルを含む敵の指導者達の拘束にあります。」

「な、いきなり敵将を!？」

ローレットは驚く。確かに、敵将を捕まえれば戦争は早期に終わる。しかし、余りにも無謀な計画と言えた。

「ひ、姫様は本気でやれと仰いますか？」

「勿論です。」

「はあ、遣れと言われればやりますが、成功の確率は相当低いですよ。」

「覚悟は出来ています。」

「りよ、了解しました。」

ローレットは無線を切り、飛行甲板へと向う。

「我々は、まずはアルビオンへの上陸を支援しなければならない。そして、その後は敵の本拠地へと乗り込み、敵の指導者等を拘束する。」

「ま、マジかよ。」

「ああ、姫様は早急に戦争を終わらせようとしている。その為に、アルビオンに上陸し、此方は敵将を拘束するように言ってきている。」

ローレットは才人に姫様との会話を伝える。

「まあ、私的には早くこの戦争を終わらせたいんで丁度いいが、問題はやっぱり敵将の拘束をどうやるかだな。」

「艦上輸送機は無いのか？」

「あるにはあるが、まだ1機しか出来ていない。いわゆる試作って奴だ。」

「でも、あるならやってみようぜ。」

「……分かった。爺や、陸軍総司令部に連絡して部隊を。それと、海軍航空隊司令部に連絡して試作の艦上輸送機を持ってこさせろ。」

「はい、かしこまりました。」

爺やは走って通信室に向う。

「なあ、輸送機ってどんなやつだ？」

「C-2だよ。」

「え？」

「だから、C-2。」

「第二次大戦の兵器って前言わなかったか？」

「だから、試作機と言っただろっ。」

「なるほど。大丈夫なのか？」

「一応、各空母には現代の機体でも運用できるようにはしたけど、まだ試していない。」

翌日、飛行甲板にローレットの愛機シュトゥーカがあり、才人の機体も発艦準備を終えていた。

「ロ、ローレット君。この機体は一体どうやって飛んでいるのかね？」

今日はコルベール先生が同行を希望してきた為、またヒュドラーは空母にて留守番になってしまった。

「そういえば、先生には話して無かったですね。前に付いているプロペラで、空気を掻き、それによって前に進んでいくんです。それと、先生。」

「ん？何かね？」

「先生つて、蒸気機関は開発できます？」

「蒸気機関？何かね？」

「水蒸気によってタービンを回し、発電を行うものですよ。それが完成すれば、飛行船とは比べ物にならない距離を移動できますよ。」

「ほ、本当かね。それはぜひ作ってみたい。」

「じゃあ、今度設計図を渡します。それが開発できたら、地球で言うところの産業革命なんかにも繋がります。」

「さ、産業革命かね。」

「はい。その蒸気機関の開発で、今まで手作業だったのが蒸気機関のお陰で自動化されたんです。」

「そ、それは凄い。では、今までの魔法による産業も大きく変わるではないか。」

「ですから、ぜひ開発をして貰いたいです。これがあれば、より平民・貴族の身分の差が縮まります。」

「よし分かった。やってみよう。」

「ありがとうございます。」

発艦時間になり、旗が上る。それを見たローレットは発艦する。

「トリスティンの輸送艦隊も出撃した。我々は上陸地点の敵を一掃するのだ。」

才人の零戦が隣に来て

「なあ、ローレット。前回みたいに敵の飛行機が出てきたら如何するんだ？」

「その場合は撃墜する。ただ、もう来ないとは思うが。」

しかし、敵機は来なかったが、上陸地点に居たのは。

「おいおい、何で敵はマークI戦車を持っているんだ？」

第一次大戦のイギリス戦車であり、世界初の戦車がそこには6台も居た。

「才人、戦車は任せろ。地上の掃射を頼めるか？」

「ああ、任せろ。」

僚機は今日は才人しか連れてきていない。その為、地上の機銃掃射は才人に任せて、ローレットは戦車攻撃に集中した。

「先生、？まっってください！！。急降下！！。」

シュトゥーカは殆ど垂直に近い状態で急降下を始める。

「投下！」

200kgの爆弾は機体から切り離され、1台目の戦車を撃破する。

「喰らえ！」

才人も地上に居る兵士達に頭上から機銃掃射を始め、地面を血の海に変える。

「投下!。」

再び爆弾を投下し、今度は3台の戦車密集地に落ちた為、3台とも破壊される。

「残りは機銃で片付ける。」

機体を一時水平に戻し、再び降下を始める。

「いつけ!!。」

機体は振動に襲われる。さすがに、37mmなんて大口径機関砲なんか放つて振動しないわけが無い。

「ロ、ローレット君。少し揺れすぎじゃあないか?」

「実機よりは揺れてません。」

「そ、そうなのか?か、かなり酷いが。」

「これでもマシです。」

「君達の世界は本当に科学が進んでいるんだね。」

「これでも旧式機です。」

コルベールは驚く。自分等の世界で十分新型と呼ばれている物を易々と撃破し続けているのに、これでも旧式と言われたのだから当然

だ。

「しかし、あれは一体何なのかね？見たこともない物だったが。」

「あれは戦車と言う物です。私達の世界ではかなり古い物ですが。」

「それを、何故敵が？」

「分かりませんが、恐らくは敵側にもこれらが何なのか気づいているでしょう。でなければ、こんな所に持ってきませんよ。」

才人の零戦も隣に付き

「ローレット、敵は一体どうして俺達の世界の兵器を？」

「分からない。しかし、敵も我々の兵器の正体を掴んでいるのだろう。これは、早く敵将をとっ捕まえて聞きださないと。」

上陸地点の掃討が完了した5分後、トリステインの上陸部隊が到着。部隊は展開を始めた。

「明日は、いよいよ敵将を捕らえる。早く、この戦争を終わらせたいよ。」

「ああ、だな。」

ローレットと才人は帰還し、空母に着艦している輸送機を見た。

「部隊の選考は終えているか？」

「はい、お坊ちゃま。しかし、一人足りないのは残念です。」

「一人？」

「はい。全部で39名を運べるのですが、38人しかいません。」

「最後の一人は私が行く。」

「お、お坊ちゃま。それは危険です。確かに、ヒュドラー様も行くと言いましたが。」

「使い魔が行くんなら私も行くよ。ヒュドラーばかり危険な目に合わしたくないからな。」

「どうしてもと？」

「当然だ。心配しなくてもいいよ爺や。私は必ず生きて帰ってくる。」

「はい、お坊ちゃま。」

ローレットは才人に向き直り

「才人、明日の航空部隊指揮権を全て才人に委任する。航空部隊指揮は任せたぞ。」

「あ、ああ。任せてくれ。」

その後、ローレットは明日に備えて早めに床に着いた。

早すぎる終戦

朝、才人はローレットから航空部隊指揮を委任され、早速出撃の準備を始めた。

「ローレットの方はいつやるんだ？」

「朝は目立つからな。夜間に隠密部隊と共に落下傘降下を行い、敵の指導者等を全員拘束する。」

「そうか。そっちの護衛はいいのか？」

「奇妙な襲撃はあったが、基本的に敵側の練度は未熟だった。心配しなくてもいい。」

それを聞いて、才人は零戦の整備を手伝った。ガンダールブの力のお陰でどこが悪いのかはすぐに分かる。その為、それが整備の効率化に繋がった。

整備は終わり、飛行甲板に出撃が並べられる。

「才人、私も連れて行って。」

「ああ、分かったよ。鞭も喰らいたくないしな。」

ルイズは出撃準備を終え、暖気運転をしている才人の零戦の主翼に昇って言った。才人も、特に危険は無いと判断して座席の後ろの、元々無線機の置かれていたスペースにルイズを乗せた。

「いいか？」

「ええ。」

暖機運転を終え、出撃許可を示す旗が昇る。

「行くぞ!!。」

才人はブレーキを解除し、スロットルを全開にして離陸した。

- トリステイン軍上陸地点 -

「くっそ!!、上陸したわいいが、敵側の攻撃は少しも止まん。」

「このままじゃあ全滅しちゃう。」

上陸したトリステイン軍は休み無く飛んでくる砲弾を浴びて、兵力は減少していく。

「女王陛下からの撤退命令はまだなのか？」

「今だ、国内にて戦意高揚の為の放送をし続けており、撤退命令は出ません。」

「姫は何を考えておられる!？」

そこへ、聞いたことも無い音が響き、見ると砲撃を行っていた所か

ら火の手が上がった。

「あ、あれは!?!」

「王室で言っておられたフェニックスだ!?!。」

「フェニックスが来てくれたぞ!?!。」

「これで、暫くは砲撃が無いだろう。」

空母を出撃した才人等は砲撃を行っている砲撃陣地に機銃掃射をし、残っていた砲弾に引火して大爆発が起こっていた。

「これで、暫くは犠牲が出ないだろう。」

だが、またしても黒い点が見え始める。

「くっそ、連中は一体何機持っているんだ!?!」

現れたは第一次大戦の独逸戦闘機「アルバトロス D・?」と独逸爆撃機「ゴータ G・?」がそれぞれ4機ずつだった。これらも、先の上陸戦で見た戦車も全てシエフィールドが持って来た物であり、シエフィールドはこれらの兵器の能力を知りたいが為に出撃を繰り返していた。

だが、やはり地球ではかなりの骨董品。第二次大戦の緒戦において世界最高水準の零戦相手に敵うわけがない。

「喰らえ。」

あっさり後方に才人は付き、機銃を発射して戦闘機1機を撃墜する。しかし、速度差があり過ぎて、一機撃墜すると次の機体に狙いを付ける前に追い越してしまう。

「くそ。」

才人は一機を撃墜すると、案の定追い越してしまった。

「任せろ。」

別の機体が才人の狙っていた爆撃機を撃墜する。

「だ、誰だ？」

「おいおい、僚機の名ぐらい知っておいてくれよ才人君。私はマリス、平民だよ。と、言ってもローレット様に拾われた者だが。」

「ローレットに？」

「はい。私は元々は見覚えの無い罪に問われ、追われる身でした。しかし、彼の領地に入って、彼に救われました。平民だろうと、彼は出来る限り豪華な食事と部屋を与えてくれました。だから、彼の創設した反乱軍に参加しています。」

「そうか。ローレットもいい奴なんだな。」

「はい。私のような、大勢の者を彼は助けております。」

襲撃機は全て撃墜に成功。才人等は空母へと順次着艦を開始した。

「それで、また飛行機が出てきたんだな？」

「ああ、砲台を破壊したら戦闘機と爆撃機が4機ずつ向ってきた。いずれも、第一次のだ。」

「本当に奇妙だな。何故、レコン・キスタは地球の兵器を保有しているんだ。国籍マークは間違いなくこの世界の物ではなく地球のマークだったし。あれが、地球からの兵器だと言う事はすぐに分かるでも、本当にどうして？」

「もしかして、何処かで手に入れたんじゃないか？ほら、敵はそんなに多くの兵器を持っていなかったんだし、練度は相当未熟だった。それに、破壊の杖等、地球の兵器は確認されているんだし。」

「その線が妥当だろう。これは、調査が必要だな。」

「それよりもまずは。」

「ああ、クロムウエルを含むレコン・キスタの指導者の拘束と、戦争の終結。それが、今夜実現する。」

夜間、飛行甲板のカタパルトにC-2が装着される。

「いよいよだな。」

「ああ。気を付けてな。」

「分かっているよ。」

ローレットはヒュドラーと共に輸送機へと乗った。輸送機は落下傘部隊として陸軍隠密特殊作戦部隊とその指揮を取るローレット、補佐としてヒュドラーが乗っている。

「総員、武器と落下傘のチェック。」

ローレットに言われて各装備を点検する。武器は、隠密部隊用に独自開発したトンプソンの消音機付き突撃銃がヒュドラーを除く全員が装備する。

発艦し、40分ほど飛行して目標上空へと到達した。

「現在、目標上空へと到達。風、風速等異常なし。降下用意。」

輸送機の後部が開き、ローレットは

「行くぞ、私に続け。」

一番に降下した。続いてヒュドラー、隠密部隊と続く。

・ハヴィランド宮殿・

「交代の時間だ。」

今現在、見張りの交代が行われている最中である。

「しかし、国王陛下は戦時だと言つのに寝る時間が早いよな。」

「ああ、それにトリスティン軍が上陸したと言つじゃないか。そんなに良いのかよ。」

交代した見張りは口々に文句を言う。

「おい、何か降りなかったか？」

「鳥かなんかじゃないか？」

「気のせいかな？」

そう見張りの兵士が首を傾げた瞬間、降下したローレットは消音機付きの突撃銃で2人を射殺した。

「ふう。」

「ロー兄、他の者も無事に降下できたみたいだよ。」

「分かった。それぞれの目標を拘束してくれ。」

ローレットとヒュドラーは敵が何故地球の兵器を持っているのか知りたい。その為、拘束には参加せず、調べる事にした。

「行くぞ。」

「ええ。」

ローレットとヒュドラーはカギ爪付きのロープを使って中庭に下りる。そして、中庭を走り始めたその時

カチッ!

「しまった。」

トラップの火の魔法板を踏んでしまった。全身が炎に包まれ、ローレットは地面に倒れる。

「がああ、熱い!熱い!。」

「ロ、ロー兄!。」

急いでヒュドラーは近くにある井戸から水を運び、ローレットにかける。

「はあ、はあ、ありがとうヒュドラー。」

ローレットは死にはしなかったが、全身に大火傷を負ってしまう。そこに、

「何者だ!!。」

見張りの兵が4人駆けつけて来た。

「よくも、よくもロー兄を!!。」

ヒュドラーは完全に変身を解き、見張りの兵等に襲い掛かった。

「がああああ!。」

見張りの兵の一人は首を絞められ、2人は牙で腹を噛まれて、もう一人はヒュドラーの頭の内の3つに全身を締め付けられ、全身から血を絞り出されて死亡する。

「よくも、よくも!!。」

ヒュドラーは変身を戻して少女の姿になってもまだ落ち着かなかった。そこに、

「もういいヒュドラー。落ち着け。」

ローレットが大火傷を負っているも立ち上がる。

「ロー兄。」

ヒュドラーは落ち着き、ローレットに肩を貸してやる。そして、その先にある資料室へと向った。

一方、クロムウエルは

「なんだか外が騒がしいな。」

外が騒がしいのに気づいて起きた。そこに、扉が開き

「誰が余の眠りを妨げる?。」

クロムウエルは聞くが、入って来た者は

「動くな!。」

隠密特殊作戦部隊の人間だった。クロムウエルは杖を取ろうと手を伸ばすが、隠密部隊の人間に手を撃たれて負傷する。

「お、お前達は何者だ?なぜ、ここに居る!?」

「静かにしろ。」

そう言って、手を縛り、頭に布を被せて拘束する。他の指導者も、このようにして拘束された。ただ一人、シエフィールドを除いて

「ふう、まさかトリステインがここまで早く来るとはねえ。」

シルフィードはローレット達の宮殿侵入をいち早く察知し、ガリアへと向っていた。

「ジョゼフ様にもいい手土産が入ったわ。」

シエフィールドの主人、ガリア王ジョゼフ1世に伝える話が手に入った事を喜んでいる。レコン・キスタは彼女にとって退屈なものであり、主に報告するようなものなど何も無かった。しかし、シエフィールドは持ち込んだ全ての兵器の実験データを取り、トリステイン軍の軍事力の見直しという事実を持ち帰る事に成功した。

一方、ローレットとヒュドラーは

「まさか、シエフィールドが居たなんて。」

レコン・キスタが持ち込んだ同志達の名を書かれた資料をローレットは見つけ、それを読んでいる最中、予想外の人間がレコン・キスタ内に居た事に驚く。

「シエフィールドって？」

「ジョゼフの虚無の使い魔だ。恐らく、彼女がああ兵器を持ち込んだのだらう。」

「ああ兵器って？」

「私と才人の世界の兵器だ。彼女が居たんならああ兵器があったことにも納得がいく。」

「どうして？」

「地球の兵器はよくエルフとの国境線で発見されるんだよ。そして、ガリアは秘密裏にエルフ達と接触している。地球の兵器があっても不思議ではない。」

すると、無線から全員拘束完了の連絡が入った。

「それじゃあ、戻るぞ。」

「うん。それよりロー兄、傷は？」

「大丈夫だ。2、3日で治るよ。」

「そう。よかった。」

（しかし、あの炎は。）

ローレットは全身を焼かれた時に奇妙な感覚が体を襲った。火傷とは違う何かが。

翌日、アルビオンは王室全員が拘束されたため、各方面では降伏が行われ、午後にはアンリエッタがアルビオン国内に入国。宮殿にてアルビオンの降伏文書調印式が行われた。それと同時にウエールズ皇太子がアルビオンの宮殿に行き、アルビオン国民に王政復古大号令を行って、共和制は消滅した。それと平行して、ローレットが両国に資料を渡し、それによってレコン・キスタに加担、もしくは同士だった者は全員が身分と土地を剥奪されて牢屋へと入れられる。両国は同盟を結び、平民・貴族に身分関係無しで武勲を挙げた者に勲章等の授与を行った。

ローレットとユリアンナーの初めての出会い

・魔法学院 ローレットの部屋・

「いててて。」

「しっかりしてよね。魔法じゃあまり効果が無いから私が調合した薬を塗ってあげているんじゃない。」

「あ、ああ。ありがとう。」

ローレットは全身に大火傷を負った為、暫くは自室にて療養するようにとオスマン氏が言ってくれた。そして、モンモランシーが調合した薬を塗ってもらっていた。

「しかし、貴方って何者なの？ 治癒魔法が効かないし、火傷の治りも異常に早いし。」

「昔からなぜかそうなんだよ。それにしても、香水を作っているだけあって薬の調合も上手いんだね。」

「当然よ。」

「あははは。」

「それよりも、ありがとう。」

「え？」

「トリステインの為に戦ってくれた事。国籍が違うのにトリステインの為に尽くしてくれて。」

「ああ。此方も早く終わらせたかったからな。」

「じゃあ、後2、3日程度は安静にしててよ。本当はもっと掛かるんだけど貴方って傷の治りが早いから。」

「ああ、わざわざすまないな。」

モンモランシーはローレットの部屋を出て、教室へと向った。

「ねえ、ロー兄。」

「何？」

「ロー兄って、本当は帰りたいんでしょ？」

「な!？」

「だって、才人達の前ではああ言ったけど、私の前では元の世界に帰りたいって言ったじゃない。」

「……迷ってる。」

「迷ってる?」

「私は、今の日本の体制には納得できない。しかし、向こうに残してきた家族が今でも心配なんだ。」

「家族つて、一体何人居たの？」

「妻、それに結婚した息子と生まれた孫の2人の6人家族。」

「ふーん。」

「できれば、もう一度だけは家族に会いたいよ。」

「その、佐々木武雄は？」

「あいつは私の部下だった。あいつとは緒戦から列機として戦い、行方不明になるその日までずっと共に戦った仲だ。」

「その、戦争つて一体何のために戦ったの？」

「日本が生き残るため。その少し前に、世界の列強国は次々とアジアに進出し、植民地にしていった。唯一独立を保っていたアジアの国はタイと日本、ネパール等の数少ない地域だけだった。」

「そんな。他国が、侵略しちゃったの？」

「ああ。その中で日本に少しずつ帝国主義の魔の手が忍び寄って来たんだ。そして、事実上最初の激突が日露戦争だ。世界一の面積を誇っている大国ロシアに東洋の小国日本が立ち向かった。」

「負けたの？」

「いや、ロシアの艦隊は決戦前に壊滅。頼みの綱は西洋から来るロシア主力艦部隊だけとなった。そして、その主力艦部隊は対馬沖に

て日本艦隊が殴りこみをし、様々な幸運と偶然、そして世界一ともいえる高い練度で壊滅させて終結した。」

「小国が？」

「ああ。イギリスと言う当時の世界一の海軍力を持っている国が援助してくれていた。そのお陰もあって勝利したと言える。」

「ふーん。」

「そして、時が流れて第一次世界大戦が起こり、終戦を迎えて暫くたつと今度は世界恐慌。それによって日本の経済は混乱したんだよ。そして、それを回復させる為の自衛の戦争へと突入していったんだよ。」

「それで？」

「結果は悲惨な敗戦。日本の都市は焼け野原になり、終戦の少し前に投下された2発の新型爆弾によって広島、長崎は壊滅した。もはや、あの戦争は戦争ではなく一種の虐殺と言えた。資料にもよるけど軍人は170万人以上が戦死。民間人も39万人以上が戦死している。」

「そ、そんなに悲惨な戦争だったの。そんなに、民間人も亡くなったの？」

「ああ、途中から敵は軍事施設ではなく民間都市への爆撃に方針を変更したんだよ。」

「それって、許されるの？」

「勿論許される事じゃない。しかし、勝てばなんでも許されるのが地球の戦争だよ。」

暫く沈黙が部屋を支配した。ヒュドラーは話題を変えようと

「ねえロー兄。私達の出会って覚えてる？」

「忘れないよ。」

・ローレットの回想・

「お父様、お母様。」

目の前でローレットの父と母は殺される。殺したのは今のガリア王ジョゼフ一世が送ってきた刺客であった。本当はローレットが死ぬはずだが、父と母が庇い、殺されたのだ。

そして、

「お前には北花壇騎士団に入団してもらおう。」

「北、花壇騎士団？」

「本来、花壇騎士団は西、東、南しか存在しない。しかし、北は公にされていないが存在している。北は影であり、花壇の花は育たない。いわば、北花壇騎士団は影の存在なのだ。そして、王家の汚れた仕事を貴様にして貰う。」

ガリア王ジョゼフ1世は無理やりローレットを北花壇騎士団に入団させた。そして、来る日も来る日も汚れた仕事だった。暗殺、影からの要人護衛。反乱を企てている者が居る村を焼き払う。その他、数多くの汚れ仕事をローレットは行ってきた。そして、ある任務の最中に

「君、一人なの？」

道端で泣いている少女を見つけた。これが、後に使い魔になるヒュドラーである。

「お、お母さんが。な、亡くなっちゃたの。」

「お母さんが？」

「うん。」

ローレットは少女に引っ張られて洞窟へと入った。そして、そこに居たのが

「え？蛇？しかも、頭が9つ。」

「うん。」

「こ、これが君のお母さん？」

「うん。」

「じゃあ、君も？」

「うん。」

目の前の少女は突然、首が9つに別れ、蛇の正体を現した。

「な!？」

ローレットは昭和時代、海軍兵学校を卒業したときに陛下から貰った軍刀を終戦の混乱に乗じて隠して持っており、それを偶然此方の世界で見つけ、以後それを携帯していた。そして、それを抜き

「離れる。」

そう言ったが、ローレットもこの母さんは心配だった。仕方なく、洞窟内に魔法で穴を作り、そこに母さんを埋めてやった。そして、そこに墓石を作ってやる。少女に笑みを作り、再び頂上目指して走った。目的は、この山に住む雷竜を退治する事だった。

「はあ、はあ。」

ローレットは必死に山を駆け上り、目的の頂上へと到着した。

「こ、ここに雷竜が。」

辺りを見回しても雷竜らしき生き物は見つけれない。そこに、ローレットに雷が直撃した。

「グ!。」

雷に打たれ、その場に崩れる。見ると、空に雷竜が旋回していた。

「ら、雷竜。」

痺れる体を堪えて、何とか立ち上がって杖を構える。しかし、再びローレットに雷が直撃した。

「ああああー！」

地面に崩る。

（まずいな。）

右手は激しく痙攣を起こしており、自由に動かせなかった。左手で刀を握る。

「呪文を唱える暇が無いなら。」

刀を持って思いっきりジャンプをする。しかし、あと少しというところで勢いは足らず落下。そこに再び雷が直撃する。

「3度・・・目か。」

意識は遠のき始め、目の前がぼやけている。しかし、

「ねえ、確りして。」

聞き覚えのある声に意識は目覚める。見ると、先程の少女がローレットの体を揺すっていた。

「え？何でここに？」

「さっきのお礼。」

少女はそう言うと、ローレットを立たせる。

「私が投げてあげようか？」

「で、でも。かなり高いよ。」

「心配しないで、これでも人間よりは数倍力はあるから。」

少女はローレットを掴み、思いつき雷竜に向かって投げた。

「え！？ちよつ、」

いきなり投げられたのでローレットは驚くが、目の前に雷竜を捉えたので、刀を握る。

「いつけー！」

ズバツ！。雷竜の胴体を思いっきり切り、絶命させた。

「ふう。……忘れてたー。」

跳んだ後に落下する事を忘れており、急いで着地の姿勢をとって着地する。

「あ、危ねー。」

もう少しで体のどこかに大怪我をしている程ぎりぎり着地した。

「大丈夫だった？」

「あ、ああ。ありがとう。」

「どういたしまして。」

少女はローレットに笑顔を見せる。そして、ローレットの唇にキスをした。

「ええ！？ええ！？えええー！！。」

突然キスをされたのでローレットは驚いた。

「使い魔としての契約。貴方って、メイジでしょう？」

「い、一応そうだけど。まだ、早いよ。」

「まあいいじゃない。早ければそれだけ絆が出来るんだし。」

少女の手に使い魔としての契約ルーンが刻まれた。

「私はヒュドラー。貴方は？」

「ロ、ローレットだ。」

「宜しくねローレット。いや、ロー兄でいいか。」

「ロ、ロー兄？。」

「うん。宜しくねロー兄。」

「できれば、その呼び名はやめてくれない?」

「良いじゃないの。これからはロー兄の命令に絶対従うよ。」

ローレットは頭を掻き

「ま、いいか。宜しく。」

「こんな感じだったな。」

「うん。」

ヒュドラーは少女らしい笑顔を作ってローレットに飛びついて来た。

「わ、馬鹿。やめろ。」

ローレットは痛む体を我慢してヒュドラーを引き剥がそうとするが、さすがに人間の数倍は力があるだけに引き剥がせない。

「これからも宜しくね、ロー兄。」

ヒュドラーは更に力を込めてローレットの体に抱きついた。

「ちよ、まっ、やめて。痛い!、痛い!。」

ヒュドラーはやっとの事で離れた。

「はー、死ぬかと思った。」

全身に痛みが襲い、それによってショック死するんじゃないかとローレットが錯覚するほどヒュドラーは強く抱きついていた。

「ロー兄、早く元気になってね。」

「今でもっと悪くなったかも。」

「そんなヤワな鍛え方じゃあないんでしょ？」

「ま、まあな。」

「今日は、早く寝れば？」

「そ、そうするよ。」

ローレットはヒュドラーの態度が怪しいと感じたが、沢山話したので疲れている。ヒュドラーの言うとおり昼間だが寝る事にした。

アンドバリの指輪 返還

夜中、ローレットは目を覚ました。

「やっぱり。」

ヒュドラーはローレットにくっ付いて寝ていた。

「もうやめてと言ったのに。」

ローレットは少し起き上がった。痛みは既に消えており、完全に回復していた。

（なんで、こんなに早く治るんだ？）

ローレットは上半身の服を少し脱いでみる。すると、

「これって。」

赤い竜のマークが体にあった。先程、モンモランシーに薬を塗ってもらったときには無かったはずなのに。

（不思議だ。）

とりあえず、起き上がって部屋を出た。向った先は中庭だった。

「ふう。」

中庭にはローレットのシュトゥーカと才人の零戦が簡易ハンガー内に置かれていた。その隣にはコルベールの研究のための建物がある。

「これが、コルベール先生の作ったガソリンか。」

機体の隣にはコルベールが精製したガソリンが置かれている。それを20分ほど飛べるだけの燃料をシュトゥーカに入れる。そして、ゆっくりと門の所まで運んだ。

「計器異常なし、操縦桿も異常なし。燃料チェック良し。」

ローレットはエンジンを掛ける。暫く暖気運転をしていると。

「何処行くの？」

「うわ!?!」

見ると、タバサがそこに居た。

「タ、タバサ!?!何でここに?」

「水の精霊にアンドバリの指輪を返しに行こうと思った。」

「預かっていたのか?」

タバサは頷く。

「よかつたら、乗せてって。」

「い、いいけど。ちょっと待ってて。」

ローレットはエンジンを止め、燃料を追加する。ラグドリア湖までは行けるが、帰ってこれるだけの燃料は入れていなかったからだ。

「乗ってくれ。」

ローレットは後部座席の風防を開け、タバサを乗せた。そして、ローレットも操縦席に乗り、エンジンを掛けた。

「行くぞ。」

先程、暖機運転をある程度やっておいた為、すぐに離陸させた。

15分ほど、全速力で飛行し、目的のラグドリア湖に到着した。

「ありがとう。」

タバサは風防を開け、降りる。ローレットも機体から降り、操縦席に入れていた車輪止めで車輪を固定し、タバサの後に付いて行った。

「待ってて。」

タバサは杖を振り、水の精霊を呼んだ。暫くすると、水の精霊は姿を現す。

「汝、指輪は持って来たのか？」

タバサは指輪を水の精霊に見せる。

「確かにアンドバリの指輪である。」

水の精霊はそう言ってタバサから指輪を受け取る。

「誓いを守ったんだな。」

タバサは無言で頷いた。

「感謝する。これで、約束どおり水を増やすのは今後一切やめよう。」

水の精霊は再びラグドリア湖に姿を消した。

「戻ろうか？」

ローレットは言い、タバサは頷く。車輪止めを外し、二人は乗機。ローレットはエンジンを掛けて離陸をさせる。

「なあ、タバサ。」

「何？」

「学院はどうだ？ルイズやキュルケ、才人達と一緒にに入れて楽しいか？」

タバサは頷く。

「そうか。それと、妹は？」

「分からない。」

「・・・そうか。」

ローレットは学院に続く道に着陸する。

「後は私がやるんで良いから、タバサは早く寝てくれていいよ。」

タバサは頷くと、自分の部屋へと戻った。

「さてと。」

ローレットは機体を押し、何とかハンガー内に入れる。

「今日から授業復帰か。ま、楽しめればなんだったって良いがな。」

ローレットは部屋に戻ると、そこにヒュドラーが起きていて

「ロー兄、さっき爺やから連絡があったよ。」

「なに？」

ローレットはヒュドラーが渡した電文を見た。内容は

『遠洋調査中の三笠より、新たな島を発見。そこに見たこともない

艦があり、その艦は曳航してマルタ島のドック内に入渠させました。明日の虚無の曜日に「確認を。」

ローレットは三笠に遠洋調査を長い期間させており、発見された島はそれぞれマルタ島、ミコノス島、サントリーニ島と名づけている。いずれも、大きさは場所こそ違うが、形が全く同じだからそう名づけた。そして、マルタ島にはその大きさと独特の海岸からドックの建設を早期に行われ、遠洋島の中で唯一のドック保有島である。

「今回は新たな島だ。そして、そこに見たことも無い艦が、恐らくは地球のだろう。とにかく、次の虚無の曜日に確認しに行くぞ。」

「うん。」

「それじゃあ、寝よう。」

「その前にロー兄、何処行ってたの？」

「ラグドリア湖にアンドバリの指輪を返しに行ってた。」

「一人で？」

「タバサと。」

「ふーん。」

ローレットは布団に入り、

「お前こそ、もうやるなよと言っておいたのに入ってるんだもん。」

「ロー兄が魔されていたから一緒に寝てあげたの。」

ヒュドラーは頬を膨らまして訴える。

「分かった、ありがとう。」

ローレットはそのまま布団を被って寝る。ヒュドラーもローレットの布団に入り

「ねえ、ロー兄。」

「何？」

「私が一緒に居ると嫌だ？」

「いや、使い魔としては信頼しているし、普段の生活でも頼りにしている。なにより、あの時私を助けてくれたから感謝もしている。」

「そう。」

「どうしたんだ急に？」

「ううん、なんでも無い。」

ヒュドラーの方から寝息が聞こえる。

「私も寝るか。」

ローレットも眠った。

二つ名の艦

翌日、ローレットは授業に復帰して

「ローレット、もう大丈夫なの？」

ルイズは驚いた顔で聞いてくる。

「ああ、思ったよりも早く回復したから学院長の許可とって復帰した。」

「そ、そうなの。」

- 教室 -

「皆さん、今日は面白い物を見せます。」

そう言つてコルベールが取り出したのは、ローレットから貰った設計図を元に試作した簡易蒸気機関であった。

「これをこうして、ああして、これで良しと。」

コルベールは魔法で火を付け、水が沸騰し始めたらタービンを付ける。暫くすると、そのタービンが回転しだし、タービンに繋がった発電機で電気が起こり、それによって簡易蒸気機関に繋がれていた小さな機織り機が回り、機が織られる。

「どうです？魔法なんかなくても、機が織れるでしょう？」

ハルケギニアでは機織りさえメイジの力が無ければ出来ない。
ローレットの領地はこの蒸気機関開発に全力を注いでいたが、結局は遅延して開発を諦めていた。しかし、コルベールはローレットが設計図を渡して僅か1週間程度で開発を終えてしまったのだ。

「す、すごいです先生！！。まさか、こんなにも短期間で完成させるなんて。」

ローレットは改めてコルベールを尊敬する。

「私としても、こんなにも凄い物があるなんて驚いたよ。」

他の者は才人を除いてポカーンとしている。この蒸気機関さえ知られていないのだ。

「しかも先生。この機関はより先進的な蒸気機関なんです。零戦などが使っているエンジン方式とは違い、タービンによる発電よって物を動かすのは船なんかに使われています。」

コルベールがローレットの説明を聞き、

「ではやはり、長い航海が可能というのは。」

「はい。可能です。」

「では、未開の地であった東にも。」

「十分可能です。」

「よし、この機関をより完成度の高いものにして東方への探検船に流用しよう。」

そこに、午前中の授業の終わりを告げるチャイムが鳴ってしまった。午前中はローレットとコルベールの二人授業だった。

- 食堂 -

「ねえ、ローレット。明日何処に行くの？」

キュルケがローレットに聞いてくる。

「ああ、ちょっと爺やに呼ばれていてな。明日というか、今日の午後に発つことにした。」

魔法学院はアルビオンとの戦争が終わり、少しずつ落ち着き始めているが、それでも完全に落ち着いてはいない。その為、1週間は午後の授業が休みとなっている。

「じゃあ、私達も連れてってよ。」

「達？」

「私とタバサ。」

「でも、お前等って明日戦勝パーティが王都であって、それを見に行くんじゃないのか？」

「そんなのどうでもいいわよ。私達ってトリスティン国籍じゃあ無

いし。」

「まあな、私は早く終わらせたかったから極秘で参戦したんだが。」
ガリアは中立を守ろうとしていたが、ローレットは王家にばれないように慎重に国境を越え参戦。戦争が終わった後は艦艇をトリスティン海軍に一時在籍をさせて、ガリア王室の目を誤魔化した。

「じゃあ、中庭に来てくれ。」

「やったあ。」

キュルケはご機嫌で昼食を食べ、タバサを呼びに行った。

・ローレットの部屋・

「ロー兄、いいの?」

「何が?」

「地図に載っていない島なんか見せて?」

「別にいいよ。それに、いずれは見つかるし。」

「でも。」

「それに、彼女等はかけがえの無い親友と呼べる。そんな彼女等に隠し事なんて出来ないよ。」

ローレットは荷物持って部屋を出ようとしますが、エニグマから電文とそれに載っている写真が出てきた。ヒュドラーはその電文を取り、ローレットに渡した。

『上空写真です。確認下さい。』

「こ、これって!。」

「どうしたのロー兄。」

「いや、急ぐぞ。」

ローレットは慌てて部屋を出て中庭に向った。

221

・中庭・

「遅いじゃない。」

中庭には既にキュルケとタバサは居た。

「ごめん、ごめん。少し手間取っちゃった。」

ローレットは召喚魔法でHee111を出す。全員はそれに乗り、ローレットはエンジンを掛ける。

「行くぞ。」

ローレットは離陸させ、高度6000mまで上昇した。

「さすがに早いわね。」

キュルケが操縦席まで来て言う。コックピットは非常に広く、周り
は良く見渡せる。

「ねえ、この天窓は何？」

キュルケは上部機銃のある窓を指差して言う。

「それは上部機銃手の為の窓。一応、防弾能力は持っているが、火
竜の炎は意味がない。」

「私の炎も？」

「ああ。」

キュルケは試しにファイアーボールの呪文を唱えようとするが、

「割ったら機外に放り出す。」

ローレットはキュルケを見ずに言った。

「わ、分かったわよ。」

キュルケは後ろで本を読んでいるタバサの所へと行った。

(まさか、あの艦は。しかし、艦の形はそうだった。)

ローレットは先程の写真で見た艦影を頭に思い浮かべて思った。He 111は洋上に出る。後は隣のヒュドラーの航法に全てが掛かっている。

「ねえ、どうして海に出るの?」

「この先が目的地だ。」

「でも、この先には何も無いわよ。」

「いや、それは見つけていないだけで我々は既に見つけている。見えてきたぞ。」

ローレットは水平線に見える島を指差して言う。

「あ、あれって?」

「私達はマルタ島って呼んでいる。」

見えてきたのは地球のマルタ島を少し小さくしたような島であった。そして、港の横の飛行場へと着陸した。

「お坊ちゃま、お待ちしておりました。」

「ありがとう爺や。」

ローレットは早速トラックに乗り、問題の艦を見に、港のドックへと向った。

- 港（軍港） -

マルタ島は現在、一般のものは立ち入り禁止（というか知られていない）となっている。反乱海軍の外洋にて一大補給基地の役目を担っており、陸軍や空軍も進出して島の開拓を行っている。輸送機にて物資が運ばれ、月に一度重巡洋艦が大量に物資を運んでくる事になっている（蒸気機関が未完成の為に輸送艦が建造できなかつた。通常の風石使用の艦では到達できず、その為に重巡洋艦が使用されている）。

「此方が、その艦でございます。」

爺やに案内され、一行が到着したのは大型の乾ドックであった。そして、その中にある艦が

「やっぱり、雪風が。」

「雪風って、タバサの二つ名。」

タバサもピクリと反応する。

「この艦は、あの悲惨な戦争を同型艦が沈む中で唯一生き残った奇跡の駆逐艦、名は「雪風」。タバサの二つ名と同じだよ。」

タバサは

「乗ってみたい。」

と、呟いた。

「いいけど、まだ試験航海が済んでいないし、その時にね。」

「今がいい。」

ローレットは頭を掻いた。しかし、ここまで積極的なタバサを見るのは久しぶりと思い、

「爺や、乗組員を集合させてくれ。」

「はい。もう選考は済んでおりますので直ちに。」

20分後、雪風の乗組員は雪風に乗艦し、出港の準備を行っていた。

出港準備は10分ほどで終えた。なぜか、この艦には固定化魔法が掛けられており、その理由は不明だがそのお陰で老朽化を免れていた。

「出港。」

機関微速で湾を出る。出た後は試験航海のため、機関最大で疾走する。

「す、すごい。実際よりも6ノットも速い。」

ローレットは雪風が35ノットと聞かされており、現在の雪風はな

んと41ノットで疾走している。

「これなら、高速輸送艦としての使い道もあるな。」

一方、タバサとキュルケは対空見張り台に居り、顔にあたる潮風を楽しんでいる。

「速いわねこの船。ねえ、そう思わない？」

タバサは頷く。

「巡航速度。続いて、武装試射。」

雪風は巡航速度まで速度を落とし、乗員は主砲や魚雷の発射用意入った。爆雷は既に撤去され、主砲は3基になっている。

「これも、メイジと平民の協力した結果だな。」

ローレットは雪風の改装の早さを見て驚いている。そこに、キュルケとタバサが艦橋に入ってきた。

「これから如何するの？」

「今から武装の試射を行う。それと、この艦は私の領地に移動させ、訓練艦として暫くは過ごしてもらおう。」

その瞬間、雪風の主砲が一斉に左に発射される。

「ぎゃっー!。」

レキシントン号との戦いを見ているキュルケですら雪風の砲音に驚く。

「い、今の何？」

「主砲の発射音だよ。」

「あれが？」

使用している火薬が違ったため、発射音は此方のほうが大きい。

「上出来だな。」

(しかし、今開発中の連射砲に換装しよう。)

ローレットは現在、反乱軍とは別の武器・兵器開発所に連射砲の開発を行わせている。それは12.7cm(丁度雪風と同口径)を来月に試作で開発が終えることになっている。それをローレットが搭載一号艦として雪風を選んだ。

魚雷や、機銃の試射を行い、雪風はローレットの領地へと到着する事ができた。

タバサの実家とあの時のローレット

ローレット達は無事に雪風をローレットの領地に入港させることが出来た。

「そういえば、何で貴方達って外洋を調査しているの？」

「早めに見つけておけば、海上での目印にもできる。まさか、国がここだけしか無いってのもありえないからね。もしかしたら、この大洋の向こうに大陸があるって考えなかった？」

「そうね、あんまり考えた事なかったわ。船じゃあ行けないし。」

(やっぱり、魔法が発展を抑えているのだろうか?)

ローレットはそう感じてしまう。

「ねえ、これからタバサの実家に行かない？」

キュルケは突然提案する。

「いや、突然言ったんじゃあタバサが迷惑だろう。」

「別にいい。」

「そうか。」

あっさり承諾。

「ねえ、ローレットってタバサの風竜に乗った事ないでしょう?。」

「いや、風竜じゃあなく韻竜ですから。(うん、そう言われると無いな。)」

「じゃあ、乗せて貰いなよ。」

タバサは口笛を吹いて使い魔のシルフィードを呼んだ。

「キユイ?」

「私の家まで。」

タバサはシルフィードにそう言うと、背中に乗る。それに続きキユルケ、ローレット、ヒュドラーも乗る。そして、30分程飛んでタバサの実家に到着した。

(やっぱり、この傷跡が入っているのか。)

タバサの実家の家紋には大きな×が書かれている。王家の資格を剥奪された証拠だった。

- タバサの実家 -

「これは、これはキユルケ様。それにお久しぶりですローレット様、ヒュドラー様。」

「やあベルスラン。無事だったんだな。」

「はい、ローレット様も無事で何よりです。ヒュドラー様も。」

「うん、ベルスラン。私も無事を確認できて安心したわ。」

4人は客間に案内された。ここには現王の弟であり、シャルロット嬢の父シャルルの肖像画が飾られていた。

「これも、無事だったのか。」

「はい。今、お茶をお持ちします。」

そう言ってベルスランは客間から出て行った。

「タバサ、お母様に会えないだろうか？」

タバサは頷く。ローレットの事は信用しているようだ。

「お母様、入ります。」

タバサはノックをして部屋に入った。ローレットもその後ろに続き、その後ろにヒュドラー、キュルケと中に入った。

「お母様、ただいま戻りました。」

「さ、下がりなさい!」。」「

入るなり、本を投げってくる。ローレットは1歩前に出て

「公夫人。私を覚えてますか？貴方の実の娘のシャルロット嬢と幼少期に遊んでいたローレットです。」

しかし、母は近くにあつたグラスと花瓶を投げつける。ローレットは腰に挿している刀を抜き、グラスと花瓶を斬った。しかし、斬った時に飛び散った破片で頬や額に傷を作った。

「よ、よくもロー兄を。」

ヒュドラーは変身を解こうとするが、ローレットは

「やめるヒュドラー！」

ヒュドラーはビクツと驚き、変身を戻した。

「いくら公夫人でも、ロー兄を怪我させたら許さないから。」

ヒュドラーは怒った表情で言うが

「公夫人は、エルフの毒で心を壊している。錯乱していても仕方が無い。」

ヒュドラーは黙ってしまった。

「戻ろっ。」

ローレットはそう言い、部屋を出た。

・客間・

「ねえ、ローレットはどうしてジョゼフを憎んでいるの？もっと詳しく教えて。」

ローレットはタバサを見る。タバサはコクリと頷いた。

「分かった。」

・ローレットの回想・

「お母様、お父様。」

「おお、ローレット。今日はどうだった？」

「うん。シャルロット嬢といっばい遊んだよ。シャルロット嬢ね、僕が既にスクウェアアクリスのメイジだよって言ったらとても喜んでくれた。」

「ははは、ローレットは魔法の才能はズバ抜けているからな。」

「それでね、私も早くスクウェアアクリスのメイジに成りたいって言うた。シャルロット嬢なら成れるよね？」

「ああ、彼女はいずれは国を動かすほどのメイジになっているだろう。」

当時の私は、シャルロット嬢とは遊び相手だったんだ。いつも笑顔

の絶えないシャルロット嬢を見てみると、こっちも幸せになるほどの笑顔だった。しかし、時は経って前国王の容態が悪化していたときだった。

「ねえ、シャルロット嬢のおじ様って死んじゃうの？」

「それは分からない。しかし、今の王室の連中は次期国王がどうか言っていて現王の息子であるシャルル様以外は誰も心配していない。」

「そんな。」

「自らの名を上げるためにも、現在はシャルル派とジョゼフ派で見が対立している。」

「そ、そんな。」

「とにかく、暫くローレットは私の領地から出るな。いいな!？」

「う、うん。分かったよお父様。」

前国王の容態は日に日に悪化していった。そして、いよいよ崩御なさった日、国内は動乱した。

「次期国王はジョゼフ様となった!！」

王都では、ジョゼフが国王になったことで沸きあがった。そして、

「ぐわっ!！」

突然、シャルロット嬢の父であるシャルル様は何者かに謀殺された。そして、私と両親。それにシャルロット嬢とそのお母様が出席されたパーティで

「いけません！。それを飲んででは。」

シャルロットは渡されたグラスの中に入っている飲み物を飲もうとしたときに、お母様がそれを奪って自分が飲んだ。結果は、今の様に心が壊されてしまった。

そして、私のほうにも

「その子供は王位を篡奪しようとしている！！。ひっ捕らえて打ち首にしる！！。」

そう言つて王命を帯びた軍が私を捕らえようとし、

「危ない！」

お父様とお母様が私の代わりに殺された。私はその後、ジョゼフの許に差し出された。そして、

「私に従わなければ貴様ではなくシャルロットが死にことになるぞ。」

と言われ、止むなく従っている。そして無茶な任務を行い、何度か死に掛けた。それでも、必死になって任務を遂行した。必ず、ジョゼフに復讐するために。その任務の最中にヒュドラーと出会ったんだよ。

・客間・

タバサはローレットが従わなければ自分が殺されると言われて従っている事に驚いた。

「ローレット。」

「はい？」

「ありがとう。私の為に命を張ってくれて。」

「構いません。どうせ、連中はいつか私を殺すでしょうから、今の内は連中の手の内で踊ってやりますよ。」

「貴方にも、そんなに辛い過去があったのね。」

キュルケはタバサの過去を聞いて可哀想だと思っていた。だが、ローレットも同じような境遇に居る事を初めて知った。

「私にできる事があつたら、何でも言つてね。協力するわ。」

「ああ、ありがとう。」

それを遠目で見ていたヒュドラーは

（ふふ、ロー兄も、少しは仲間を信じれるようになったのね。昔は、状況が状況で周りの奴を信用してなかったけど、あの学院で出会った仲間と今はこうして話していれる。）

ヒュドラーは最初はローレットの事が心配だった。ガリアでは孤独な毎日を過ごしてきたが、トリステインに留学するとあつという間に仲間が出来て、今では何気ない会話もしている。それが、ヒュドラーにとって一番嬉しかった。

「それじゃあ、そろそろ戻りますか。」

「え？まだ早いんじゃない？」

「私は早く戻って、コルベール先生に技術を教えないと。あの人、どんどん地球の物を開発して言っているから。」

「なるほど。それは面白そうね。」

全員がローレットの意見に同意し、ベルスランに別れを告げてシルフィードで学院へと戻った。

トリステインの汚職人 前編

魔法学院に戻ったローレットは夜間、エニグマにてゲルマニア方面の諜報部隊から連絡を受けた。

『ゲルマニアはアルビオンとトリステインとの戦争の集結。それに続く、アルビオン皇太子のウェールズとトリステイン女王アンリエッタとの関係に不信感を抱いている。』

「それはそうだ。同盟条約を破棄して開戦したんだ。それに続き、あの大艦隊保有のアルビオンに殆ど損害を被らずに早期終戦をってしまったんだ。不信感を抱くのも無理ないな。」

実質はローレットのお陰で早期終戦をしたと言える。昨日の戦勝パレードもトリステインには栄光ある強き味方がいるとアンリエッタは言っていたらしい。

「ロー兄はゲルマニアはどう動くと思う?」

「さあな。ただ、すぐに戦争は仕掛けてくることは無いだろう。アルビオンとの戦争勝利の裏に強力な軍が動いていた事ぐらいゲルマニア程の大国なら感づいているだろうし。」

実際、ゲルマニアも噂程度なら耳にしている。その噂が真実でも嘘でもすぐに戦争を仕掛けるほどゲルマニアは馬鹿ではない。

「当面はガリアを警戒しなくてはいけないだろう。そして、その向こうにあるロマリアも。」

「どうしてロマリアを？」

「あそこはブリミルをハルケギニアの中で一番信仰している国だ。そこで、聖地奪還。エルフとの戦争を起こすかもしれない。」

「でも、ロー兄の領地には。」

「ああ、エルフを入れては交流を図っている。エルフも争いなど望んではないしな。」

ローレットは恐れているのだ。宗教的戦争を。宗教的戦争は下手をすれば一生終わらない戦争でもある。それは、地球の歴史を見てローレットは回避したい事であった。幸い、エルフは自分から戦争を始めようなどと考えない。それが救いであった。

「何とかしなくては。」

ローレットは眠りに就いた。

翌日、ローレットは突然トリステインの王室に呼ばれた。

・王宮・

「突然何ですか？ウエールズ皇太子も一緒に。」

アンリエッタとウエールズ皇太子はローレットを呼んだ訳を話した。聞くと、トリステインは近々アルビオンとの同盟を結ぶ。しかし、トリステインの最高法院長のリッシュモンはこれに反対していた。

彼はレコン・キスタに関わっていた疑いが掛けられているが、証拠は無かった。そこで、彼の本性を炙り出す作戦に協力してほしいと依頼してきた。

「アニエス、入って。」

「は、陛下。」

入ってきたのはトリステイン銃士隊隊長のアニエスだった。それと、もう2人

「ルイズ！才人！」

ルイズと才人で、2人もローレットと同じく作戦に参加するメンバーだった。

「作戦は、私とウェールズ様が王宮から姿を消す。そして、リツシユモンがレコン・キスタの残党と接触したところを残党共々一斉に逮捕する。」

「えらく大雑把な作戦ですね。」

「いや、案外単純な作戦の方が騙されやすいつて事もあるぞ。」

「いえてる。」

全員は笑いあった。

「では、作戦は今夜決行。ローレットさんは王都をよく回って建物等を見といて下さいね。」

アンリエッタに言われたので、コルベール先生への技術提供はまたの機会にする事にした。

「はい。分かりました。」

「じゃあ、私が案内するわ。」

ルイズがローレットの案内役を買って出た。

トリステインの汚職人 後編

王都をルイズと才人（主人のおまけ的）に案内され、大体の様子をローレットとヒュドラーは把握する事ができた。

「あれが武器屋ね。才人の剣もあそこで買ったの。」

「ふーん。（しかし、かなりの値打ちのあるデルフリンガーを買うとは）」

「どうしたの？」

ルイズはローレットが才人の背負っているデルフリンガーを見ているのに気づく。

「なあ、そのデルフリンガーって幾らで買った？」

「秘密。」

ルイズは少し下向きに言った。

「それで、リッシュモンって一体どんな奴なんだ？」

「説明されたとおり最高法院長。と、言っても色々と影の噂が絶えない人ね。平民からはどちらかという嫌われているし。」

「貴族なんか、平民に嫌われている事なんか殆どだよ。」

「わ、私のお父様は違っわよ。」

「へー、会ってみたいな。その、お父様に。」

「こ、今度会わせてあげるわよ。」

「楽しみだ。実言うと会ってみたいんだ。君のお父様に。」

「どうして？」

「内緒。」

ローレットは悪戯っぽい笑みをルイズに見せる。

「な、何よ。」

「あっははは。」

夜間、計画通りにアンリエッタ姫とウエールズ皇太子は王宮から姿を消した。王宮では大混乱に陥り、魔法衛士隊等が血眼になって探す。唯一事情を知っているのはアニメスを隊長とする銃士隊だけであった。そして、そのアニメスの銃士隊と魅惑の妖精亭で落ち合った。

「なあ、この店の人と君達って知り合い？」

オカマ的な店の主人はルイズと才人と普通に話している。他の従業員達もルイズ達を知っているようだった。

「ちょ、ちょっと女王様の依頼の最中に知り合ったのよ。」

「ふーん。」

「ねえ、ロー兄。」

「何？」

「ここって、何の店？」

「聞かないでくれ。」

中は純粹な男性にとっては耐え難い空気で包まれている。ローレットにとっては直ぐに出たいという気持ちで一杯だった。

「では、そろそろ隊長殿が街の封鎖をする為の許可証を取ってくる筈だ。君達は計画通りに動いてくれ。」

「了解しました。」

銃士隊の面々は店を出て行く。

「じゃ、私も行きますか。」

「あーん、ちょっと待ってローレット君。」

突然店の主人に呼び止められた。

「君も、これから劇に出るんで一緒にやらない？」

既にルイズと才人は捕まっている。

「わ、私は遠慮しておきます。」

ローレットはヒュドラーの腕を掴んで逃げるように店から出て行く。

（ルイズ、才人、すまん。私は耐えられない。）

地図に書かれているリッシュモンの屋敷に到着したローレットは屋敷を見張る。出てきたところで追跡をし、レコン・キスタ残党達と落ち合う場所を探り当て、各銃士隊員とアンリエッタに渡しておいた小型無線機で伝える役目をローレットは担っていた。

「そろそろ来る頃だが。」

そこへ、屋敷からリッシュモンが隠れるように出て行くのを見つける。

「追っぞ。」

「うん。」

ローレットとヒュドラーは見つからないように尾行を開始する。

・酒屋・

「あそこか。」

リッシュモンは酒屋の2階に続く階段を上がっていく。ローレットとビュドラーも続いて2階に上がった。

「あの部屋なのか?。」

リッシュモンは酒屋の2階の一番奥の部屋の扉を開ける。

「女王陛下とウェールズ皇太子が王宮から姿を消しました。動くなら今しかありません。」

(やはり、レコン・キスタか。)

すると、リッシュモンが此方に歩いてくる。

(ま、まずい。)

そこで、咄嗟にビュドラーを抱き寄せ。

「ロ、ロー兄?。」

「いいから。」

ローレットはビュドラーにキスをする。

「おい、何をやっている?。」

「あ、これはこれはリッシュモン最高法院長殿。見ての通り恋人と熱いキスを交わしております。恋愛は自由の筈ですよね?。」

「ま、まあそうだな。しかし、こんな人の多いところでやるのはや

めてくれ。」

そう言ってリッシュモンは階段を下りていく。

（あ、危ない。）

ヒュドラーは突然キスをされて、駄目だな。

（はー。後で謝ろ。）

ローレットはヒュドラーを正気に戻して尾行を続ける。

「連中は何処で落ち合うんだ？」

先ほどの酒屋では既にレコン・キスタの残党は移動の用意を整えていた。従って、もう一度何処かで接触する。そこが、最大のチャンスであった。

「あそこに入って行ったな。」

入ったのは演劇会場だった。

（ここって、もしかして。）

暫くすると、ルイズと才人と魅惑の妖精亭の従業員がやって来た。

（やっぱり。）

ローレットは無線機を取り出し、

「こちらローレット。鼠を捕捉。場所は演劇会場。本日劇が予定されている演劇会場にて鼠を捕捉。」

ローレットは無線機を切り、

「行くぞ、ヒュドラー。」

「う、うん。」

まだ先ほどのキスを気にしているようだった。

- 演劇会場 -

「今宵お集まりの紳士・淑女の皆様方。我がスカロン一座の感動と涙の物語をお楽しみ下さい。」

ローレットは会場の一番後ろの席に着く。暫く待っていると、リッシュモンの付近にレコン・キスタの残党と思われる連中が集まってきた。

(予想よりも大勢居るな。)

そこへ、

「ローレットさん、よくやってくれましたわ。」

アンリエッタとウェールズ。それに銃士隊が目立たないように入ってきた。

「ア、ア二エスは？」

「彼女は別の場所に居ます。」

「そ、そうですか。」

ローレットはリッシュモンを指差す。銃士隊の隊員は頷き、アンリエッタは大胆にもリッシュモンの後ろの席にフードを被りながら着く。

「それで、女王陛下と皇太子はまだ？」

「さよう。まだ見つかっておりません。」

「攻め込むなら今ですな。」

「ええ、女王も皇太子も今頃何処に居るやら。」

リッシュモンと残党のリーダーらしき人間は後ろで女王陛下と皇太子自らが話を聞いている事も知らないで話をしている。決定的な証拠を掴んだところでアンリエッタは

「ここに居ますわ。」

アンリエッタは聞こえるように言う。残党とリッシュモンは驚いた顔で後ろを見た。

「話は全て聞いたよ。」

アンリエッタとウェールズはフードを取り

「リッシュモン最高法院長。貴方を、国家反逆罪並びに、誘拐の立計、レコン・キスタ共犯の現行犯で逮捕します。」

銃士隊も立ち上がり、剣を構える。会場に居る何も知らない者たちは慌てて会場から逃げ出していく。

「幕は降りました。速やかに投降しなさい、リッシュモン殿。」

リッシュモンは不敵に笑みを浮かべ

「ふん。詰めが甘いですな女王陛下。」

その瞬間、リッシュモン等の後ろに居る観客達は一斉に立ち上がり、此方もレコン・キスタの残党。しかも、剣を構える。

「陛下と皇太子殿下をお守りしろ。」

銃士隊の臨時指揮を執っている副隊長が銃士隊を展開させ、辺りで戦闘が起こる。

「ロー兄、どうするの?」

「どうするもこうするも。助ける。」

ローレットは愛刀を抜き、近くに居た残党を片付ける。

「ふう。ヒュドラー、女王陛下と皇太子をお守りしろよ。」

「え?ロー兄は?」

「私はリツシュモンを捕まえる。」

ローレットは客席を飛び越えて、逃げるリツシュモンを追う。オ人とルイズはステージから降り、戦闘に参加している。追えるのはローレットだけだった。

「覚悟ー！」

一人の残党が斬りかかって来るが、ローレットは難なく避け、その残党の腹に思いっきり刀の刃を当てる。

「がっはー。」

残党は血を吐き、その場に崩る。ローレットはそれを無視し、リツシュモンを追う。

「さらばだアンリエッタ。」

ステージに来たリツシュモンは杖でステージの床を叩く。すると、床が開き、リツシュモンは逃亡する。

「待て！」

ローレットは間一髪でその床の穴に入り込む事が出来た。

「レビテーション。」

自分にレビテーションを掛け、落下していく。

「残念だったな。この劇場は私の管轄。逃げ道などちゃんと確保してある。」

抜け道まで降りたリッシュモンは逃げようとするが、

「待て！」

「うっん？」

誰も居ないと思っていた抜け道に居たのは。

「何処へ逃げるつもりだ？リッシュモン！」

アニエスだった。

「貴様か。」

そこへ、

「よっど。」

ローレットも到着。

「な、アニエス。」

「ローレット、お前どうやって？」

「リッシュモンを追って穴に入ったらここに来た。」

「き、貴様は何者だ!？」

リッシュモンはローレットを見て言うてくる。

「ははは、汚職人に名を名乗る気にはなれんな。私は王室での呼び名ではフェニックス。それを指揮している者です。」

「フェ、フェニックスだと。あの、アルビオンの艦隊や軍隊をいとも簡単に打ち破り、戦争を早期に終わらせたという。」

「知っているとは光栄だね。」

「しかし、所詮はガキ。それに、あの竜は今は居ない。」

「残念。」

ローレットは霧を出して辺りを見えにくくする。リッシュモンはラッキーと思い、逃げようとするが

ゴッソ!

「な、なんだ?」

突然、鉄みたいなものにぶつかった。

「残念でした。この坑道は現在封鎖中。別の坑道をお探し下さい。」

何と、ローレットは坑道に九七式中戦車を出して封鎖した。そこにリッシュモンに迫ったアニエスが

「喰らえ、故郷の仇だ!!。」

ザクッ!

「ア、アニエス。」

ローレットは驚く。逮捕が目的だったのに、アニエスはリッシュモンを刺し殺してしまった。

「それに、故郷の仇って?」

ローレットはリッシュモンを刺し殺すときに言ったアニエスの言葉を聞き逃さなかった。

「私の故郷は、ダングルテルでな。そこは、昔大きな虐殺事件があった。」

「それを、リッシュモンが行ったと。」

「奴はあくまでも計画者だ。隊長は別に居る。それが、分からないんだ。」

「なるほど。少なくとも、これで復讐はできたのか。」

「まだまだ、隊長を。隊長を殺るまでは復讐は終わらない。」

「アニエス。復讐に生きるのもいいが、この連鎖は終わらないぞ。」

自分はジョゼフを憎んでいる。それでも、彼女に自分と同じような復讐の道を歩んでほしく無いとローレットは感じている。

「貴様に分かるものか。」

「分かるよ。私も、復讐に生きる者だから。」

「なら、私の事を言えないんじゃないのか？」

「確かに。しかし、引き返すなら今だぞ。これ以上、復讐の連鎖を止める意味でも、その考えは忘れた方がいい。」

「分かるものか。」

アニエスは立ち去ってしまう。

「おい、この鉄の馬を何とかしろ。」

アニエスは坑道を封鎖している戦車をガンガン蹴りながら言う。
「馬とは酷いな。これでも、優秀な戦車なんだぞ。」

優秀かどうかは地球ではあまり言い難いが、ハルケギニアでは戦車の対処法を知らない。その為、九七式中戦車でも十分戦う事ができる。

ローレットは召還魔法で戦車を戻した。

（アニエス、警告はしたぞ。ここで復讐の連鎖を断ち切れるかは君の心次第だ。）

ローレットも坑道から出る。そして、会場に戻ってビュドラー達と合流した。

王都へ

夏季休暇に入ったローレットは中庭にて読書をしている。ヒュドラはその隣でローレットの別の本を借りて呼んでいる。

「お前がローレットか？」

同級生で風の系統を得意とするローレーヌがローレットに話しかける。

「そうだが。同級生の名くらい覚えていてほしいな。」

「う、うるさい！」

「それで？」

「僕と決闘をしろ。」

「やだ。」

「な、なんでだ!?!。」

「決闘は趣味じゃない。それに、私は読書をしている。」

そう言ってローレットは本に目を戻した。

「はっは、僕に負けるのが怖いだろうか?。」

ローレーヌは挑発するように言うが、ローレットは完全無視して読書続ける。

「何とか言え!!。」

そう言つてロレーヌは呪文を唱え、風の刃を発生させ、その刃がローレットの頬を霞め、血が少し出る。その瞬間、ローレットの目つきが変わつた。

「ロ、ロー兄?。そんな目をしないでよ。」

普段殆ど見せた事がない目つきになつたローレットにヒュドラーは怯える。

「黙つてるヒュドラー。」

声の大きさは普段と同じだが、その声には今までにない迫力が混じっている。

「お。やる気になつてくれたかね?では。」

そう言つてロレーヌはローレットから10メートルほど下がつた。

「改めて名乗るよ。僕はヴェリエ・ド・ロレーヌ、風系統のラインメイジさ。」

「地獄を見たくないなら今すぐに謝れ。」

ローレットはただロレーヌにそう言つた。ロレーヌは風系統のラインメイジだが、ローレットは虚無以外の全系統に精通し、スクウエアメイジである。それを知らないロレーヌは相当運が無いと言わざるを得ない。

ローレーヌは呪文を詠唱し、烈風を発生させてローレットを攻撃するが、寸前の所で烈風は消える。

「な!？」

「この程度で私に決闘を挑むとは。」

ローレットはため息をつき、姿を消す。

「ど、どこだ!？」

ローレーヌは辺りを見回すが、ローレットを見つげられない。

「逃げたか？」

ゴッソ!。後ろに回り込んだローレットは愛刀でローレーヌの頭にみね打ちをして気絶させた。

「はあ。」

ローレットは再びため息をつき、ヒュドラーを連れて部屋へと向かった。

・ローレットの部屋・

「全く。あの程度で決闘を挑むとは。あれが戦場だったら間違いく死んでるぞ。」

ローレットは怒り気味だった。せつかくの楽しい読書を邪魔したあげく、実力が殆ど無いにも拘らずに決闘を挑み、大敗したのだから当然だった。

「ま、まあロー兄、許してあげれば。」

そこへ、扉がノックされる。

「誰だ？」

扉が開き、入ってきたのはキュルケとタバサ、ギーシュにモンモラ
ンシーであった。

「何の用だ？」

「これから王都に行くのよ。良ければ、一緒に行かない？」

どうやらキュルケが全員を誘ったようだ。夏季休暇なのに暇な奴である。自分も人の事を言えないが。

「ま、暇つぶしにはなるな。」

「でしょ。それじゃあ、ローレットの出す飛行機で行きましょう。」

「それが狙い？」

「だって、速いんだもん。」

キュルケはローレットを促して門へと向った。

「そういえば、ルイズと才人は？」

「あの二人は夏季休暇に入ってから何処行ったのか分からないのよ。実家にでも帰ったのかしら。」

「あの二人は仲がいいからな。」

ギーシュがからかう様に言う。

(仲いいのか？あれで？)

ローレットはそう思いながらも、召喚魔法でB-25を出した。

「また違う飛行機ね。」

「ああ、案外名機だぞ。」

「ふーん。」

知る人ぞ知る第二次大戦の中型爆撃機B-25。日本初空襲で一躍有名になったが、濃霧の中を着陸しようとしていたB-25が誤ってエンパイア・ステート・ビルディングに激突するという事故も発生した。

「乗ってくれ。」

ローレットが主操縦席、キュルケが副操縦席、ヒュドラーが航法・爆撃手席。残りは機内に用意された椅子に座る。

「道案内を頼むぞ。」

ローレットはエンジンを掛け、出力全開で離陸した。

アルピオンとトリステイン

- 王都 魅惑の妖精亭 -

「お前たちつて、まだここで働いているんだな。」

ローレットはリッシュモンの一件でルイズ達がここで働いているのは知っていた。しかし、キュルケ達は知らない。

「へ〜。」

キュルケは何やら考える表情になった。

「まあ、ワインを貰うわ。貴方のお・ご・り・で・ね。」

キュルケはルイズを見て言う。

「な、何でよ!。」

「ばらすわよ。」

「う〜〜。」

ルイズは観念した表情でワインを運んできた。

「それでキュルケ、ここに何の用で来たんだ?」

「今日、アンリエッタ女王陛下とウェールズ皇太子が結婚式を挙げ

るのよ。それで、今日は王都が賑わっているって聞いたから来たのよ。」

「なるほど。」

そこへ、花火の音が鳴り響いた。

「始まったわ。」

全員が外へと出る。すると、通りは人で賑わっておりトリスティン万歳やアルビオン万歳が巻き起こっている。

（不思議だな。この前までは戦争をしていたのに、今では同盟国なんて。）

しかも対等なのだ。日本とアメリカとは大違いである。

「見えたわ。」

キュルケが大通りを進む王室の馬車を見つけて言う。

「ははは、秘密防共協定の通りに動いているな。」

ローレットはそう言った。

「え？防共協定？」

モンモランシーがローレットの顔を見て言う。

「い、いや。こっちの話だ。」

アルビオンとの戦争後、アルビオンとトリステインは同盟を結んだ。そして、この裏には反乱軍との亜度反防共同盟という攻撃を受けたら守りますよの同盟を秘密裏に結んでいた。

「あれって、戦車よね？」

「ああ。」

王家の馬車の周囲は反乱軍の8台のティーカー戦車が護衛し、その周りにアニエス率いる銃士隊が護衛している形となっている。

「アルビオンも戦車を持っているの？」

「さあね？」

ローレットは惚けたように言うと、ヒュドラーが耳を引っ張ってきて。

「いててて、な、何するんだよ？」

「ロー兄、何で戦車を提供しちゃうのよ？」

ヒュドラーは周りに聞こえないように小声で言う。

「大丈夫だ。提供したのはあの8台と他に6台だけだから。それ以上の増派は行わないと言っているから。」

多数の戦車配備はその国が実力過信を起こし、他国を侵略しかねないからこれ以上の増強は行わないと提供に当たって伝えておいた。

「ねえ、あれも貴方の世界の戦車でしょう?」

「ま、まあな。ドイツって言う国の戦車だ。丁度、地理的な位置はゲルマニアと同じだよ。」

「私の国と?」

キユルケはふーんという顔になる。

- 教会 -

「始祖ブリミルに誓い、ウエールズ皇太子はアンリエッタ女王陛下を妻にすることを誓いますか?」

「誓います。」

「アンリエッタ女王陛下。貴方はこの者を夫とすることを誓いますか?」

「誓います。」

「では、始祖ブリミルの名に置き、この者達を夫婦と認めます。」

その瞬間。教会内部は拍手喝采となり、改めて同盟関係も強化されることとなった。

「いやー、おめでとうございます。女王陛下、ウェールズ皇太子殿。」

「オスマン学院長、ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

真つ先にウェールズとアンリエッタは魔法学院に来る事となった。

「それに、ローレット君も協力してくれてありがとう。」

「ウェールズ皇太子、思えばあの時の私の独断専行が今の二人を生んだなんて信じられません。」

「いいえ、あの時の行動は私は勇気ある行動だと思っています。敵陣を鉄の馬で突っ切り、ウェールズ様を救ってくれて、本当に感謝しています。」

「それと、私が提供した戦車はどうですか？」

「はい。あの鉄の馬は本当に素晴らしいです。離れている目標をも撃破し、壁などを破壊して進めるんですから。」

「アルビオンにも協定通りに21台の戦車を後ほど贈りますので、好きに使ってください。」

「ありがとう。」

・ローレットの部屋・

ローレットはエニグマを使ってガリアの領地に暗号を打っていた。

『蒸気機関は完成した。それを搭載し、建造途中だった例の艦を直ちに完成させよ。目的を何としても達成する。』

「ねえ、ロー兄。」

「わー!。びっくりした。な、なんだよヒュドラー?」

突然声を掛けられたのでローレットはびっくりした。

「これ。」

ヒュドラーは一枚の手紙をローレットに渡した。

『零号へ』

アーンベルグにて盗人が現れた。その者を捕まえ、処刑せ

よ。』

「盗人?」

「また仕事?」

「ああ。向かうぞ。」

- 中庭 -

ハンガーに駐機しているシュトゥーカを出し、エンジンを掛けて離陸した。

アルピオンとトリステイン（後書き）

ローレットのこの仕事も書きますが、その前に次回は無理やりですがメルヴィン率いる傭兵部隊がレコン・キスタの残党に雇われて魔法学院を襲撃という話を書きます。

魔法学院の危機 1

- ローレットが飛び立った1日前のトリステイン 某所 -

「それで、俺を雇った理由はトリステインの魔法学院を占領し、レコン・キスタの再結成を呼びかけるわけか。」

「はい、メヌヴィル殿。」

レコン・キスタ残党軍の者は何としても復活し、ハルケギニアの王政撤廃を行おうとしていた。その初歩であったアルビオンは最初は成功するも彼らにとって予想外の兵器の出現で戦史至上短い敗北を味わったのだ。

「まあ、別に仕事だからやるが、もっと情報は無いのかよ？」

「噂だが、魔法学院内に我々の計画を台無しにしたフェニックスと名乗る部隊を指揮している者が居るそうだ。そいつにだけは注意してください。」

「フェニックス？」

「見たことも無い龍です。羽ばたくような動作を一切行わず、頭に付いている回転物によって飛行しているみたいな物です。」

「ふーむ、面白い。できれば鹵獲したい。」

メヌヴィルは子供の様に顔を輝かせる。

「では、夜間突入のために真っ黒に塗られた船を用意しました。それを使って魔法学院まで近づき、占領をお願いします。」

「任せておけ。」

・ローレットが飛び立った日の夜間 魔法学院・

生徒らが寝静まった頃、上空にメンヌヴィルを隊長とする傭兵部隊が到着した。そして、真上に来るなり降下し、

「いいか、作戦通りにやれよ。ちょっとでも抵抗したら殺しても構わん。」

メンヌヴィルはそう部下に伝え、部隊は展開した。

・ルイズの部屋・

「ちょっと、何なのよ?」

ルイズはドアを叩く音に起こされ、ドアを開けた。するとそこに居たのは

「キュルケ、タバサ。どうしたのこんな夜中に?」

「早く着替えをして。」

「え?」

しかし、下から悲鳴が聞こえてきてルイズは状況を読み取った。

「分かった。」

そう言っただけで部屋に入る。急いで制服を着て、身支度も急いで済ませる。

「いつまで寝てんの？この犬。」

出来るだけ小声で、そして才人が騒がない程度に思いつきり頭を蹴った。

「痛って!!」

「静かにしなさい、この犬。」

ルイズは才人の背中を掴み、

「外に逃げましょう。」

と言って、ベランダから飛び降りた。タバサがレビテーションをして全員が無事に中庭の茂みの中へ隠れることに成功したのだ。

- コルベールの研究所 -

「まさか、賊が侵入するとは。」

コルベールはこの学院に侵入してきたメンヌヴィル達をいち早く察

知し、研究室の隠し部屋に逃げ込んだのだ。

「確か、ローレット君のシュトゥーカとか言う機体は無かったな。」

コルベールは格納庫にローレットの愛機であるシュトゥーカが無いことを思い出し、隠し部屋に置かれている通信用の無線機を掴み、ローレットのシュトゥーカの周波数に合わせた。

「ローレット君、ローレット君。聞こえたら返事してくれ。」

・ローレット・

「ねえ、ロー兄。さっきから無線でロー兄を呼んでいる声が聞こえるんだけど。」

「え?」

無線を付けているヒュドラーはローレットに伝えた。慌ててローレットは無線機を付け、周波数を合わせた。

「はい?」

「ローレット君。よかった。」

「コルベール先生? 一体こんな夜中にどうしたんです?」

「君こそ、今日はどうしたんだね?」

「先生、わざわざそれを聞く為に連絡したんですか?」

「いや、ちょっと問題が発生してね。」

ローレットは無線機の音量を上げ

「問題？」

「実は、今学院に賊が侵入したんだ。それで、寮塔は占拠され、生徒達は本塔に集められている。」

「ルイズや才人君たちも？」

「分からない。」

「分かりました。女王陛下に伝えて鎮圧の為の部隊を送ります。」

ローレットは無線機を切り、周波数を王室に繋いだ。

「此方はマザリーニですが、ローレットさんですか？」

出たのは枢機卿のマザリーニであった。

「枢機卿、至急アンリエッタ姫にお伝え下さい。魔法学院に賊が侵入し、生徒が人質に取られましたと。」

「な、なんですと！？一体、誰が？」

「分かりませんが、相当のプロです。夜の闇に紛れて接近し、盲目の夜間にも係わらず占領できる連中です。恐らくは、傭兵経験がそれに準ずる経歴のある者たちでしょう。」

「分かりました。至急、伝えます。」

5分後、アンリエッタは鎮庄の為にアニエス率いる銃士隊とローレットから付与されたティーガー戦車4台を出撃させた。銃士隊用にローレットは他にもSdkfz250なども付与しており、それに乗って銃士隊は魔法学院目指して全速力で向かった。一方、元ワルド領のローレットの領地からはIS4が6台出撃していった。

「秘密防共協定に沿って我々反乱軍はトリステインの防衛出動に援護するか。」

ローレットはトリステインの自分の領地から無電が送られてきており、それを呼んで苦笑する。

「失敗したら、我々反乱軍の存在が公になるぞ。」

ローレットは速度を出せるだけ出して、目的の場所目指して飛行を続けた。

魔法学院の危機 2

アニエス率いる銃士隊とティーガー重戦車は、途中の道でIS4と合流し、魔法学院の周囲へ展開した。門の中に銃士隊とティーガー重戦車が入り、IS4は門の周囲へ付く。

「アニエス隊長。占領した者はレコンキスタの囚人を解放し、アルビオンとの同盟破棄を要求しています。」

「分かった。お前たちは裏に回れ。合図したら爆薬を使って突入し、全員を束縛。最悪は処刑する。」

そこへ、ティーガー重戦車の指揮官が

「アニエス隊長、我々の発煙弾も使用すればよいと思います。」

「あの、横に付いている物か？」

「はい。」

ティーガーの初期型には発煙弾を発射する装置があり、それを使って目晦ましをして撃破した例が幾つかある。

「分かった。全員、赤外線ゴーグルを付けよ。」

そう指示を出し、配置へと向かった。

「王宮は要求を呑みません。」

「ふん。まだ、約束の時間まで十分ある。せいぜい、悩むんだな。」
メンヌヴィルは生徒と教師を食堂に集め、自分はワインを飲んでい
る。

「それよりも、外の鼠をどうにかしなければな。」

メンヌヴィルが食堂のドアを見ると。

「中の者に告ぐ。私は、女王陛下の銃士隊長のアニエスだ。我等
は一個中隊で貴様らを包囲している。人質を解放しろ!!!、大人し
く投降すれば、命まではとらん。」

アニエスが時間稼ぎの意味で嘘を交えて言う。

「銃士隊の連中か。全く、こっちには人質が居ると言うのに。」

その時、メンヌヴィルは後ろの物音に気づいた。別の隊員が爆薬を
仕掛け終え、安心して物音を出してしまったのだ。

「全く、時間稼ぎとは小細工もいいところだ。」

そう言い、杖を振って火の玉を飛ばす。火の玉は、仕掛けられた爆
薬に引火し、隊員を巻き込んで爆発した。

「な、合図する前に爆発した?」

アニエスは入り口から離れ、

「お前たちはここを見張っている。」

そう言っつて一台のティーガーに乗り、裏へと回った。

「才人、一体どうなってるの？」

寮から逃げ、近くの茂みで事を伺っていたルイズ達は、収まってきたので、才人に偵察に行かせていた。

「食堂に生徒と教師が人質に取られている。」

「何？占領されているの？」

「そうだろう。しかも、連中はプロだ。銃士隊が二人ほど遣られた。」

「そんな。」

そこへ、コルベール先生が来た。

「君たち、無事だったんだね。」

「コ、コルベール先生。無事だったんですね。」

「何とかね。ローレット君に無線連絡して、応援を呼んだんだが、遅かったみたいだね。」

「ローレットは？ローレットは何処にいるんですか？」

「何処に居るかは分からないが、彼の飛行機械が無くなっている。恐らくは遠出しているのだろう。」

「それよりも先生。急いでみんなを助けないと。このままじゃあ。」

「しかし、生徒を危険な目に合わせる訳には。」

それは教師としては当然の義務だった。しかし、ここは魔法学院。一癖も二癖もある気の強い貴族の集まった学院だ。

「弱気な先生の言うことには従えないわ。私は一人でも皆を助けるわよ。」

そう言ってキュルケは立ち上がった。勿論、親友のタバサもこれを見て立ち上がる。それを見れば、ルイズも立ち上がるのは当然だろう。

「き、君たち。」

「先生。私は皆を助けたいんです。」

「確かに私も皆を助けたい。しかし、相手は疑うまでも無くプロだ。戦い慣れした傭兵だ。そんな奴らに実戦経験もまともに無い君たちが敵うはずも無い。」

戦争でルイズと才人は実戦を積んだが、あくまでも零戦という機械を頼った戦いだ。それに、ローレットの様に長い間経験を積んだっ

て訳でもない。

「でも、先生。」

「いいわルイズ。私たちは私たちが動くの。気弱な先生の指示なんて聞いていられないわ。」

そう言つてキュルケとタバサは行つてしまふ。その後、ルイズと才人も続いた。

「き、君たち。」

しかし、振り返らなかつた。

「全く。あいつは、そう簡単な奴ではないのに。」

「酷いな。」

裏に回つたアニエスは、倒れている銃士隊を見る。一人は間一髪で爆発を避けたのか、気を失っている。しかし、もう一人は完全に死亡していた。

「姑息だな、まあいい。アンリエッタ女王の銃士隊とやら。無駄な抵抗はやめておけ！。大人しく要求を呑めば、お前たちの望み通りに人質を解放してやる。」

しかし、返事は無い。

「ふん。ならば、一人焼いてみるか。我等が本気だと言つ事を解らせてやる。」

ギーシュを見て

「まずは貴様からだ。」

「よせ!!」

ギーシュが半分命乞いをしていると、アニエスが先ほどの爆発で出来た穴からマスケット銃を取り出して叫ぶ。そして、その後ろにテイーガー戦車が付いた。

「発射!!」

発煙弾を撃ち込み、食堂の中を煙幕を張る。それと同時にアニエスは突入し、入り口のほうでも銃士隊が突入した。

「今よ。」

この煙幕をチャンスと見た、茂みに隠れていたキュルケ等も中に入ったその時、

「本当に、貴様らは甘いな。」

炎でなぎ払われた。

「え?」

遅れて入ったルイズと才人は驚く。完全に煙幕が張られているのに、まるで見えているように炎を放つメンヌヴィルが居たのだ。

「甘い。甘すぎる。」

アニエスの方に来てメンヌヴィルが言う。

「貴様が銃士隊の隊長か。残念だったな。」

「き、貴様。なぜ、見える？」

「まだ、分からんか？」

「！、まさか、貴様。」

メンヌヴィルは左目を、簡単に外した。

「私は二十年前にある村を焼いたのだ。その時、自分もある男の炎に焼かれてな。そのお陰で失明したのだ。」

「に、二十年前だと!？」

「ああ、確か、ダングルテールとか言う小さな村だった覚えがあるが。まあ、どうでもいいか。」

「じゃあ、貴様が隊長なのか？」

「いや、俺は副隊長だったな。その隊長が、私の体を焼いたのだ。そして、その時に失明したんだよ。」

それに、キュルケは驚愕の眼差しを向ける。その中には、恐怖と言
う感情も混じっているだろう。

「な、何で、見えるの？」

メヌヌヴィルは目を戻し、

「蛇は温度で獲物を見つけると言う。俺も同じだ。炎を使う内に、
随分と敏感になったのだ。まあ、歴戦の兵も研ぎ澄まされた感覚で
獲物を見つける言われているがな。」

キュルケに近づいて説明をする。そして、髪を掴み。

「つまり、温度で人の見分けすらも付くんだ。嗅ぎたいな、」ひっ。

『貴様が炎で焼かれる香りが、嗅ぎたい。』

一見、狂っているともとれる発言だが、メヌヌヴィルは真面目だっ
た。キュルケを持ち上げると、床に投げつけて

「い、いやー！！」

杖を構える。キュルケは、完全に恐怖が体を支配して何も出来ない。
と、次の瞬間に蒼い炎がメヌヌヴィルを包んだ。蒼い炎は、紅い炎
よりも温度が高く、出すにはより高度な技術が必要だ。そして、そ
れを放ったのが。

「私の生徒に、手を出すな。」

杖を構え、ゆっくりと進んでくるコルベールが居た。

「こ、コルベール先生？」

ルイズと才人は呆気にとられる。今まで、コルベール先生から殺気がする事はなかった。しかし、今はここに居る誰よりも殺気を放っているのが、素人のルイズや才人でも分かる。

「全く、思ったよりも抵抗者が多いな。」

メヌヌヴィルは体中に纏わりついた蒼い炎を消し、体勢を立て直して相手を見る。そして、その顔がみるみる笑顔に変わっていく。

「おお！！隊長殿。まさか、こんな所で出会えるとは！！。」

コルベールが、ダングルテールを焼き払ったときの隊長だったのだ。

「こ、コルベール先生が、隊長？」

全員が驚いている。優しかった、コルベール先生がまさか、隊長だったのだから。

「なんだと!?!。」

アニエスは驚愕と、そして怒りを込めて言う。

「貴様、視力を失っていたのか。」

コルベールはメンヌヴィルを見て言う。彼自身、確かに彼を焼いたが、まさか視力を失っているなど思いもよらなかった。

「そうさ。隊長殿のお陰でな。」

メンヌヴィルはそう言って自分の杖を構える。

「コルベール先生、本当なんですか？」

ルイズがコルベールに聞くが、コルベールは答えようとしなない。

「先生？」

メンヌヴィルは言い、笑い出す。

「貴様は教師か。どうりで戦場で会わない筈だ。まさか教師になっていたとはなあ。炎蛇えんじやと呼ばれた貴様が。」

「炎蛇？」

コルベールの傍にまだ倒れているキュルケが言う。

「そうだ。この男は嘗て、炎の蛇『炎蛇』と呼ばれた炎の使い手だ。女だろうと子供だろうと容赦なく燃やし尽くした男だ。」

アニエスは、もう一度コルベールを見る。そして、かつての故郷。ダングルテールの事を思いだす。

「そして、俺から両の目の視力を奪った男だ。」

「でやあああああ！！！」

突然、コルベールの後ろからメンヌヴィルの部下が攻撃を仕掛けるが、

「むん。」

それを避け、蒼い炎で攻撃してきた者を倒す。

「さすがは隊長殿。腕は衰えていないようだな。そうでなくて困る。」

再びメンヌヴィルは笑い出す。

「ミス・ツエルプストー。ミス・タバサを抱えてこの場を離れるんだ。」

その間に気を失っているタバサをキュルケに任せ、コルベールは前に出る。

「才人君、ミス・ヴァリエール。みんなを連れて逃げなさい。」

才人とルイズも言われたとおりに人質となっている皆のロープを切り、外へと逃がす。

「先生は？」

「私は大丈夫だ。」

そうやって炎でメンヌヴィルを攻撃する。しかし、メンヌヴィルも炎で攻撃し、空中で両者の攻撃を相殺してしまった。

「コルベールが、私の仇。父も、母も。故郷の、仇。」

怒りで我を忘れているアニエスは、戦いの真ん中に居る事に気づいていない。

「アニエス君、私から離れるんだ。」

その言葉に、我に返るが。それは、

「そうはいくか!！」

逆効果だった。刀を抜き、コルベールへと斬りかかる。

「ふん。」

それを見たメンヌヴィルは炎の方向をアニエスに向ける。

「く。」

急いでコルベールがアニエスを押し倒し、

「ぐおあああ!!!」

自らで炎を受ける。炎がコルベールの体を包み込み、コルベールはもがいている。やっと、火が消えた所で、コルベールは床に倒れてしまった。

「隊長殿、焼け死ぬ気分はどうだ？」

コルベールはゆっくりと立ち上がる。アニエスは、そのコルベールが焼けて剥き出しになった肩の所の火傷の後に気付く。それは、今の炎で着いた傷ではない。明らかに、遠い昔に負った傷だと分かる。

「まさか。」

アニエスには見覚えがある。自分をダングルテールから助けてくれた人。その人は、今のコルベールと全く同じ場所に火傷の跡があった。

「ずっと、この瞬間を待っていたのだ。お前を焼き殺す日を。」

メンヌヴィルはその後もコルベールの事を言い続けるが、この間にコルベールは魔法の呪文を詠唱していた。

「お？」

コルベールは杖を振り、蒼い炎をメンヌヴィルに向かって放った。完全に油断したメンヌヴィルは

「ぐお、うわああ。」

燃え上がる。しかし。

「流石だな。炎の蛇。」

自分に纏わりつく炎を払い、平然と立っている。コルベールはもう一度放つが、今度は苦しみもせずに払う。

「今の俺は、あの頃の若造ではない。俺の炎は、隊長を越えたのだ。」

「あの頃の、儘だな。」

「何？」

「慢心、あの頃のままだな。」

再び、蒼い、先ほどよりも大きな炎をメンヌヴィルに放つ。

「な!？」

メヌヴィルは驚くが、その炎は真つ直ぐとメヌヴィルに向かって来て。

「ぐ、うおおお、が、あああ!!」

今度は、演技ではなく完全に苦しんでいる。

「お、おのれ。」

何とか炎を払い、呪文を唱え、杖にこれまで以上の炎を出現させる。

「く。」

コルベールも、先ほどの攻撃で全ての力を使い果たし、力尽きる。

「隊長、これでおわ、!!」

「我が故郷の仇だ!!」

アニエスが、油断しているメヌヴィルに一撃。腹を刺し、体を剣が貫通した。

「ぬ、おお」

これには流石に耐えきれなかった。メヌヴィルは、完全に死亡した。

「なぜ、あの時助けた？。ダンゲルテールを焼き払ったあの日？」

アニエスはコルベールの下に来て、言う。

「間違いに気付いたのだ。」

コルベールは弱弱しく言う。そこへ

「コルベール先生。」

「先生。」

ルイズやキュルケ、才人が駆け寄ってくる。

「どけ！！！」

「な、何する気？」

「邪魔するな。」

そう言って、剣を振り上げる。

「やめて、アニエス！！！」

ルイズがアニエスを止めようとする。キュルケはコルベールを庇う。

「どけ！！私はこの日の為に生きて来たんだ。20年、20年だぞ！！！」

「アニエス、やめる!!」

その後も、コルベールを庇おうとするが

「ミス・ツエルプストー。どいてくれ。」

コルベールは意識を取り戻して、庇っているキュルケを退かす。

「アニエス君には、私を殺す、権利がある。あのダンゲルテール事件の時、初めて罪に気付いた。命令に従う事が、正しい事だと思っていた。でも、違う。たとえ戦争であっても、人を殺せば罪だ。アニエス君、私を殺せ。でも、私を最後にもう人を殺すのをやめてくれ。」

「貴様、何を抜け抜けと。」

振り上げた剣を振り下ろそうと力を込める。

「やめて、アニエス。」

「邪魔するな!!」

そこで、キュルケがコルベールの方を見て。

「アニエス、剣を降ろして。」

「何故だ!!」

「もう、亡くなったわ。」

「なん、だと？」

アニエスは刀を降ろそうとするが、もう一度振り上げ、コルベールの足元に突き刺した。

コルベールは、その後遺体をキュルケが引き取った。学院は暫くの間休校。

コルベールの研究室

「ローレット、聞こえるか？」

「何？才人。」

才人はコルベールの地下室の無線機でローレットのシュトゥーカに無線を入れていた。

「コルベール先生が、亡くなった。」

コルベールの死をローレットに伝える。

「そうか。」

「驚かないのか？」

「すまないな。驚いているんだが、緩いだろう。戦友の死を聞き過

「きたためか、死への驚きが緩いんだよ。」

「慣れたくないよ。」

『前も言った通り、人の死には慣れるな。もう、味わう事などない。』

「それで、今どこに居るんだ？」

『アーンベルグだ。ガリアの西の所だよ。』

「なんでそんなところに居るんだ？」

『詳しくは話せん。』

そこへ、才人の後ろからルイズが無線機を引ったくり。

「ローレット聞こえる？早く帰ってきなさい。約束のお父様に会わせてあげる。」

『そいつは嬉しいね。一度、会ってみたかったし。』

そう言ってローレットは無線機を切る。

アーンベルグ

「コルベールが死亡か。ルイズは平静を装っているような声だったし、学院は相当ショックを受けているだろう。」

「ロー兄、早く終わらせようよ。」

ヒュドラーは車輪止めを入れ、主翼に昇ってくる。

「ああ。分かっているよ。」

風防を開け、シュトゥーカを木などで偽装し、アーンベルグへと入った。

魔法学院の危機 3 (後書き)

魔法学院の休校が多いと突っ込まないでください。戦争で休校だった分を使っているのです。

盗人 前編

アーンベルグ

「ここが、盗人の現れた場所か。」

アーンベルグ。ガリア西方の小村で、周りには林などの緑に囲まれた静かな田舎だ。

「おお、貴方様が王宮より派遣されたという騎士様ですか？」

と、村の村長が出迎える。

「そうですが、貴方は？」

「申し遅れました。私はこの村の村長をしております、リーベンです。」

「リーベン村長、ここに盗人が現れたという報告を受けて来たのだが、詳しくお聞かせ願えるか？」

「はい。」

と、立ち話も難なので、村長家に入った。

リーベンの家

「すみません、私どもの村は何分、貧乏なもので。」

「ここら一带を治めている貴族は？」

「それが、ここは誰の土地でもありません。いわば、自治村なので
す。」

「まだ、自治村が残されていたのですか？」

ハルケギニアはほぼ全てが王宮が貴族が治めている。だから、自治
村などかなり珍しい存在だった。

「ねえ、ロー兄。自治村って？」

と、隣に座っているヒュドラーが聞いてくる。

「自分たちで村を動かしているって事だ。貴族など、大きな領地を
持っているとは細かな配慮が出来なくなるからな、自治にすればそれ
は無くなる。しかし、経済の面では苦勞するんだ。」

「はい。ご覧の通り何も無い村です。自給自足で賄っております。
そして、その盗人はその自給自足で賄っていた食料の何割かを盗み
まして。」

「食料を？犯人に心当たりは？」

「全く、見当も付きません。ただ、この村の者では無いと考えてお
ります。」

「根拠は？」

「この村は先ほども言った通りに貧しく、全員で協力しなければ生きていけません。なので、その中に裏切るような人は居ないと考えております。」

確かに、そんな状況で自分たちの村の誰かが裏切ったなんて言うのは悲しいだろう。

「分かりました。」

そう言って立ち上がり、家を出た。

「ねえ、ロー兄。どう見るの?」

「村長の言うとおり、少なくともこの村が貧しいのは嘘ではない。しかし、この村に犯人が居ないと言うようには、考えていない。」

「なんで?」

「先入観だけで仮定すると、冷静な判断力を失う。まずは、聞き取りだ。」

そう言い、全ての家一軒一軒を聞いて回ったのだった。

夜間、シュトゥーカの駐機してある場所で情報の整理を始めた。

「まず、数人の容疑者に絞り込んだ。」

怪しい者は3名。最近引越してきたという『クリス』氏、そして農業従事者の『アシル』氏と『ダミアン』氏。そして、目撃証言から犯行時に黒いマントと動物の仮面を被って行う事。そして、走るのはそれなりの速さだと言う事。

「この3名が一番怪しい事が分かった。」

「どうして?」

「この3人の内2人の農業従事者はここ最近の生産高の低下があった筈なのに突然高い生産高にまで跳ね上がった事。そして、その下がり気味だった生産高と盗まれた量を合計するとその高い生産高にはほぼ合致している。盗んだのを食べる訳にはいかないだろう。自分の評価を上げれば、自分の食料振り分けは上がるし、後の事を考えれば普通はそうする。そして、最近引越してきたものは、この村の隅々まで知っていたことだ。」

「そんな理由で?」

「引越して来たばかりなのに隅々まで知っているのは変だと思っ
てな。まあ、一番警戒していない人間だからいいだろう。」

紙にこの村の地図を簡単に書き込み、それぞれの容疑者の家の位置なども書き込んだ。

「村長の話では、ここ最近、2日おきに盗まれるそうだ。そして、
今日が。」

その時、村の方から叫び声が響く。

「行くかな。今日がその、2日おきの日だから。」

「うん。」

急いで村へと向かった。

アーンベルグ

「逃がすな！！そっちへ行ったぞ。」

「違う、こっちには居ない。」

「屋根だ！！、屋根の上に居るぞ！！！」

着いた時には住民が走り回っていた。

「あ、騎士様。あそこです。あいつが盗人です。」

ローレットを見つけた一人の村人は、屋根に居る盗人を指差して言う。

「分かりました。」

そう言って辺りを見渡す。

(容疑者の3人は、いずれも居ないな。)

それを確認した。

「さーて、今夜の盗みはこれで終了しましょうか。」

屋根に上ったローレットは杖ではなく、腰に差している刀『子狐丸』を抜く。

「ふふふ、ローレットとか言ったな。」

その盗人はそう言いながらローレットの方を見る。動物の仮面、犬の仮面を被っていて顔は見えない。

「声を変えているのか。」

明らかに機械音声だった。ノイズらしき音も聞こえるし。

「どうやって、声を変えているか知らないが。ここで、貴様を捕まえてやるよ。」

ローレットは捕まえて、その機械音声を何処で手に入れたか聞き出そうとした。明らかに、変声機の声。そして、この世界に変声機はある筈がない。だから、何者かが提供したことになる。

「ふふふ、笑わせるなよ。今、この場で返り討ちにしてくれる。」

その盗人も、刀、いや、サーベルを抜いた。

「ズルフィカールとは。また大層な名剣をお持ちで。」

ズルフィカール。イスラム圏では伝説の名剣として名高い剣で、形状には諸説がある。この話では、一般的に出てくる先端が二股に分かれていると思えばよい。

「お前の持つその刀にも勝るぞ。」

「おやおや、日本刀の精巧さを知らぬようぞ。」

日本刀は、その美しい形状と高い切れ味。そして耐久性などから海外でも多くのマニアがおり、日本刀は偽物でも高い値段が付けられる。

「いざ、尋常に。」

ローレットは刀を構える。相手も、それに答える様に構えた。

(珍しい、構えだな。)

刀を、下で構えている。

「勝負!」

ローレットはそれを言い、一気に間合いを詰める。相手は、それに動じずにローレットの詰めを待った。

「ほう、待つとは光栄だね。では、燕返し。」

下から切りにかかる燕返しで、まずは相手の出方を見る。相手はそ

の下の構えで刀を受け止め、そのまま勢いを逃がす。

「主、相当の使い手と見た。」

一旦後退し、刀を構え直して言った。

「ローレット、貴様も相当な使い手だ。その刀も、かなり腕の人間が鍛えたようだな。」

（ははは、まさかお稻荷様が鍛えた。って、言う訳にもいかないよな。）

子狐丸。朝廷から作刀を命じられた三条宗近が満足の行く刀が作れずに困っていた所を、それを助けるために彼の氏神様である稻荷神が童子に化け、打ち、鍛えたとされるつと、言われている。

「いい錬金術師に、鍛えてもらっただよ。」

つと、ローレットは誤魔化した。

「会ってみたいよ。その鍛えた錬金術師。」

「ここで、潔くお縄に付けば、会わせてやってもいいぞ。」

「遠慮させてもらおう。」

「だな。」

予想通りの返答が返ってきた。

「それじゃ、そう一刀、行きますか。」

刀を構え、間合いを詰めようとするが、

「今日は時間をかけ過ぎた。ここで、引かせてもらおう。」

そう言い、いきなり煙幕が張られ、消えた。

「逃がし……たか。」

盗人 後編

「リーベンの家」

「申し訳ありません。盗人は逃がしました。」

ローレットは村長に謝る。

「そんな、頭を上げてください。それにしても、珍しい剣をお持ちで。」

「これですか。」

ローレットは子狐丸を抜き、リーベンに見せる。

「かなり精巧な作りで。今まで見てきたどの剣よりも美しく整った形です。」

「そう言っていたら嬉しいです。」

子狐丸を鞘に収め、村長に向き直る。

「村長、大変言いにくいのですが、この村に恐らくは盗人が居ると思っっています。」

「そ、そんな。何かの間違いでは。」

村長はまだ、この村に犯人が居ないと思っている。いや、信じているのだろう。

「いえ、あの場に居なかったのは三人。その中の誰かしか考えられません。この村の周辺にある森にはある仕掛けがあります。それに掛からなかったので、犯人は村の中です。」

調査の一環で仕掛けておいたセンサーがヒュドラーの手により回収され、調べたところ。一切、反応が無かった。なので、村の中に居る以外に考えられなかった。

「し、しかし。」

「お気持ちはお察しします。しかし、事実である以上は捕まえなければなりません。最悪は、処刑も考えています。」

「そんな。この村に、盗人が。」

村長は俯き加減になる。シヨックなのはローレットでも分かる。貧しい村に盗人が出てしまったのだから。

「それで、ロー兄。村長はどうだった？」

シウトウカの隠してある所に戻ったローレットは待たせているヒュドラーと合流した。

「どうもごつもない。相当シヨックを受けていた。気持ちは分からないでもないがね。」

ローレットは背中に隠してあるホルスターからモーゼルC96を取

り出す。日本でも国産化されたドイツの軍用自動拳銃である。

「ロー兄、それって。」

「そうだ。私の世界から持ってきた自動拳銃だ。この時代と比べて遙かに精度も高い。」

日本でもソ連崩壊まで元日本軍将校が隠し持っている事例がある。今でも、隠し持っている人が居るのではないかと言われているほどだ。

「本当に、処刑するの?」

「聞きたいことがある。その後なら、殺るつもりだ。」

「出来れば、生きて罪を償って欲しかったけど。」

「それは、無理だな。恐らくは、その盗人。裏にビツクネームがいる可能性がある。」

「どうして?」

「声を変える機械やあのサーベル。こちらの世界では、まだ存在するはずも無い。誰かが、提供したんだ。」

ローレットは脳をフル回転させて考える。ローレットにとっても、それが出来るのは一人しか知らないが。

「どんなに考えても、提供した奴は一人しか思い浮かばんな。」

「え？」

「シェフィールドだ。恐らくは、奴が提供したんだ。しかし、分かん。提供しておいて私に殺させる理由はいつたい？」

「ロー兄、今日は遅いから、明日考えようよ。」

「そうだな。」

シウトウーカの風防を開け、操縦席と後部機銃手席にそれぞれ入った。

「まさか、今日も現れるとは。」

次の日、騒がしいと思って入ってみれば、例犬の仮面をかぶった盗人が居る。

「二日おきじゃなかったのか？」

「そういう訳でもない。」

盗人は例の機会音声で返す。

「昨日のようにはいかん。逃げずに、遣り合おうか。」

刀を構え、ローレットが構える。

「無論、今日は余裕を持って計画を立てた。遊ぶ余裕をな。」

盗人もサーベルを構る。

「では、尋常に。」

「勝負！」

盗人がそう言い、今度は昨日と違って盗人が間合いを詰めてくる。

「そう来てくれて感謝する。」

燕返しを繰り出した。昨日とは、比喩物にならないほど鋭い切れで。

「受け止めるとは、流石だ。」

しかし、それを二つに割れている所で上手く受け止め、勢いを流した。

「なあ、盗人さんよ。大人しく、お縄に着くなら、命までは取らんぞ。」

「嘘も下手だな。依頼されていることぐらい分かっている。」

「やはり、誰かに情報を貰っていたのか。」

ローレットはそれを聞き、迷いが取れた。そして、今日中に捕まえられると分かった。

「こじじやあ場所が悪いな。」

盗人がそう言いだす。

「同感だ。殺し合いに、観客はいらん。」

刀を弾き、一斉に屋根からジャンプ。そのままお互い距離を保ったまま森の中まで全力疾走。

・森―

「姿を隠したか。」

しかし、森の中に入ると、突然盗人が姿を消した。

「居るのは分かっている。出てきたらどうだ？」

刀を構え、反撃できる体勢をとった。・・・筈だった。

「羽交い絞めとは、また卑怯な手を。」

いつの間にか背後に回られ、羽交い絞めにする。

「悪者は、卑怯な手を使って生きていくんだよ。綺麗事は、善人に言うんだな。」

「ああそうかい。」

「死ぬ前にいい事教えてやる。この盗みは依頼だ。」

「誰の？」

「本来は依頼主の素性を話さないのがプロだが、死ぬ人間にはいいだろう。ガリア王室だよ。」

「やっぱりか。」

そこへ、ヒュドラーが森の中に入ってきた。

「ロー兄!!--」

「動くなよ、お前の正体は分かっている。変身すれば、こいつの命は無いぞ。」

ローレットの首を絞めている腕に力を入れる。

「じゃあ、こつちもいい事を教えてやるよ。」

「何?」

ホルスターからモーゼルを抜き、

「人を殺すときは。」

引き金を引いた。盗人の頭部に命中した。

「黙って殺すんだな。」

血を噴出しながら、倒れた。

「さーて、顔を拝ませておらうか。」

ローレットは犬の仮面を外す。

「やっぱり、最近引っ越して来た奴か。」

名前を聞かなかったが、この顔は最近引っ越してきた奴にしか見えない。

「これで、こっちの依頼は完了だ。」

モーゼルをホルスターに収め、落ちている子狐丸を鞘に収めた。機会音声は仮面に取り付けてある変声器から出ている。

「これで、また王室の汚れた真実の一つが露呈したな。」

・リーベンの家・

「引っ越してきた者が犯人だったとは。」

村長に犯人を報告する。村長はかなりのショックを受けている。

「彼は、王都から追われてここに来たと言っていました。まさか。」

「とりあえず、私の仕事は完遂しました。」

「はい。ありがとうございます。」

「では、これで。そうそう、12000エキューほど後で落下してきますが、ご自由にお使いください。」

「え？」

村長は驚きながらも、ローレットが出て行ったため、詳細は聞けなかった。

「もういいの？」

「ああ。それに、ルイズの父上にも会いたいしな。」

シュトウカのエンジンを掛ける。

「爺や、指示した地点に寸分変わらずに投下してくれよ。」

『お任せください、坊ちやま。』

爺やは現在、金貨を積んだ零式輸送機に搭乗し、アーンベルグ上空目指して飛行していた。

「それじゃあ、トリスティンに戻るとしよう。」

加速し、離陸。魔法学院目指して飛行を始めた。

ルイズの実家 前編

魔法学院

「見えて来たな。」

出力を下げ、少しずつシユトウーカを降下させていく。

「今日から、これを研究する人も居ないのか。」

ロ・レットはコルベール先生の死を聞いたとき、冷静にはいたが正直、今では泣き崩れなかったのが不思議だと感じている。

「ロー兄、分かったけどこのままじゃあ、車輪が。」

「え？」

操縦を一瞬でも忘れたのが運の尽きだった。

「うわ！」

固定脚が学院の壁に激突。壁は壊れなかったが、固定脚は破壊された。

「?まれ!。」

胴体着陸を試み、何とか停止させた。

「こりゃあ、修理が必要だな。」

破壊された固定脚を見て、ローレットが言う。

「これじゃあ、暫くは乗れないね。」

「仕方がない。新たに運び入れた機体の内の一つを修理が完了するまで乗るとしよう。」

コルベールのハンガーには2機、別の機体が運び入れていた。一機は一式陸攻。もう一機はシュトルモビク。これで、ハンガー内には零戦と一式陸攻、シュトルモビク、シュトゥーカが置かれていた。

「ローレット、ヒュドラ。」

そこへ、ルイズがやって来た。

「それじゃあ、乗れないわね。」

ルイズは破壊された固定脚を見るなり、そう言う。

「操縦をミスってね。」

「アンタでも、ミスる事はあるのね。」

「人間だからな。」

ルイズの部屋

「それで、本気で実家に連れて行ってくれるのか？」

「そうよ。丁度、お父様から呼び出しを受けたから。恐らくは、学院の襲撃で私の身に危険があったから、戻れって言ったんだと思うわ。」

「ま、子思いの良い親だな。」

ローレットは関心がる。彼が元居た世界では、子供が居なかった。婚約相手が戦禍による爆撃で死亡し、それから新たな婚約相手を見つける気にはなれなかったのだ。

「丁度、良いと言えはいい。できれば、会いたかったしな。どんな親なのか、虚無の担い手の親は。」

「アンタも、それを知る数少ない人の一人よ。お父様やお母様は知らない。」

「で、一式陸攻で行くって訳か。」

才人と合流し、ハンガー内に駐機されている一式陸攻を見る。

「これの方が早いから。」

「幾ら、オリジナルエンジンに換装してあるとはいえ、飛行機が着陸する場所があるのかよ？」

「庭なら十分に可能よ。」

「庭、広いんだな。」

「当然よ。トリステイン内でも名門中の名門よ。」

「分かったよ。」

そう言って、機体に乗り込んだ。

「ルイズ、副操縦席に座ってくれるか？」

ローレットは案内役にルイズを副操縦席に座らせる。

「機内無線機を付けてくれ。」

機体内部には乗員同士が連絡し合うための機内無線が装備されている。それを、四人は付けた。

「それじゃあ、エンジンを掛けるぞ。」

プロペラが回転を始め、3回回転したところでエンジンを点火する。

「コルベール先生。流石ですね。」

ハンガーの扉が少しずつ開いていく。蒸気機関を流用して、自働扉を開発したのだ。蒸気と水の重さの変化を利用して、扉を開ける仕組みのそれは、ここのハンガーで試験的に実験されており、このデ

「夕を元にこれから王宮などの重要地点に普及しだす予定だった。」

「死んだ後に、有名になる人も珍しくないが、コルベール先生の発明品が世に出回るのは、もう少し先かな。」

蒸気機関を使って鉄道を作り始めている。トリスティンに工場を作り、そこで列車の製造を始めている。そして、線路も少しずつ敷設し始めている。ローレットの領地では、もう既に領地を一周する為の外周列車と細かい所を移動するための路線列車を既に運用し始めているのだ。やはり、ノウハウの差は生産力にも影響を及ぼしている。

「じゃ、滑走するぞ。」

スロットルを開き、滑走を始める。オリジナルの2000馬力級エンジンが唸りを上げて一式陸攻の機体を加速させていく。

「上がるぞ。」

操縦桿を引き、離陸した。後は、ルイズの指示通りに機体をその方向に飛ばすだけだった。

「なあ、ローレット。」

才人の声が無線機を介して伝わってくる。

「何だ？」

「戦争つて、そんなに悲惨だったのか？俺つて、歴史でしか習ったことが無くて。」

今の世で、大東亜戦争体験者は貴重な存在だった。今現在、アメリカと戦争をしたことが分からない人間だっている位である。

「悲惨としか言いようがないだろう。特に、本土爆撃が本格に始まった時はまだ良かったが、だんだんジリ貧になって、最後には食べられる食料だつて真面になかった時代だ。」

ローレットはそう言いながらかつてのゼロ戦乗りとして本土を守れなかった悔しさを思い出す。

「まあ、運が良かったよ。日本のエースクラスの人がほとんど死んでいく中、生き残れたんだから。特に、トラックが一番良く覚えている。」

トラック島空襲の際、ローレットは第6航空隊として迎撃に上がった。そこで、戦闘機23対1と言う絶望的状况に陥ってしまった。一緒に上がった味方は次々と撃墜され、ローレットも逃げながら反撃。2機を仕留めたが、その直後に機体が被弾。振り切り、トラックから脱出した秋津州の近くに不時着、救助された。

「あの戦闘は、改めてアメリカとの物量の差を思い知ったよ。ミッドウエーの敗北、南方での敗北、マリアナでの敗北。正直、マリアナが陥落した時点で、已めるべきだったんだよ。」

「マリアナ、教科書ではここでアメリカの新兵器が出たとか。」

「ああ。今でも覚えている。突然、目の前で爆発する対空砲弾、彗

星がよく持ったと思うよ。飛行長へ無理を言っつて彗星で出撃させてもらった。零戦じゃあ、恐らくここで撃墜されていただろう。」

「ローレット、よくそんな中を戦ったと思うよ。それに比べたら、この時代の戦争なんか子供の遊びだろう。」

「この時代は、まだ騎士道の名残がある。第二次大戦じゃあ、最初はあったが、総力戦によつて余裕が無くなり、そんな事を言っていられなくなつたよ。」

「悲しい話はそこら辺にしてくれない？聞いているこっちが悲しくなるわよ。」

ルイズが割り込んできた。

「見えたわよ。」

目の前に、大きなお屋敷と庭を持つ立派な敷地。

「これが、ルイズの実家か。」

「そうよ。」

丁度、庭に着陸できるスペースがあった。何も無い、好都合に一直線のスペース。

「着陸するぞ。」

「さっきみたいにミスらないですよ。」

「保障する。」

機体の高度を下げ、車輪を降ろす。着地し、庭のスペース一杯を使って停止した。

ルイズの実家 中編

ルイズの実家

「なあ、もしかして庭へ着陸する事、話してた？」

ズラリと並んだ執事とメイドを見て、ローレットはルイズに言う。

「当然よ。」

「最初から、飛行機で行くことを前提にしてたんだな。」

ローレットは溜め息交じりに言う。

「お帰りなさいませ、ルイズ様。」

執事とメイドが頭を下げる。歩く道は赤い絨毯。ここら辺は、抜かりが無かった。

「アンタも、貴族なんだから堂々としてなさいよ。」

ローレットは少し気まずそうに歩く。

「何時から、呼び名がアンタになった？まあ、どう呼んでもいいから、別に気にしないが。それに、どうも慣れないな。この環境は。」

両親の死後、平民と貴族との階級社会を撤廃させ、皆平等を始めたローレットにとってここまで丁寧にされるのは久しぶりだった。

「全く、突然お父様が呼び出したからって、奇妙な竜で乗り付けてくるなんて。おまけに、見ず知らずの他人まで連れてくるなんて。」
と、眼鏡をかけ、金髪の長身女性と

「いいじゃないですか、姉さま。それに、そちらの人は貴族みたいですよ。」

ローレットの方を見て、ルイズと同じ桃色ブロンドの女性が先ほどの女性に言う。

(中々、洞察力はあるみたいだな。)

ローレットは感心した。

屋敷内

中に案内され、食堂まで行った。

「アンタはどうするの？食事は？」

「パンを二切れ程度あればいいよ。ヒュドラーの方が、食事は必要だよ。」

そして、才人の方を少し見て

「才人にも。」

「わ、分かったわよ。」

ルイズはメイドに言ってパンを二切れ持って来させた。

「ありがとう。」

それを持って、外に駐機されている一式陸攻の許へ向かった。

「整備しないと、帰れなくなるからな。」

持ってきた整備用の機材でエンジンなどの点検を行う。

「もう少し、本格的な機材があればいいんだが。贅沢言えんからな。」

領地にも、そこまで十分な機材があるわけでは無い。今は航空機よりも陸上兵器と蒸気タービン搭載の輸送船の方に力を注いでいる。その為、航空機用機材は訓練の度に消費されている。

「早く、ある兵器を完成させて、そこに向けていた人材を航空機用機材の生産に向けたいよ。」

ある兵器は、後に重要な役割を担うようになってくる。それについては、現状で詳細を明記することが出来ない。

「うーん、やっぱり専門じゃないからな、分からん。」

パイロットが整備する事などはまず無い。出撃前に軽い点検をする

位が良い所だろう。

「え〜と、確かここをこうして。」

何とか整備を終えた。

「ふ〜、疲れた。航空機の整備って、案外疲れるんだな。」

つと言う訳で、固定化の魔法を掛けて機内に入った。

「ここで寝るかな。ルイズに見られたら、貴族らしくないって言われるだろうな。」

ベッドなど、長距離飛行用に改造された一式陸攻は夜間の睡眠でも案外快適だった。

「ロー兄、ここに居たんだ。」

突然、ヒュドラーが機内に入って来た。

「ビックリした。何だよ？突然。」

「部屋を用意してくれたけど、ロー兄が見当たらないってルイズが。だから、探してたの。」

「ルイズが、ね。」

御厚意を無駄にしたいくない為、気が進まないながらもその部屋で休

むじとにじたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7476r/>

ゼロの使い魔 転校生日記

2011年11月5日22時37分発行